

テンプレ転生！～転生したのは、色々とおかしいダンまちの世界～

ねむねむお布団

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

あらすじを要約して三行に纏めると、

「テンプレ転生したダンまちの世界は普通じゃなかった。

原作キャラTSとか貞操観念逆転とか、色々とおかしい。

本当にこの先、生きて行けるのか？」

こうなる。大体こんな感じ。

（以下が長つたらしいあらすじ。読まなくても大丈夫です。）

テンプレもテンプレ、ネット上に溢れ返る「トラックに轢かれた後に神様に特典を与えられて転生する」と言う展開に遭遇する主人公。典型的な流れに苦笑いしながら、主人公は神様特典を魂に宿して転生する。その転生先は、『ダンジョン』に出会いを求めるのは間違っているのだろうか……通称『ダンまち』の世界。

前世では結構好んでいたラノベの世界に転生し、さてどんな人生になるのかな？と楽しみにしながら、いざ新しい人生を歩み始めると――

「アイエエエ!? オトコ!? オトコナンデ!?

「そのチ○コ貰い受けるツ！ さあ、子種置いてけ！」

「ファツ!? 男!? ……ヌツ（急死）」

「そ、そんな……殿方なんて……きゅう」

なんか色々とおかしい常識に満ち溢れた『ダンまち』の

ようです。具体的には、男女比変化とか貞操観念逆転とか原作キャラTSとか。やつぱりこの世界狂ってる。バグってる。

「……大丈夫かよ、この世界」

常識的な意味でも、貞操的な意味でもそう心配をしながら主人公はチート＆ハーレムな転生ライフを築いて行く。転生から色々と懸念しながら、何とか安全で楽しい人生になる事を祈りながら。割と切実に。

目 次

一応はプロローグである始まりのお話。	1
プロローグが終わつてから続いている次のお話。	6
幼馴染みが自分を好いていると分かつた時の恥ずかしさは異常であると言つたお話。	15
美少女幼馴染みと同じ部屋で一夜を過ごすとか正直如何わしい雰囲気しか漂わないだろと言うお話。	17
そしてなんやかんやハッピーエンドで良いんじやないかなと言う感じのお話。	25
宿屋の一室の件には実は犯人が居て、その人達にとある男がアイサツをするまでのお話。	36
そして変態とオリ主は出会い、ギャグから戦闘シーンへと移行するお話。	44
戦闘を終えてからツンデレ狼系美女(TS)と出会つたよと言うお話。	59
間話・そうして彼と彼女のラブシーンが差し込まれて読者は砂糖を吐くであろうの巻。	74
原作開始のシーンと言う題名ではあるけれど実質改変されすぎて滅茶苦茶であるお話。	91
回想とか諸々交えて結局面白味無いんじやないかつてお話。	108
オリ主が居ない時のシーンは何故かシリアルス成分マシマシになるのは何でかなつてお話。	123

一応はプロローグである始まりのお話。

テンプレ転生をした。

それはもう、漫画にもラノベにもありふれたような、見飽きたような展開のベタベタなテンプレ転生をした。

ある日突然にトラックに轢かれて死んで、その後に神様の気まぐれで特典を貰つて望む世界に転生する。

……よくあるテンプレ展開ですね、本当にありがとうございます。典型的な二次創作の最初をなぞつたような展開、自分でも思わず「テンプレ乙」と思つてしまつた。

俺自身はラノベも二次創作も好んで読み、こう言うテンプレモノは好きだが……まさか、自分がこう言う展開に巻き込まれるとは思わなかつた。びっくり。

下校中に正面からトラックに轢き潰され、気がつけば謎の青年（イケメン）の前に立つていて。

「面白そうちだから、暇潰しにキミを転生させるねー！」と希望する転生先と神様特典を尋ねられ、そのまま転生をした。

……ベツタベタ。今思うと、本当にベタベタだね。

現在に至るまでの経緯を思い返し、ふと苦笑いが湧き出てしまう。

「……はは

二度目的人生、この『ダンまち』の世界で俺は原作開始となる辺り……主人公「ベル・クラネル」と同い年となる十四歳まで成長した。とある村で暮らし、とある事情から村を出て、とある目的から『ダンまち』の舞台である場所……迷宮都市、オラリオへと幼馴染みと一緒に来ている。そう、来ている。

目の前に本で読み空想した、あの景色があるのだ。アニメである程度オラリオを見たとは言え、やはり自分の目で本物を見た時の衝撃は凄まじい。言うなれば、感動だろう。

……ああ、本当に感動しているとも……。

「……ははは

またも笑いが湧き出る。……おかしいな、何故だか引き攣ったよう

な笑いが止まらないぞ？あれれー？

自分の頬が完璧に引き攣つた状態に白々しく首を傾げ、俺は現実から目を逸らす。目の前の景色に感動はしようとも、起きている光景までは許容出来なかつたのだ。

……そう、この状況はあまり感動に浸つていられる程の物では無いからだ……。

この転生から現在に至るまでの人生を思い返すのも、前世の事をふと思いつくのも……俺の目の前で起きてている、出来事が現実逃避と言う行為へと促しているのだ。

……へへ、苦笑いが止まんねえぜ……。

そうして口元を引き攣らせている俺に、隣に居る共にオラリオへと来た幼馴染みは……優しく微笑み、天使のような穢れの無い笑みを向けてきた。その兎を連想させる容姿の彼女の笑顔は、天使を思わせるような優しい笑顔で……あゝ癒されるんじや、。

「……大丈夫だよ、ユキハは僕が守るもん」

その可愛らしくも頼もしい宣言に、俺は引き攣らせていた頬が緩むのを感じる。抱き締めたくなる衝動に駆られるが、其処は我慢。

思わず頭を撫でれば、「……えへへ」と頬を染めてにへらと口元を緩ませる。……何この幼馴染み、やつぱり天使だ可愛いなー！

……なんて。

可愛さで不自然な苦笑いが収まつたものの、俺の頬を引き攣らせる程の状況である事には変わりない。……ああ、本当に……幼馴染みは可愛いのに目の前の奴等はあんまり可愛くねえ。全然可愛いねえ。

逸らしていた視線を戻し、現実へと戻つて来る。

そして、俺の目の前に広がるのは――。

「オトコオ……おとこオ……男オ…………ふひひ、コイツあ上玉
だア……ツ！」

「はあ……つ、はあ……つ！ ああ、もう堪らない……つ！ 今すぐ襲いたい……つ！」

「おい、デュエル（隠語） しろよ」

明らかに発情した様子の、女共。

息は荒く、体を火照らせ、目をギラつかせて俺の事を口ツクオンしている野獣達。……そう、この女は男の俺を狙っているのだ。性的な意味で。

……ほら、やつぱり頭で理解していても現実逃避したくなる時つてあるだろ？この『ダンまち』の世界で、原作とは違う常識やケースに遭遇した時とかさ。

転生して十四年、そこまで生きればその世界の常識は自ずと理解する訳だが……やはりこの世界は、前世と比べて異常だと思う。本当に。

男に取つて良いのか悪いのか、前世に比べて少し違和感が拭えない世界に対しても溜息を吐く。

「……つたく、お前は下がつてろ。コイツらは俺だけで充分だ」「やれやれ」と手の骨をコキリと鳴らし、首をグルリと回しながら幼馴染みへとそう言う。襲つて来ても俺だけで対処する、と言う意味の下がつてろを口にした。

それを聞き、白髪赤目の幼馴染みは不安そうにコチラを覗く。

「……本当？ 怪我、しない？」

「当たり前だつての。たかが三人の女程度、余裕だ」

「むー……女だから危険なんだけど……」

そう心配してくる幼馴染みに、俺は再度ポンポンと頭を撫でて「心配するな」と声を掛ける。……うんうん、やつぱりこの世界の標準的な女じやない幼馴染みちゃんは良いなー。

そう思いながら、俺はそのふわふわとした白い長髪を手で梳いた後に笑みを向ける。尚も不安そうな彼女を安心させるように、名を呼んで言葉を掛ける。

「大丈夫だ、ベル。お前の幼馴染みは、そんな弱くねえよ」

そうして、ニカツと歯を覗かせる笑みを向けると。

ポツ……

何処からとも無く、そんな音が聞こえた。……果たしてそれは、今目の前で顔を赤くしながらもはにかんでいる幼馴染みなのか。はたまた、周りの野次馬の女なのか。

……多分、どつちもか……。

薄らと自分の明るい笑みの効果を威力を知り、「やつぱりこの世界で男は生き辛いだろ……」と思う。マジでこの世界の常識、どうなつてんだよ。コンチクショウ。

「……う、うん……分かつたつ……信じるよ、ユキハ……っ！」

俺の言葉にようやく信じる事にしたのか、原作では男であつた筈の主人公……ベル・クラネル（女）は、ふわりと微笑んでそう言つた。……うん、原作キャラT Sもやっぱおかしいよな。転生させた神は何を考えたんだ……。

兎っぽい美少女となつたベルの幼馴染みである俺は、その信頼を裏切らないようにと目前の（貞操的な）危機に立ち向かう。

ふうと一息吐き、思考を眞面目に切り替えてスイッチを入れる。そして、冷たい言葉と共に野獣と化した女共を見据える。

「――来るなら来い、発情した獸畜生が」

直後、状況は進展した。

→ ↓ ← ↑

さて。

テンプレ的神様転生をした俺だが、その転生先の『ダンまち』の世界は色々と原作との相違点が有つた。

その原作との違う所、と言うのが……まずは常識。

それは、男が女より圧倒的に少ない。それが関係して、貞操観念が逆転している。

また、原作キャラの性別が変わっている。現在確認しているのは、主人公のベル・クラネルが女になつてている事。恐らくは、別のキャラの性別が変わっている可能性があるだろう。

俺が知る上での原作との違つた点は、そんな所だ。ポンポンと多くの事が変わっている、と言う訳では無いが……うん。その分、密度が濃いのだ。色々と。

変わつている常識を要約すると、「男は珍しい」「女は飢えた野獣」と

言つた感じだ。前世で例えるなら、女が極端に少ない為異性に飢える男が多い世界……だろう。

それを逆に置き換えたのが、この世界。どうしてこうなつたかは……まあ十中八九、俺を転生させた神様が何かしたのだろう。強力な特典は貰つたし、転生もさせて貰つたから文句は言わないが。

……ともかく。

この色々とおかしい『ダンまち』の世界に転生したはいいが、これから先どうなるか些か不安を抱いてしまう。と言うか、懸念だらけだ。

俺は好きだつたこの創作物の世界で、どうにか楽しく充実した人生を送りたい。出来ればほのぼのとして、時折熱い展開を迎える日常を。

例え、女が男に飢えていようと。例え、男が恐ろしく少なかろうと。例え、平穀な日常を過ごすのは難しくとも。

……俺は、最高の人生を送りたい……ツ！

「男には勝てなかつたよ……」（恍惚）

「嬉しい……ツ！やつぱり、感じちゃうツ！」ビクンビクン
「オレとツ！もつとデュエル（意味深）しろおおおおツ！」

……送りたいツ！（願望）

プロローグが終わってから続いている次の話。

この世界の女は、恐ろしい。

「……怖い、女超怖い」

様々な意味での恐ろしさを本格的に目の当たりにした俺は、先程の事件の事を思い出しながらそう思つた。

現在はあの事件の対応を終え、漸く迷宮都市オラリオに入つた所。幼馴染みである美少女ベルと共に、適当にブラブラと中を散策している。

その途中、俺はふと先程の女が襲つて来た事件の事を寒気と共に思い出した。

男が極端に減少し、貞操観念が逆転してしまつてゐるこの世界の女性は恐ろしい物だとは、俺自身一応理解していた。転生してからオリオへ旅立つまで過ごしてゐた村では比較的平穏であつたが、それなりに狙つてくる女は居た。やたらと遊ぼうと誘つて来たり、接触がかつたり、性的に誘惑して來たり……色々とあつた。……ただし、その村では幸運な事に無理矢理の行為をする人間は居なかつた。

あくまで、その行為に無理矢理移行させようとする人は居なかつた。

今回の事件……発情した女三人組が俺を強姦しようとした出来事が実際に起こり、この世界の女性の恐ろしさを身を以て知つた。心底、貞操的な意味でも危険を感じた。

……本当に、アレ何なんだろう……。

「えつと……ユキハ、僕はあんな事しないから大丈夫だよ？ 安心してね？」

そんな俺を、心配そうな様子で、気を使つて優しげな言葉を掛けて来るベル。俺を見詰め、安心させようと向けられた柔らかい幼馴染みの笑みに、俺は心に負つたショックが癒されるのを感じる。成る程、天使属性を持つベルはヒーラーだつたか……。

先程の「無理矢理レイプ！野獣と化した女冒険者！」事件では、精神的にも身体的にも辛いモノがあつた。何と言うか、正当防衛として戦闘したのだが……こう、例えるならばメタルスライムも逃げ出す防

御力の高さとハピナスも真っ青になる程のＨＰの多さ）……みたいな、恐ろしい程に心身共にタフ過ぎる女の執念に恐怖した。

更に例えるなら、飢えに飢えた人の前に食べ物を出した瞬間……みたいな感じだろうか。何が何でも食つてやる、と言う食欲と空腹を満たそうと言う気概を発し、罵られようと殴られようと屈しない不屈の勢い。……それを、性欲面に置き換えたのが先程の事件の全貌だ。

と言うか、対処の為に殴った時アイツら喜んでた。「ヒギイ！（恍惚）」「もつとー・もつとお！」「ライフで受ける！ライフで受けりゆうううう！」みたいな感じで。男の攻撃に喜ぶ上、幾ら殴つても向かってくる女とか恐怖以外の何物でも無い。

最終的には勝つたが、戦闘後は凄い疲れた。心身ともに。女性恐怖症持ちの男なら深いトラウマを負うんじゃないだろうか。

まあ、そんなオラリオに入る前に起きた事件を遠い目で思い返し、俺は「女つて怖いなー」と言う意識が自然と芽生えてしまった。尚、例外はあり。

……これからも多分珍しい男である俺を狙つて、（性的に）襲つて来る輩は居るだろう。つまり、俺はこの先どう言うゴキブリも逃げ出すような頑強な女共を相手しなければいけない。殴れば喜び、蹴れば喘ぐ、気絶させるまで闘い続ける変態共を……。

「……（貞操的な意味で）大丈夫かなあ……」

一応、奥の手として持つている『神様特典』の能力はあるが……正直、一般人に比べて化物である冒険者相手に通用するのか不安だ。おかしいな、神様から貰つた能力なのに大丈夫な気がしない。

……その辺は、頑張ろう。超頑張ろう。何が来ても大丈夫なように凄い頑張ろう。

よし、と今後の事（発情した女）に関する意気込みを心の中でして、俺は回想を止める。いい加減に、あの嫌な事件の事は忘れよう。

……忘れよう。

「……本当に大丈夫……？その、僕も女だし、嫌なら離れてるけど……」

と、思考に意識を向けていたのを、ショックで落ち込んでいると勘

違ひしたのか。

ベルは、心底心配そうな様子でそう気を遣つてくる。自分が女であるから、先程の事件での影響に響かせないようにと俺を思いやつてくれる。

……何この子、やつぱり天使じゃないか。結婚しよう。

因みに、こうしたベルのように「男に変な思いを抱かず、常時発情をしない」「男と身近く接していても、息を荒くせず平静を保つて接する事が出来る」「相手を思い遣り、男であろうと距離を保とうと言う考えが出来る」等と言つた女はまず少ない。何せ、大半は男との接触経験、会話経験も少ないのでから、その辺りの当たり前で最良の判断が出来る者が少ないのだ。

その点、この幼馴染みであるベルは前世の事を思い出した上でも最高の女である。恐らく、クラスに居たのなら大人気のアイドル的存在になり、万年告白をされるであろう美少女だ。

……まあ、生まれつき男の幼馴染みが居て、充分に接觸経験があるから普通にしていられるのかもしづれないが……何と言うか、それでも時折アレな時はある。この世界に生まれた女である為、遺伝子的にも魂的にもナニ力刻み込まれているのであろう、例えベルであつても時には――――――あー、これ以上は止めよう。

……まあ、結果として。

「大丈夫だ。ベルは信頼してるし、一番の幼馴染みだからな。寧ろ、離れられたら困る」

ウチの幼馴染みが最高の美少女であるのは確定的である、と言う事だ。恐らくこの世界では、最高峰の女だろう。

この世界で一番信頼出来て、一番好感が持て、一番一緒に居て楽しい幼馴染みだ。そんな彼女に、離れるなんて言われたら寂しい。気遣いでも、離れられたくはない。

……そんな思いを込めて、困ったように笑つて言つたら。

ポツ……

と、少し前に聞いたような音が聞こえた。こう、ナデポとかニコポとかでよく聞くような、そう言つた効果音が……。

直後視界に入つてくるのは、顔を真っ赤にしたベルの羞恥に染まつた顔。

「い、いちば……っ！え、あ、離れられたら困る……っ、あの、え、それって……う、あ……っ！」

……うーん、やつぱりこうした真正面からのストレートな言葉は弱いのか。はは、恥ずかしがり屋だな。

驚きと困惑、喜びと感動……だろうか。そんなゴチャゴチャの感情の混ざる表情のベルは、きっと素直な気持ちを伝えた言葉に免疫がないからこうなつてゐんだろう。

慣れない事だから妙に表情が落ち着かないんだろうな。うんうん、やっぱ慌てたような顔も可愛いな。そんなベルに、普段言う機会が無いであろう言葉もこの際言つておこう。

「……ベルは俺にとつて一番の（安心して共に居れる）女だからな。そう離れるとか言われるのは、困るんだ。気遣いなのはありがたいが、今後は控えてくれ」

「い、一番の（好きな）女！そ、それつて……う、え、本当？」

「？あ、ああ……そうだけど……？」

……何だ、突然に食いついて来て。

まあ、そりやあ一生の中では恐らく一番の女だろう。変な気を遣わずに済むし、お互いの事は大体分かつてゐるし、可愛いし、優しいし、天使だし。

今生では他に出会つた事が無い程、良い女だろう。出来れば嫁に来て欲しくらいだ。ハツハツハ。

……しかし、うーん？何で食いついて來てるんだろうか？自己評価が低いベルの事だから、俺の一番と言われる程の存在感をちゃんと確認しておきたいとか？……お、ありえそうだな。

「そ、それつて！」

と、思つていると。

ベルは先程よりも顔を真っ赤に染めて、両手をグッと握つて俺に叫ぶように問うた。

「ぼ、僕が……（異性として）好きつて事!?」

「え？そりゃあ、当たり前だろう。（一番の友達として）好きに決まつてる」

「ふえええっ！」

即答すると、ベルは更に顔を赤くして叫びを上げた。……可愛らしい悲鳴ですね、ベルちゃん。

思わずニコリと笑みが浮かんでしまう。友達として好きと言われてこんなに恥ずかしがるベル……初心だなあ、純粹で可愛いぞ贝尔よ。

ほんわかとした気持ちで身悶えるベルを眺めていると、再びベルは質問をしてきた。

「そ、その……ユキハは、つまり……これからも僕と、ずっと（恋人として）一緒に居たいって事つ？」

「おう、勿論だ。ずっと（親友として）一緒に居たいぞ？」

「くくくッ！」

微笑んで答えると、ベルは咄嗟に顔を手で覆つて俯いた。何やら、声にならない悲鳴を上げているような気がする。

……んー、直球過ぎたか？でも、なんやかんや鈍感なベルだし、こうまでしないと意図はハツキリ伝わらないだろう。こう恥ずかしそうに悶えるのは、多分「俺達、ずっと友達だよ！」と言う略してズツ友宣言に恥ずかしさを感じているのだろう。もしくは喜んでくれているのか。……そうだといいな。

そうしてまた数秒後。

ベルは、覆っていた手を外して顔を顎にして、俺を見つめる。

……恐ろしく顔は赤く、瞳は涙で濡れている。息は荒く、口元はギュッと何かに耐えるように結ばされている。……少し色っぽく感じる。何かエロくない？気の所為？

「そ、その……」

と、ベルのその表情に胸をドキリとさせていると、彼女は少し上擦つた声で声を掛けてくる。

息が荒く、落ち着かない様子なのは羞恥が未だに暴れているからだろうか……そう推測しながらベルの続きの言葉を待っていると、少し

してからか細くもしつかりと言葉がその喉から吐き出された。

「……僕、も……ユキハが、好き……つ」

……思わず息が止まった。

えー、すつごいビツクリしたあ……コレ友達としてのlikeって分かつてなきや「俺も好きだ！」って反射的に応えてそう。なまじ美少女な容姿で可愛いし、昔から知つてて一番の幼馴染みのベルにloveの意味で今のように言われたら、「結婚しよう」と返してしまいかもしれない。

何か、不思議と告白シーンのように見えてしまった。ええい、そんな訳無いだろうがいい加減にしろ！

一度深呼吸をして、無駄に高なった鼓動と心を落ち着かせる。

そして、俺もその言葉に友達として応える。

「……ああ、俺も好きだ」

友達として。

「……ほん、どう？ユキハ、僕の事、（女として）好きなの？」

「おう。（友達として）好きだぞ？」

「ふああっ……っ！」

問われた言葉に、答えの言葉を返す。

するとベルはこれ以上赤くならないのではないかと思う程に、顔全体を赤く染めた。……はは、友情愛を囁いただけだろうに、何をそんな恥ずかしがつてんだよ。ベルったら。

しかし、まあ……こうして互いに友達として好きと言い合つたんだ。これからは、親友と言う枠組みに入るだろう。

昔からは、なんやかんや幼馴染みつてだけだつたからな。オラリオに来て、友情の度合いもレベルアップしたんだろう。……うむ、喜ばしい事だ。

俺は笑い、「それじゃあ、ベル」と共通の認識を確認する。

「これから、俺達は

「うん、僕達は

——

そして、俺達が親友になつた事を――――――。

「―――――― 親友だな」

「―――――― 恋人だね」

……親友になつた事、を?

……???

「「……え?」

互いに首を傾げ、俺達は顔を見合わせる。

「……ん?」

「……あれ?」

不思議な事に、俺とベルとの認識には齟齬が生じていた。……俺は親友と考えていたのに、ベルは何故か恋人と言う認識に。

……ん? どう言う事?

今までの会話の流れを振り返つても、別段恋人と言う認識に至る原因は……あ。

と、認識の違ひの原因を振り返つた結果、成る程と納得してしまった原因があつた。……うん、これ俺悪いじやん。

……あー、そう言う事があ……。

頬をポリポリと搔き、俺は自分の誤解させるような発言が原因であつたと自省する。……まあ、一番の女とか、そう言う恋愛的な要素を匂わせた物言いにしてしまつた、俺が悪いな……。

己の思いの至らなさに申し訳なさを感じながら、チラリと視線をベルに向ける。

「…………うう…………あう…………」

……蹲っていた。こう、「自分つたら何してんの馬鹿な勘違いとかしちゃつてるじやん馬鹿阿呆間抜けつ!」みたいな、先程とは違う羞恥を感じて、俺と顔を合わせたくなくなつたのだろう。

……すまん。いや、マジですまん。

そうして、俺は謝罪をしようと口を開き……かけ、ふと気づく。

「……あ、れ？」

俺とベルは、確かに先程の会話で食い違いが生じていた。友情愛か、恋情愛かと言う意味での好きの違いだ。

……だがしかし、ベルが言っていた「好き」は異性に向けるlov eの方な「好き」だつた訳で……。

あの時の言葉は、つまりは告白と同義な訳で……。

勘違いとは言え、ベルは恋人になる事を許容していたと言う訳で……。

それを考えると、つまりは、ベルは俺の事が……好きな訳で……ツ

!?
「くくくツツ！」

悶えた。

史上最高峰に悶えた。人生で一番悶えた。

こう、恥ずかしさとか嬉しさとか色んなモノが混ざつて……何だこれ。何だこれ。

頭に血が上り、身体が熱くなり、思考が定まらなくなる。

『ユキハが、好き……つ』

うわああああああツツ!?

あの言葉を思い出してしまう、更に悶える。

脳裏に焼き付いたあの告白と同義の台詞を思い出し、顔を手で覆つて声にならない悲鳴を上げる。

ベルに謝罪しようとしていたが、今はそれ所では無い。

そもそも、ベルに話し掛ける事も見る事すら出来なくなつた。様々な感情が入り混ざり、思考が乱雑になる。

「うおおおお……つ」

「う……あううう……あああ……つ」

二人の悶える声が重なり、そしてまた互いを意識して悶えて。ベルも何故悶えているのかも考えられなくなる程に、悶えて。

……それから、暫くの長い間。

俺達は、互いに蹲つて呻き声を漏らしながら何かに耐え、悶え続けた。

→

↓

←

↑

♪

幼馴染みが自分を好いていると分かつた時の羞恥ずかしさは異常であると言つたお話。

「…………。」 時は経ち。

互いに「好き」と言う意味を勘違いした会話の後、俺とベルは非常に気まずい雰囲気でオラリオの中を歩んでいた。

時はもう遅いと言う事で現在は宿屋を探しているのだが……そして並んで歩いている途中、会話は無い。時折視線を相手へ向け、偶然目と目が合った瞬間には顔を赤くして目を逸らす。……そんなやり取りを、既に何回もしていた。……なんと言うか、甘酸っぱい雰囲気だ。

つい先程、勘違いの会話……俺の好き（友情愛）とベルの好き（恋情愛）を互いに意識し間違えていた会話をした俺達は、その会話が影響して少々羞恥ずかしい調子となっている。

……俺は、ベルが俺の事を異性として好いていると言う事実に。ベルは、先程の会話で勘違いした状況であつたが告白をしてしまつた事に……深い羞恥を感じている。

それがお互に影響し、いつも通りの調子から外れて口クな会話が出来なくなっている。

「…………はあ」

思わず溜息を吐く。……色恋沙汰には慣れていないから、こう言う時はどうすればいいか分からぬ。

転生して新たな人生を歩み、精神年齢は前世から一回り増えたが……なんと言うか。どんな状況にも平静を保つ、と言う事は出来ないようだ。

……現に、胸はドキドキして顔は熱い。思考も普段より落ち着かないし、やはりこう言つた出来事には耐性が無いらしい。年甲斐もなく、女子から告白されたと言う状況が胸を高鳴らせているのかもしない。

ふと、右隣で共に歩くベルにチラリと視線を向ける。

すると、偶然こちらを見ていたのであろう、ベルと目が合い。

「へへへッ」

咄嗟に目を逸らされた。……髪から覗く耳が赤くなっている事から、先程の事を思い出して羞恥を感じてているのだろう。

あの会話からある程度の時間が経っているのだが、それでも状況には変化無し……。恐らくベルの頭の中は未だに混乱中、羞恥の感情が居残り俺と言葉を交わせないのだろう。……俺は大分落ち着いて来たが、ベルはまだだな。

……これは暫く、マトモに話せないか……。
ベルの様子を見て、そう察して一息吐く。……

……まあ、落ち着くまでは時間を置こう。明日になれば少しは暴れる感情が収まるだろう。

そうとなれば、取り敢えずは宿屋で一晩明かす事にしよう。……いや、まさかつきから宿屋は探しているんだが。

と、さつさと宿屋へ行きベルを落ち着かせてやろうと考え、俺は視線を一層周囲へ巡らせる。

街の風景から、一晩明かせる宿泊施設を求め、ベルと共に会話無く探索をして……。

そして、時間を掛け日が暮れる頃に漸く宿屋を見つけ

「……どうしてこうなった」

——取つた部屋がベルと一緒にあると言う状況に、俺は頭を抱えてそう呟いた。

→ ↓ ← ↑ ?

美少女幼馴染みと同じ部屋で一夜を過ごすとか正直如何わしい雰囲気しか漂わないだろと言うお話。

……俺がベルと同じ宿の部屋となつたのは、何て事は無い。只の部屋数不足が理由だ。

夕方、俺とベルは漸く宿屋を見つけたのだ。宿代は安い上、三食食事付きと言う最高の宿屋。一目見て「これだ！」と決めた俺の判断は最善だつただろう。……その時は。

……さて。そんな好条件の良い宿屋である為か、宿泊出来る宿の部屋は殆ど埋まっていた。種類としては一人部屋、二人部屋と別れていって、空いている部屋を確認した時には一人部屋は全て埋まっていたのだ。

この時点では、俺とベルで別々の部屋で一夜を過ごすと言う選択肢は消えていた。きっと何かの力（運命）とかが働いたのだろう。ふあつぐ。

二人部屋を二人分取るのも余計に金が掛かる……と言うより、そもそも二人部屋が一つしか空いていなかつたので、結果として俺とベルは同じ部屋である二人部屋の一室で夜を明かす事となつたのだ。仕方ないから、この二人部屋で朝を迎えるようだ。

あ、因みに二人部屋に泊まる事は、ベルと視線を交わして問題無い事を確認したから良いと判断したんだ。幼馴染みつてのはこう言う時に視線を交わすだけで会話できるのが良いよな。

……とまあ、俺はその部屋を取つた時は、そう楽観的に考えていたんだ。ベルの頭を落ち着かせる為であり一晩明かす為であるから、同じ部屋になるぐらいどうつて事は無いと。そう、高を括つていた。しかし、現実は非情である。

俺は現在その思考を吐き捨てて頭を抱えているのだから、何かトラブルがあつたのは傍から見て明確だろう。うん、トラブルと言うかT.O.L.O.V.E.ると言うか……何というか、運命ふざけんなど叫びたい。「（……どうなつてんだよ、コレ）」

神様がこの現状を運命付けてニヤニヤ笑いながら眺めているのなら、俺は今にでもその神の顔面にグーパン入れてやりたい。まさかあの転生させてくれた神様がそう言う事したんじゃねえだらうなあ……？

そう思う程、俺は頭を悩ませていた。原因は、視界に映るそのモノだ。

現在は宿を取つた二人部屋の一室、見る限りボロくも汚くもないが最高に綺麗と言う訳では無い至つて普通の部屋に居る。服を掛けたハンガーが壁にフックに吊られていたり、物置やらがあつたりと一晩過ごすには文句が無い部屋である。……それらには、言う事は無い。

問題は……やはり、コレだ。

俺は頬を引き攣らせて「どうなつてんだよ」と、色々な感情が溢れる思いを湧かせる原因へと視線を向ける。

「……。」

共に居るベルも、その物体に視線を向けている。少し顔を赤らめ、思考停止したかのように動かない。

……うん。今の俺達にコレがあるのは、タイミングが悪いにも程があるよな……いや、タイミング良くてもこうなるだろうけども。

痛み始めた頭を抑え、俺は溜息混じりにその物体……『ダブルベッド』に視線を固定させた。

「（……おい、マジでどうなつてんだコレ）」

そう、ダブルベッド。ダブルベッドである。

大体は二人の人（主に男女）が健全的に就寝、不健全的な就寝をする為に使用する大きめなベッドだ。アレだ、添い寝とプロレスごっこに使われるモノと言えば誰でも分かるだろう。……いや、ダブルベッドじやなくてもその行為は行われるのだが。

ともかく。ソレは枕が二つ並び、二人並んで寝れる程に大きいベッドなのだ。見るからに一緒に寝ろと告げている寝具である。じーざす。

……あのさあ、二人部屋＝ダブルベッドっておかしくない？ この

世界ではそれが常識なの?二人部屋はダブルベッドが当然なの?

そんな疑問を抱きながら、俺は頭を抱えていた手を放る。ブラリと腕を垂らし、再度疲れたように溜息を吐く。やつぱり頭は痛む。

「……はあ……」

時間帯は夜。気付いたのはつい先程であり、いざ就寝と言う所で俺達は気付いたのだ。

……この部屋……ベッドが一つしか無い……ッ!……と。

いや、何故そんな直前になつて気付いたのかと言うと……俺達は手荷物が少なめな為に、部屋に荷物を置かずにまずはそのまま夕食を食べたのだ。因みに会話は無い。

……つまり、最初に部屋を確認していない。部屋がどんな感じかを直接見ず、ただある程度家具や寝具があると言うのを鵜呑みして部屋を取つたのだ。だから、後々になつて案内された部屋で、その部屋はダブルベッドであると言う事を知つたのだ。

……そして、その例のダブルベッドを前に固まつている、と言うのが今の状況だ。場は困惑と驚愕、その他諸々のイケナイ雰囲気がちよっぴり漂つている。

ふと、チラリとベルに視線を向ける。

「…………え……?」

あ、混乱してるこの子。変わらずに硬直してるわ。

少し前の話(互いの好きの勘違い)が影響し、羞恥心からマトモに話せなくなつたベルだが、今度はダブルベッドに衝撃を受けて動けなくなつたようだ。相も変わらず初心と言うか、何と言うか……。

……しかし顔が赤いのは、ナニを考えているからなのだろう……いや、言及はしないがね? ちよーっと気になるけど訊かないでおこう(予想出来ないとは言つていない)。

まあ、つい先程まで幼馴染みと言う関係に、恋愛感情と言うモノが混ざり、少し複雑な状況になつてゐるのだ。友人関係と恋人関係の間を彷徨う俺らに、その壁を超える象徴であるダブルベッドが目の前にあるのだから……ベルがそう動搖してもおかしくはない。まあ、それに十四歳だしね。多感な年頃にこんな状況の真っ只中なんだから、平

静で居られる方がおかしい。

それで、この泊まる部屋にベッドが一つ、と言う事なのだが……必然、俺とベルがそのベットと共に寝る事になる。これはよくある「し、仕方ないわね……いつ、一緒に、寝てあげるわよ……つ（ツンデレ）」「……だつて、ベッドが一つしか無いんだもの……一人で寝るしか、選択肢は無いでしょう？」（クーデレ）みたいなイベントだ。はいはいテンプレテンプレ。

しかしそのテンプレに沿つて行くと、俺とベルはこのまま健全的なベッドinをする訳だが……うん、まあ。

そんな在り来りで王道な展開に遭遇するとは思わなかつたが、俺は先人達（主人公）のようにそうするつもりは無い。

レッドプレイヤー（PK）に殺され掛けた後にヒロインと共に過ごす（そのあとはベッドイン）だと、気絶から目が覚めたら生徒会長がベッドに潜り込んでいる（そのあと本当の名前が明かされる）と言つた不可避なベッドに関する状況だつたら仕方が無いが。

しかしあ、こうして回避可能なイベントは俺は出来る限り避けて行く。……ほら、やつぱりそう言うのは大切に取つておくべきじやない？責任とか社会的死だと危惧する物もあるけど、やつぱり後に後悔されるぐらいだつたらそもそもやろうとする状況を回避して相手を思いやる事が重要だと思うんだ。

「（つまりは見方によつてはヘタrena訳だが、ベルの事を考えての事だ）」

それに現在、俺とベルはlike（友情的な好き）とlove（恋情的な好き）のすれ違いで関係があやふやになつていて。この後の展開次第では、元の幼馴染の関係か、はたまた恋人の関係になるかに別れるだろう。……その辺りは、俺も判断が難しいのだが。

勘違いの会話の中ではあるが、ベルは俺に告白をした。その事実は変わりなく、その相手と羞恥で会話出来ない中、同じベッドで添い寝となれば……うん。どうなるんだろう。いつそこの世界の女としての本能が覚醒して、貞操的な問題が起ころるかもしねない。

いやまあ、そもそも男女が同じベッドで寝るのは倫理的に宜しくない

いのだが、幼馴染みである俺達はしょっちゅう一緒に寝ている。昼寝もよくするし、添い寝なんて日常的だ。半分習慣化している。

……だが、恋愛沙汰が絡んで来ると状況は深くなる。このダブルベッドで寝ると言う事がどう言う事か、今の俺達がこのベッドで寝たらその後どうなるのか……。

正直、嫌な予感しかしない（天啓）。

こう、色々と嫌な予感がする。具体的には言えないが、こう電波を受信したと言うか……この後はテンプレに巻き込まれる的なメッセージが送られたと言うか……うーん。何だろう。

……まあ、ともかくだ。俺は余計な事や面倒な事、その他諸々を起こす前にそのテンプレをぶち壊すッ！

そんな長々とした思考と決意を元に、俺は早速行動を起こす。隣で未だに固まっているベルに、真面目な顔で思い遣りを込めた言葉を掛け、平穏に一晩越そうと言う意思を伝える。

「ベル。今の俺達がこの同じベッドで寝るのは色々とアレだから、お前がベッドで俺が床で寝る事にしよう」「……え」

よし、これで大丈夫。俺の考えを読んでくれるベルの事だ。きっと今の俺達の状況的にも考えて、普通に賛同して平和的な一夜を過ごせる……！

……と、そう考えたのが数分前。

「（……おかしい。どうしてこうなった）」

今は逃れられない運命に絡め取られるように、先人達（主人公）と同じくして幼馴染みと同じベッドに居ると言う状況になってしまっている。本当にどうしてこうなった。

数分前、俺はそう発言してから数秒後にベルにベッドの中に連れ込まれた。恐ろしく早い投げ技モドキに俺は、驚愕した。恐ろしく早いベッドインだ、俺じやなきや見逃しちゃうねえ……。

それから数分、ベルは何やら考え込むように、または迷い悩むように……また、何か我慢するように俺を逃がさないとばかりに拘束している。いや、美少女にベッドに連れ込まれるとか言うラツキーなイベントには嬉しい気持ちがあつたりしてドキドキしてるけど……別の意味でもドキドキしてるなあ……。

現在俺の身体にはベルの手足が絡まれ、胸などの部位もグイグイ接触している。当てんのよと言う奴だろうか。違うか。

つまりはまあ、背中の方から強く抱き締められている。美少女に逃がさないと言う気持ちの籠った抱擁をされている、と言う胸がドキドキする状況なのだが……うん。アレだ。

「はあ……つ……、はあ……あ……つ……！ ユキ、ハ……つ」

息が荒かつたり、ベルの身体が熱かつたり、何やらモゾモゾしたり、俺の名を艶やかな声で呼んだり……見るからに“アレ”な様子な贝尔に、俺は良くも悪くも心臓を高鳴らせていた。

……た、多分……あのlikeかloveかの好きの件について話そうとするんだよな？不安や緊張で息が荒くなつて、羞恥で熱くなつてるだけだよな？

興奮してる訳じや無いよな？前に見た事のある、“あの現象”を起こしてるわけじやないよな？……そうだよな、ベル？

「……ベ、ベル……？」

「……大丈夫だよ……今は、話せる……今なら、話せるよ……ユキハあ……ふう、はあ……つ」

「……い、いやお前……見るからに“アレ”じゃないか。前はどうにかなつたが、今回は流石に不味いぞ」

「平気平気……この状態なら、何でも素直になれるから、さつきの事もちゃんと話し合えるもん……ね？」

「いやいや、ね？じゃなくてだな……オイコラ、其処に手伸ばすな馬鹿」

馱目みたいですね（諦観）。

今こそこうして話せているが、と言ふかこれから先程の件について話そうとしているが……多分無理だぞ。暫くしたら完全に獣になる

ぞ。

身体をモゾモゾ……と言うか、身体を俺に擦り付けるようにしてい
る時点でアウトだ。マーキングのようであり、何かを刺激してるかの
ような行動を取っている時点でお前はもうアレが起きている。

……うん。やっぱり、この世界の女特有の“アレ”が来てるよう
だ。

「問題無いよ……そう言えばユキハ、僕と子供を作らない？ 幼馴染み
だし、十四歳だし、もう結婚しても良いと思うんだ……」

「落ち着け。 オイ、 落ち着け」

「僕は落ち着いてるよ? ……ふふ、 ユキハと子作りするのは昔からの
夢だったんだあ……最初は痛いらしきけど、 きっと、 ユキハとなら最
初から最後まで気持ち良くなれるよ……?」

「ベルウウウツ!? おいコラ淫乱兔イツ!?’

……この世界には……正確には、男女比が変化したこの世界の異性
に飢えた女には、 不定期かつ頻繁に起こすとある現象がある。

滅多に遭遇しない異性への、 言つてしまふと溜まりに溜まつた煩悩
や性欲の解放……。 種族繁栄の本能が昂り、 その現象が起こつてしま
うと暫くはいつも通りの自分では居られない。

そう、 それは……男を求める女が、 発情する現象。

「ユキハと居られるなら、 只の幼馴染みでもいいかなって、 そう思つた
けど……でも、 やっぱり欲が出ちゃつた……」

「欲は欲でも出てんのは性欲だよ。 ……オイ、 だから止めろつてのベ
ル。 今こんな状況でやつても、 お前が後悔する……? ……アレ、
お前何か力強くなつてないか?」

「……ユキハ……僕ね、 ユキハと一つになりたい」

「おい、 ちょっと待て。 何でお前俺より力強つ……ちよつ、 ベル!? おい
ベル!? ヤメ……ツ、 ヤメローツ!?’

そのまんま、 名を……発情期。

どんなクールな女でも、 如何なる無表情な女でも、 ありとあらゆる
気高い女でもあつても……この世界に存在する女であれば、 この現
象、 発情期には抗えない。

尚、この発情を抑えるには――。

「僕、初めてだけど……頑張るね？」

「頑張らなくていいから！そんな期待に満ち溢れた発情した様子で頑張らなくていいから！だから止まれベル！ベルウウウウツ！」

――性欲の発散をして、異性に対する飢えを軽減させる事である。言つてしまふと、自慰や性交である。

「後ろからだからよく分からないけど……匂いで分かるよ？ユキハ、今……元気になつてくれるよね？嬉しいよ」

「何で匂いで分かつ……そうかこの世界の女は皆そう言う存在か！やつぱりこの世界狂つてる！クソッタレ！」

……しかし俺、表面は凄い慌てるのに内面は凄い落ち着いてるのな。何でだろう。きっと並列思考とか持つてて、混乱とかを片方の思考に任せてもう片方で冷静な思考を行つてゐるんだな。成る程、俺はマルチタスクの使い手だつたか……。

それなら、きつと俺は場に流される事無く冷静に対処が出来――。

「……ごめん、ユキハ……もう僕、我慢出来そうに無いや……つ……早く、交わろ……？」

「止めろオオオオオオオオ！」

――おい馬鹿止めろッ！ベル！待て！落ち着けエエエエエツ！？

エツ！？

♂

♀

→

↑

←

↓

そしてなんやかんやハッピーエンドで良いんじゃないかなと言う感じのお話。

暫くして。

「……落ち着いたか？」

「……無理……いつそ殺して……」

「ああ、見事にいつものベルに戻つたな。良かつた良かつた」

先程の勢いはどうかしたのか、と観客が居れば動搖したであろう程にベルは落ち着いた。ついさっきまではあんなにエロエロでイケイケだったのに、今ではその面影が無い程に羞恥に塗れ殻と言う名のシーツに包まつていて。

穴があつたら入りたい、と言うのを体現したのが今のベルだろうか。……しかしベルよ、頭隠して尻隠さずと言う言葉も体現しているぞ。隠すなら全部隠しなさい。

とは思うが口にはせず、俺は呆れたようにベルに言葉を掛ける。

「……あのタイミングで発情するつて、ベル……お前は雰囲気を破壊するのに適しているのか？一気にエロエロで危ないムードになつただろうが」

「止めて……ああなつた僕は僕じゃないの……うう、恥ずかしい……けど、それ以上にごめんね……」

不思議な事に、『何かが起きたかのように』突然発情が治つたベルは、途端に顔を興奮ではなく羞恥に赤く染めて寝床へと逃げた。……まあ、逃げたと言つても部屋は一緒だし逃げようにも逃げられないのだが。

そうして、現在はこうしていつものベルと何とか会話を交わしている。今ベルは恐らく、先程の発情での羞恥で好き好き勘違い事件を忘れているからこうして話せているのだろう。……多分、少ししたら直ぐに思い出すだろう。

しかし、ベルは本当に突然にあの発情から治つたよなあ……いやあ、一体誰が何をしてベルの発情を収めたんだろうなあ……不思議

だなーハツハツハ。

……うん、まあ俺なんだけどね？

謎の強化状態で暴走したベルに本格的に犯されそうになつた俺は、なりふり構わず奥の手を使つた。別名、神様特典……頼れる俺の相棒である。コイツが無かつたら俺はきっと「発情兎（ベル）」には勝てなかつたよ……』とレイプ目になつていただろう。笑えねえ。

全部で三種類あるらしい俺の異能の内の一つ、俺が一番自由に扱える能力であるソレを使つて、ベルの発情状態を治して、通常のベルの状態へとした。本当に危なかつたので、俺は信用も信頼もしているその能力を使つてベルをいつものベルにしたのだ。

……あのままだつたら、俺はベルに童貞を奪われていただろう。そして、ベルの処女を貰い受けた俺は必然的に責任を取り……なんて、バットエンドにも思えるルートが走馬灯の如く脳裏を走り抜け、俺に危機を抱かせた。

一見仲の良い夫婦に見えて実はギクシャクしていて、その裏爛れた生活を送る、と言つたルートが見えた時は……寒氣と言うか、怖気が走つた。逆レイプから始まる性活（誤字にあらず）の景色を未来予測していなかつたら、俺はそのルートを辿つていた事だろう。

「……危なかつたなあ」

ボソリと呟き、俺は安堵の溜息を吐く。互いに良くない未来を迎えないで良かったと言う思いと、ベルとそんな出来事を起こさなくて良かったと言う気持ちが合わさり安心したのだ。

……どうせなら、普通の告白から始まりたいしなあ……なんて願望をチラリと溢れさせながら、俺は再度ベルへと視線を向ける。

「……ごめん、ごめんねユキハ……僕つたら結局は女で……うう、野蛮な女でごめんね……雌兔でごめんね……」

何やら反省しているようだ。……いや、羞恥と後悔に追われている、と言うのが正しいだろうか。

……因みに此処でベルを責め立てるとしたら、「あつれ？ベルちゃんつたらオラリオに入つた時に、他の女とは違うみたいな事言つてなかつたつけー？あつれー？あつれー？」と言うウザつたるい台詞が

思い付く。勿論しない。追い打ちはしない主義なんだ。

俺自身はこの世界の常識に理解はあり、女として不定期に発情してしまうのは仕方ないと考えている。本人の意思でもどうしようもない衝動が突発的に現れ、それを抑える事が出来ないと言うのを知っているから、俺はソレを許容出来る。……レイプと言う形で結ばれなければ、俺はギリギリまでは許せる。具体的には先っぽはセーフ（ナニガとは言わない）。

と、そんな風に俺はそう言う風に考えているが……まあ、今のベルは考える事が多いだろう。……いや、あの好き好き勘違い事件でベルの思いを知ったから、俺はそう考えられるのだろう。

……ベルが俺を異性として、男性として好きだと言う事を知つたら。

俺の視点からでも、今のベルは多くの後悔に包まれている。時折聞こえる独り言のような言葉の節々からも、色んな感情が覗ける。

俺から見えるその感情は、羞恥、恐怖、悲嘆、と言つた所だろうか。……自分のしてしまつた事への恥じらい、また何かに対する恐怖、そして嘆き。

それを見て、俺は僅かに目を見張らせた。

……先程までは、俺は軽口を口にする事が出来ていた筈なのに……いつものように巫山戯て場を和ませる、と言う考えが浮かばない程に。

……この場は、唐突にシリアルスな雰囲気に包まれていた。……あれ!? ギヤグ展開じやなくてシリアルスな展開になつて、だと……ッ!? 「……僕つたら、本当に駄目だね……ユキハに、あんな事を……前も、今も、全く駄目だつたね……っ」

「……仕方が無いだろう。今回の件は、この世界の女だからそういうのは仕方ないんだよ」

内心、「おつかしいな。さつきまでシリアルスの気配なんてそんな無かつた筈なのに」と思いながらベルの言葉に言葉を返す。

……うーん、いつもなら「大丈夫だつて!」とか「それがどうした! 寧ろウエルカムなんだぜ!」とかギヤグ方面に雰囲気を差し向け

る、のだが……何故だか、それをしてはいけないと直感で俺は察する。

同時に、天からのお告げ（謎の電波）で「彼女の言葉に、誠実に応えるのです……ギャグに突つ切つては駄目なのです……」と言う言葉を受けたのだ。

……うん、まあ雰囲気的にもシリアルだからそれをぶち壊さないけど。と言うか、ぶち壊しちゃいけない感じだから巫山戯るのは内面だけにしておくけど。

そう思考しながら、俺はベルの言葉を受け止める。

「オラリオに来た時は、『他の女とは違う』みたいな事を言つたのに……結局は、同じだつた……つ」

ベルは身体に覆つっていたシーツを剥がし、俺に身体を向けて叫んだ。その赤い瞳は潤み、いつもは可愛らしい笑顔を見せる表情は悲しみに溢れ、ほつそりとしながらも魅力的な身体は、何かを抑えるように震えている。

「……それは」

……アレ、ちょっと待つて。コレ本当にギャグ方面に移行できる？ 内心動搖し、思つた以上の雰囲気の重さに驚く。

いつもの俺達ならもつと和氣藹々として、楽しく明るい雰囲気なのに……なんか、コレだと……。

「こんな女に……！ 幼馴染みに、ユキハは異性としての好意を持つてくれる筈が無い……っ！ だから、あんな勘違いが起きて途中に気まずくしちやつたんだつ！」

「……それ、は……」

……別れ話を切り出すみたいな、そんなシリアルスマードじやないか。

なんか、感情が暴走してゐみたいにらしくないぞ……？

「宿屋を探す時だつて！ 僕が恥ずかしいってだけでつまらない時間にしちやつて！ 宿屋でご飯を取つた時も！ 一言も会話は無くて！ 部屋を取つて寝る所が一つしかないと分かつた時も！」

いつしか。

ベルの潤んでいた瞳からは、涙が溢れ。

悲しみに溢れる表情は、より悲しみに嘆き。

喉からは嗚咽が響き、涙に濡れた声が場に通る。

「……全部、ユキハに迷惑を掛けちゃってる……オラリオに来てから、僕は何も出来てない……つ！ずっと、嫌な思いをさせちゃってる！」

それは違う、と思った。

何を今更、と思った。

何故今に、と思った。

なんだそれは、と思った。

この幼馴染みは、何故この時、こんなに溜め込んだモノを吐き出すように叫ぶのか。

「でも、足を引っ張つてるのは昔からだつた！ユキハが手を引っ張つてくれて、全部ユキハが教えてくれて！僕の目の前には、いつもユキハが居た！」

シーツがくしやりと歪む。

「迷子になつた時はユキハが探してくれた！ゴブリンに襲われた時もユキハが助けてくれた！お爺ちゃんが死んだ時もユキハが立ち直らせてくれた！」

叫びが響く。

「……全部！ユキハが居たから！それは本当に嬉しくて、ありがたくて！今ではもうユキハに惚れて、好きで、大好きで、本当に大好きで！君が居ないと生きられない！」

心の内が、吐露される。

「でも！隣には僕が居ない！」

そして、その告白に――俺は心の中でも、ふざけられなくなつた。

↓ ↓ ↓ ← ?

「僕はユキハの後ろを追い掛けるだけだ！手を差し伸べてくれるユキハに、助けてくれるユキハに、力を貸してくれるユキハに、後ろから付いて行くだけだ！」

それは、ベルの昔からの思いだつたのか。

それは、ベルの前々からの意思だつたのか。

それは、ベルの幼い頃からの悩みだつたのか。

「今だから言うけど、僕は本当に君が好きなんだ！いつも優しくて、手を引っ張ってくれて、ずっと僕の事を考えてくれるユキハが大好きなんだ！」

その告白に、息が詰まる。

「街中で一番の女つて言われて、嬉しかつた！離れられたら困るなんて、ずっと一緒に居たくなつた！けど、それは全部友達として……ツ、異性としてじゃなかつたツ！」

……声が出なかつた。

「幼馴染みとして生きて来て、やつと恋人になれると思つた！……けれど、ユキハは親友になれるつて喜んでた！恋人じゃない！僕は、恋愛が欲しかつた！」

……口がポカンと開いた。

「ベッドで別々に寝ようつて言われた時、嫌だつて強く思つた！これから、段々と離れていくんじゃないかつて……そうして目の前が暗くなつた時に、またああなつた！」

……頭が痛んだ。

「前と同じように発情して、またユキハを襲つて！……こんなにも、ユキハの事が大好きで、凄くユキハの事を想つていても……これじゃあ、ユキハが僕の事を好きになつてくれる訳が無い……」

……続くベルの言葉の数々に、俺は我慢の限界だつた。

「こんな、ユキハに迷惑を掛けて、足を引っ張つてばかりの僕が……隣に居たら、駄目だ……だつたら、今の内に僕がユキハから離れれば――

「阿呆か」

デコピン。

ベルの額に、思いつ切りの中指によるスマツシユを喰らわせる。別に何処かのヒーローに憧れる少年みたいに、「スマアアツシユ！」とやつても指がボロボロになる訳ではないが、それなりに強烈だろう。

「あうつ」と仰け反り、やはり痛かったのか額に手をやるベル。

「……つ、はあ……」

不意打ちのデコピンに驚いた様子のベルに、俺は深く溜息を吐く。……と言うより、さつきからの長々としたシリアルなシーン全部に対して俺は溜息を吐く。

……ベル、お前はやつぱり阿呆だ。残念だ。天然だ。お馬鹿さん。「……あのなあ、ベル……」

心底呆れたようにジト目を向けながら名を呼ぶと、ビクリと身を震わせるベル。……少し怯えたような様子だが、一体何に怯えると言うのか……。

再度溜息を吐き、再再度デコピンをして……俺はまた「この阿呆」とチヨツプをする。

「お前は、本当にさつきから何を言つてるんだ」

「え、そ、れは……ユキハに迷惑を掛ける僕は、今の内に離れておいた方がつて……」

「今更だ馬鹿。ついでに言うと迷惑なんて掛かってねえよ馬鹿。何を勘違いしてんだけば馬鹿」

「ば……ッ、そんなに馬鹿馬鹿つて言わないでよ！僕は真剣に……」「その真剣に考える事自体が勘違い、と言うか馬鹿だつて言つてんだ」「また馬鹿つて言つたー！」とブンブンと可愛らしく怒るベルに、「……さつきまでのシリアルは何処行つたんだ」とふと思う。……しかしまあ、シリアルは元々苦手だから良いんだが……。

……先程の様子と随分違うな……こう、少し不自然なモノを感じるような……気のせいいか？なんか、少し気になるんだけど……。

ふと疑問をチラリと抱きつつ、俺は指を額に突き付けながら口を開く。

開き……其処からマシンガンの如く言葉を連続して打ち出す。

「長々と全部論破してやつから覚悟しろよ？……まずお前が発情して俺を襲つた事は氣にしてない。寧ろ役得と思えるぐらいだ。お礼を言いたいぐらいがありますー！次に俺はお前と会話が無くとも気まずいなんて思つてない。視線交わすだけで会話できる

から問題無いだろうが。その次は勘違いの会話も仕方ねえだろうが。急に恋愛の話になるとは思わなかつたから勘違いの件については俺も悪い。ごめんなさい！よしその次だ。お前と居てつまらない時間なんて無いぞ。そんで次は

そうして、全部を言い終える頃にはベルもゲツソリしていた。……所々、顔を赤くしたりしていたが。まあ、顔を赤くするような台詞を交えていたから仕方ないけどネ！

そんな風に表情の変化を繰り返していたからか、少し疲労を見せるベル。しかし俺は構わず、続けて言葉を向けて投げる。

「……と言うか、そもそもその勘違いの原因は分からぬのか？」

「……勘違い？」

「駄目だコイツ……全く、これだからベルは……」

『やれやれ』みたいな風に言わないでくれるかな!?』

どうやら、全然気づいてなかつたようだ……これだから元が鈍感ハーレム系の主人公は……。T Sしても鈍感は変わらなかつたか……。

もうつ！本つ当に鈍感なんだからっ！（ツンデレ）

と内面でふざけながら、俺はサラッとその勘違いの原因の答え合わせをする。

「そもそも、俺は昔からお前に惚れている」

言うと、何故かピシリと時が止まる。

……。

……。

……。

「えツツ?!?」

…………うん。やっぱり気づいてなかつたようだ。

いやまあ？そんな態度はそんなに出してなかつたから仕方ないかもしれないけどね？……けど、そんなに心底驚いたのを見ると、少しショックだなあ……。

アハハ、と苦笑いをしながらも俺は言葉を続ける。

「そもそもだ。俺達のあの村では、他に女が山程居ただろ。で、捉え方によつては全員が幼馴染みだが、何でお前一人を幼馴染みとして接して、今もこうして一緒にオラリオに来てるのは何でだと思う？」

「……僕が好きだつた、から……？」

「Exactly(その通りでござります)。じゃあ続けて質問だ。何で昔からお前だけの手を引っ張つて来たと思つてる？何でお前にこんなに執着してるとと思う？何で街中で一番の女だと言えたと思う？最後に關しては、この世界の女だと面倒になる事間違い無しなのに？」

「……全部、僕が……好きだから……つ？」

俺の問い、ベルの答えを重ねる度に段々と顔が赤くなるベル。……いや、俺も少し顔が赤くなつてゐるかも知れない。

少し顔が熱くなり、胸が無駄に高鳴るのを感じながら、一息吐く。
……まあ、うん。

……この機会を逃すと次は無さそうだから、いつそ全部言つてしまおう。そうしよう。

深呼吸し、一つの決意をして俺は口を開く。

「……俺は、お前の事を思つてステップアップをして行こうと考えていたんだ。両思いかどうかはさて置き、な」

「……え？」

「友達と幼馴染みは同義だとして……まあ、幼馴染みから親友、親友から恋人へとより親密な仲にして行こうと考えていた。ましてやベルはまだ十四歳……精神的にも些か幼いから、今は親友に格上げするだけに収めておこうと思つていたんだが……」

「……ええ！そこまで考えてたの！」

……本当に驚いてるな。……これでも結構深く考えてたんだが。

昔は本来の精神的年齢に比べ、一回りも下の女に惚れるなど、と少し抵抗があつたが……まあ、それはそれ。なんやかんや深く惹かれて行つた。

……あの時は、と言ふよりも随分と青春してんなあ……前世に比べて凄いラブコメしてる。

思わず笑いが込み上げ、口元が緩んでしまう。

「それに、考えた事は無かつたか？普通の男が、女に発情して襲われたら距離を取らないのか、と」

「……あつ」

「考えてみる。好きでもない女に襲われて、男は以前と変わらず話せる訳ないだろ。ましてや一緒に旅とか、普通気まずくて無理だ」

「……考えて、みれば」

「盲点だつた！」と言つた風に目を見開くベルに、俺は頬を更に緩ませる。

……そんな様子も、可愛らしい。流石ベル、どんな顔を可愛い……つと、内面も随分緩んじまつてるな……。なんやかんや両思いと分かつたからか？頬以外も緩み過ぎイ！

昔からつい先程まで、恋人になるのは早い……と言うか、告白するのは早いと考えていた俺だが、相手が先に告白をしてきたのだからその考えは撤廃するべきだろう、と考えを改めた。

……と言うか、気持ちが溢れてくるのに耐えられなくなつてきた。あのシリアルス（仮）シーンでみんなに好き好き言われたらし、俺の事を想う叫びがバシバシ叩き付けられたからなあ……。

正直に言おう、ベルに対する想いが溢れそうで辛い。

「……まあ……色々と踏まえて、だ」

コホンと咳払い一つ。

俺は内も外もふざけた要素を排除し、全て真面目なモノへと入れ換える。……さて、此処からは正真正銘俺の本心で動こう。

一度、目を瞑り……ふうと一息吐く。

……そして目を開き、名を呼ぶ。

「……ベル」

「は、はいつ!?」

裏返つた返事が返つて來たが、いつもなら茶化すだろうが今回は笑わない。何せ、今の俺は本気で真面目だ。

俺の普段に見せない真面目な態度に、驚愕と動搖と緊張を見せるベル。……まあ、話の流れと俺の様子からこの先を察したのだろう。

顔を赤く染めているベルに視線を固定し、俺は――――。

「ずっと前から好きでした。俺と、恋人になつて下さい」

告白をした。

視線の先に居るベルの顔が、更に赤く染まる。耳も、首元も、全て真っ赤に染まって行く。

ベルは一瞬、目を見開き……少しして、柔らかく微笑み。本当に、嬉しそうに微笑みを浮かべ――――。

「……つ、はい……！」

――――天辻の如く美しい笑顔で、喜びの涙を零しながら返事をした。

♡

↓

♡

↓

♡

宿屋の一室の件には実は犯人が居て、その人達にとある男がアイサツをするまでのお話。

とある宿屋の一室にて、一人の男と一人の女が幸せそうな微笑みを交わす。

「……!?」

そんな光景を見た、と言うか覗いていた不審な人物二人は叫んだ。

「ウツソだろコイツ!!」

「は!? 何である状況からハッピーエンドに出来るの!?」

その驚きの声が上がつたのは、とある宿屋の近くの民家の屋根の上。

其処には二人の女の姿……正確には、L v. 2の女冒険者二人組が驚いた様子で呆然としていた。

その二人組は双眼鏡を携え、先程からとある宿屋の一室にソレ向けて目を凝らしている事から覗きをしている事は傍から見て確定的だつた。ローブ姿で居る事や、そんな姿で双眼鏡で覗きをしているのだから明らかに不審者である。

更には「何でや!」「何でなのよ!」と目を剥いて叫んでいるのだから、「何だコイツら……引くわー」と思わせる怪しい二人組だつた。

そんな不審な二人組の視線の先には、今日来たオラリオに来たばかりと思われる男女二人組が居た。見る限りカツプルにしか見えない男女で、現在は幸せそうな雰囲気を漂わせて互いにニコニコしている。

今は女がベッドに横で悶えるように寝転がりながら、男はその枕元で微笑みながら会話をしている。

……恐ろしく幸せそうなイチャイチャムードを発しているあの空間を目になると、何故だか口の中が甘くなつて苦い飲み物が欲しくなる。糖度が高い空間作り出してんのか、と女冒険者達は思う。

そんな最高に幸せそうなリア充を見て、「ふざけんなっ」と苛立つよ

うに、そして妬むように表情を歪める女二人。見るからに幸せその男男女に……と言うか、男と仲良くしている女に向けて嫉妬の視線を遠慮無く重ねてぶつける。口からは「リア充爆発しろ」と怨嗟の声が漏れる。非リアの末路を体現したかのような姿に、一見哀れみを覚えてしまう。

その部屋の窓から出来事の一部始終を見た……と言うより、正確には“ちよつかいを掛けた”二人の行く末を見届けた女冒険者達は、双眼鏡を荒く降ろして未だに驚きが残る様子で絶叫する。

「何で!? 私の『強制発情』^(エッチクナール)は発動した筈なのに!? 何で急に治まつたのよ!?

「ウソだろ……私の『感情暴走』^(アバレナーヨ)は絶対だろ!? 私の魔法は最強だろオ!?

その叫びは、何とも悲痛と言うか悲しみに満ちたような物だつたが……事情を知れば、誰もが「いや、お前ら何を言つてるんだ」と呆れた視線を向けるだろう。中には「ふざけんな馬鹿ッ！」と拳を出す者も居るかも知れない。

何せ、自分達が物事を悪化させようとした結果、それが上手く行かなくて一方的に怒りや嫉妬の感情を叫び散らしているのだから。……この世の「男の幸せを願い隊」や「男性の幸せな顔を拝み隊」等と言つた特殊な部隊の方々（女冒険者）の耳に届いたら、きっと大変な事になるだろう。主に暴力沙汰的な意味で。

さて。

その誰かが事情を知れば面倒な事になるであろう事を起こした女冒険者一人だが、何故そんなに短絡的な行動に出たのか。

そんな事の発端は宿屋の二人部屋にあの男女が入るのを目についた時まで遡る。……いや、正確には街中での男女を見かけた時までだ。

この男が少ない世界で、未だに独身かつ処女かつそもそも男との接觸経験が皆無な哀れな女冒険者一人……平行世界の方々に分かりやすく言い換えるなら、「独身かつ童貞で口クに女と話した事が無い男」と言つた存在である二人は、日々欲求不満の日常を過ごしていた。

彼女達は、この世界の女の大多数が抱く「ダンジョンに出会いを求める」と言う夢を持つ中の一人だったが、数年もこの迷宮都市オラリオで過ごしても、その望む出会いは起きなかつた。今やLv.2に至り、偉業を成し遂げ器を昇華させた者の中の一人であるが……男の影は欠片も無い。

強い者はよくモテる、なんて法則があるらしいがそんな物は世迷言であると女冒険者達は良く知つてゐる。寧ろゴリラか熊か何かと見る目でこちらを見て怯えるのだ。冒険者には野蛮で凶暴な女しか居ない、と言う風潮もあるが……それ以前に認識の持ちようで冒険者の大体は怯えられている。其処らの街娘の方が男性と結ばれる可能性は高く、戦に身を投じる冒険者は男性と結ばれる所か接触の可能性すら極少なのだ。

……その典型にハマリ、この女冒険者達二人組は、男との接触も無いまま野蛮な冒険者稼業に日々を費やしているのだ。出会いを求めるよりも、男と結ばれる事を望もうとも……その望みは尽く潰されている。……残念な事に、現実は非情である。

毎日ダンジョンに潜りモンスターを倒し、それらの成果で日々の生活を食い繋ぐ日常……男つ気は皆無であり、不満も性欲も沸沸と溜まる一方である彼女達だつた……が。

今日この日、二人は運命と出会つたのだ。

超絶イケメンの男に。それも、絶世の美少年である。
何色にも染められない純白の髪はサラリと肩まで伸び、短めに切り揃えられている髪が揺れる度に目が自然と付いて行く。

瞳はまるで極上に透き通つた水のように深く蒼くもあり、幻想的な氷のように冷たく蒼くもある。その不思議な蒼を覗かせる瞳には、魔性の魔力でも発しているかの如くソレに目を奪われてしまう。

顔付きは理知的でありながらも少年の幼さを残す美しさを見せる、美貌を当て嵌めるに相応しい顔立ち。

身体は細くしなやかでありながらも、その実しつかりとした身体付きをしている。鍛え上げられ、研ぎ澄まされた刃のように素晴らしい肉体には身体が勝手に反応する。

全てを合わせ、美の体現と言つても差支えは無い程の美しさを持った少年。神に匹敵する程の容姿を持つた、男。

……その男を見て、女冒険者二人は直感的に思つた。「運命だ」と。ずっと前から恋焦がれていた「出会い」とやらに、今漸く出逢えたのだと……、……ぶつちやけてその男に発情しながら、下腹部のアレから愛を滴らせながら強くそう思つたのだ。

そんな歓喜に満ちる彼女達は欲に飢えた獣。男の愛にも、男のチ○コにも飢えた最低の野獸なのだ。どうにかしてこの男を手に入れたい、と言うかせめて会話だけでもしたいですお願ひします！何でもしますから！と望む野獸なのだ。

そんな二人が、「この美少年との出会いを逃してまるかアツ！」と息荒く近付こうとしたのはある意味必然だつたが……まあ、残念ながら。例によつてその二人には残念な事実が立ちはだかつた。

その美少年は連れが居たのだ。それも、美少女の。

その超絶美少年の隣に歩く女を見て、二人はナンパ直行への野蛮で飢えた思考を止め、身動きすらも止めてしまつた。「…………え？ 何アレ？」と。

兎を思わせる可愛らしい容姿の、ぶつちやけて愛でたくなる天使の如く癒しを体现する美少女。純心さを覗かせ、汚れを知らなさそうな……我等冒険者と言う存在とは程遠い存在の、無垢なる女……。

そんな、希少存在である『全く飢えを感じさせない女』が彼の隣を歩いているのを見て、女冒険者達は「……恋人、なのかな……ツ!?」と、「あんなに『飢え』が無い……純粹無垢な女が、居るのか……ツ!?」と、様々に事に対して戦慄した。また、心の何処かで無意識に「アレには勝てない」「もう諦めるしかないじゃない!」と冒険者二人組は思つてしまつた。

そして、このブツチギリでイカれた世界で、普通に男女間での健全なお付き合いをしているっぽいその二人の姿に、女冒険者は心底驚愕した。その女冒険者二人組と同じような事を考えていた周りの女達も、凄く驚いていた。

その少女は彼と視線が合うと慌ててそっぽを向き、しかし少しして

から再び彼へと視線を恥ずかしくともどかしそうに向ける……傍から見れば初々しいカップルに見えなくもなかつた。別の視点から見れば、何かあつて気まずくなつているとも見えるのだが。……その辺りの見方には個人差があつた。

……しかしまあ、この女冒険者達はこの二人を恋人なのだと認識した。そもそも男と一緒に歩いている＝凄く珍しい事なので、そんなに目と目で通じあつて、二人が友達と言う枠にハマつて、いる訳がないだろうと考えた。

つまりは、男が極端に少なすぎるこの世界で、そのどんな財宝にも劣らない程の美少年を恋人にしている少女（勝者）の事を、敵として認識した。因みにこの時の男女は恋人では無い為、まだ女冒険者達の勘違いである。

……と、まあ。

簡単に纏めて状況を説明すると、妬ましくて羨ましかつたから手を出したのである。「リア充爆発しろ！」と言う怨念を込めて、二人が部屋に入り暫くした時に各々が持つ精神作用の魔法を掛けたのだ。

片や、精神と感情の平静を奪い暴走させる魔法。片や、対象が何だろうと強制的に発情させる魔法。

何故そのような精神作用の魔法を使つたのか、と言ふと……。

「発情させて襲わせれば男からは悪印象だ！更には暴走させてより酷くさせれば、男はコイツと離れたくなる！」（確信）

「後はなんやかんやで男を頂ければ……アツハーハー→ 堪んねえぜ！」

（考え方足らず）

……と。そんな感じの考えの下に、このちよつかいを実行したのだ。

そんな女冒険者達の駆使する魔法……ダンジョンのモンスターにも通用する精神作用のある魔法は、忽ち効果を發揮して少女を暴走させた。感情面でも、性的に襲う意味でも。

最初は女冒険者達の予想通りに男を襲い始め、その順調な滑り出しが、二人はシメシメと、ニヤニヤと笑つた。そして、このまま破局しないと念を込めながら。

……そもそも男が普通に襲われても許容される場合を考えていなかつたのは、この女冒険者達のオツムの足りなさを物語っているが、その辺りは言及しないで置こう。

さて。

しかしあ残念ながら、結果を纏めて言うと、大失敗である。その女冒険者達の考えと予想は全て間違っていて、ニアピンにすら届かない大ハズレである。

確かに普通の男……この世界で、この世界の常識を元に育った少年だつたのなら、彼は彼女から距離を取り関係を絶つたのかもしれない。そしてその後なんやかんや「オラ脱ぐんだよあくしろよ！♀」「な、何をする……っ!? や、ヤメ……ッ、アツー！♂」となってしまっていたかもしれない。おそろしい。

……だが、残念かな。彼は普通ではない。寧ろ異常であつたのだ。「ナ、ナンダツテー」と言われるかもしれないが、本当は彼はとんでもない存在だつたのだ。

その彼はなんと、その身に前世から受け継いだ魂を宿し、神から異能を賜りし転生者なのだ。前世からの常識に囚われる事のあるこの男は、今世に置ける常識の通りに生きている訳では無い為に、其処らの女冒険者の描いた筋書き通りに動く筈が無い。正にイレギュラー。
……実際は、その前世からのモノ……と言うよりはこの少年の性格と思考だからこそ、今回の事件にて無事ハッピーエンドとなつたのが……まあそれは置いておき。

現在その目論見を破壊され、寧ろ良い関係に深まりやがつた男女二人に対して、双眼鏡ではなく肉眼で遠目に苛立ちの視線を向けながら、女冒険者達は愚痴を交わし合う。

「クツソ……全く、私達ならあの二人の仲を悪くできただんだろうがなあ……」

「ええ。……本当、なんでかしらね」

途中までは友情崩壊の可能性を感じていたのだが、以降は男が何かをしたのか関係を断つ雰囲気を断ち切つた。何かの力が働いたかのように、突然流れが変わつた。女冒険者達も「ん?」「流れ変わつたな

？」と途中に眉根を寄せた。

そうして、それからハッピーエンドに至つたかのように幸せそうな場面へと切り替わつたのだ。女冒険者達の脳裏に、何故だか何者かのガツツポーズの姿や、流れる赤い文字の「やつたぜ。」「二人は幸せなキスをして終了」と言つたモノも幻視した。更には謎の高らかなBG Mも幻聴した。「何だこれ……？」と当人達は首を傾げたが、深く気にしなかつた。

女冒険者達は溜息を吐きながら、「チツ、あんな優しい男が居るとか羨ましいな爆ぜろ」と愚痴り、「チョップなんて妬ましいわ、呆れたような表情からの真剣な言葉とか何のかしら私もそんな風に仲良くなしたい」と妬みの声を漏らす。

既にその部屋から視線は外し、双眼鏡も懐に仕舞つてゐる。意識すらもその部屋から外し、彼女達は愚痴を続けてゐる。

どうせなら仲を悪くしてフリーになつた所に入り込みたかつたなー、と割と下衆な考えを漏らしながら二人は愚痴り合つてゐるのだ。

とある事に気づかないで。

「あーあ。ホント、アイツらの仲なんて崩れりや良かつたのに」

「そうよねー。どうせなら、私達のちよつかいが本当に成功してれば良かつたのに」

……さて、この彼女達は意識をあの宿屋の一室から外したから気付いていない。

その部屋には女が一人未だに嬉しそうに悶えているが、男は何処かに消えてしまつてゐる事に。まるで、何処か別の場所に向かつたかのようす姿を消してゐる事に。

そして――。

「――ドーモ、ヘンタイボウケンシャ＝サン。ヘンタイスレイヤーです」

「ツツ!?」

――直ぐ其処に、その男が近付いていた事に全く気付いていなかつた。

→

↑

←

↓

?

そして変態とオリ主は出会い、ギヤグから戦闘シーンへと移行するお話。

その声が放たれると同時に、盛大に状況が進展した。

「ドーカー、ヘンタイボウケンシャ＝サン。ヘンタイスレイヤーです」「…………ツツ!?」

背後から届いた美麗な音色……生涯に置いて最上に心地好いと断言出来るであろう程に最高な声に身を震わせながら、二人の女冒険者は驚愕と共に振り返った。

「何だ今の声…………ツ！男の声はこんなに『良い』のかツ!?」「凄いつ……耳が孕んじやう…………つ!?」と、二人の脳裏に驚きの思考が走る。しかし、一番に驚いたのはその事ではない。ちよつと頬を赤く染めながら息を荒くしてしまっているが、最大に驚いたのはソレではない。

「アイエエエエ!?オトコ!?オトコナンデ!?

「なんッ……、何でツ!?貴方は、宿屋に居る筈じやあ!?

振り返ると同時に視界に入るのは、白髪蒼眼の美少年の姿。距離が幾らか空いている物の、遠目で覗いていた時に比べて間近に男が居ると言う初の状況に胸を高鳴らせる。

だが、やはりそれだけで胸を高鳴らせてはいない。喜びを感じているが、それとは別に興奮と動搖の感情にも見舞われている。

先程まで宿屋に居た筈の男が、何故此処に居るのか。

その理解出来ない現状に混乱し、二人は目を見開いてその男の姿を正面に捉える。対するその男は、アイサツを終えてから何かを呟きながら女冒険者達に視線を向ける。

「…………うーん、別世界の筈なのにこの反応……ニンジャは実在する可能性が微レ存…………?」と呟く彼…………真名を、ユキハ・スノウリイと言ふ名を持つ少年は白髪を揺らし、疑念を抱くように首を傾げてい。…………それを見て、その首を傾げて居る白髪美少年の姿を見て、女冒険者達は「首傾げキター!」「こんな近くに男が…………夢みたい……！」と喜色を表に晒し出す。その反応は、別世界で例えると「美少女

の首傾げに目をキラキラさせて気持ち悪いオタク的な反応を示す一般の人男」と言つた感じである。

「……まあいいか。取り敢えずは用件を済ませよう」

咳き、ふむと一つ頷く。

少年、ユキハはその蒼眼を闇夜から輝かせ、双眸にキリッと女二人を捉える。まるで「逃しはしない」と言外に告げるようだ。

……その少し冷たい視線に、女冒険者達は「んん……っ!」「はあ、はあ……冷たい視線……イイ……!」と若干気持ち悪い反応を示す。露骨に発情し始めているその様子を目にし、ユキハは眉を顰めて身を半歩下げる。見るからに「え、何で喜んでこの人達」と理解不能の存在に対する疑念が詰まつた反応である。

しかし、そんな変態的な反応を示そうと用件はある……と言うかさつさと済ませてしまいたい。そう思い、彼はコホンと咳払いをした後に口を開く。

「……さて、お前ら」

「はい!」「なんでしょう!」

「……、……。」

声を掛けたユキハは、返ってきたその元気な声に動きを止める。声を詰まらせ、「アレ?」と眉を顰めて続けて言葉を向ける。

「……用件があるんだが」

「何でしようつ!」「何なりとつ!」

「……。」

言葉の途中で差し込まれた快い返事に、数秒硬直して少年は眉間に揉んだ。……見るからに、「おかしい。なんか考えてたのと違う」と困惑するように頭を痛ませている様子だ。

……事実、ユキハは想定していた展開とは違った状況に困惑していた。もつと渋々、最悪は「うるせえやらせろ!」「お前が父親になるんだよ!」と襲われる事も予想していた。

……だが、まさか相手がこうして、「オールオッケー!」「何でも言う事聞くよ!」みたいな笑顔を浮かべながら言葉を待つて居る態度をするとは考えていなかつた。ユキハは一息吐き、この後の反応を薄ら

と察しながら言葉を続ける。

「……お前ら、宿屋に居た俺らにちよつかいを出したよな。違うか？」

「違いませんっ！私達の魔法でやりました！ごめんなさい！」

「はい！全部悪いのは私達です！すいません！」

「…………。」

即答。即答である。その潔さの度合いにはユキハもピシリと硬直した。

元気良く肯定し、更には謝罪までしてくる始末。即時に罪を認めて謝つて来ると言う、「即オチ2コマかよ」とツッコミが入るような展開である。

……ユキハは、「俺が男だからこう罪を直ぐ認めたのか」「おかしいな、もっと面倒なゴタゴタになるとと思ったのに」と驚きと共にそう思つた。転生者である彼が薄々と男と言う存在の恐ろしさを理解し始めながら、続けて問いを投げ掛ける。

「何でお前らは俺達にちよつかいを出した？」

「嫉妬したからです！ぶつちやけ破局して欲しいとまで思いました！」

！

「……お前ら、正確には何をした？」

「私達の魔法で精神を暴走させた後に、強制的に発情させました！あわよくば仲が悪くなつて欲しいと考えました！」

「…………好きな男性のタイプは？」

「男性であれば皆好きです！愛は平等に！」

「ぶつちやけ貴方が好みです！アイラブユー！」

—— 駄目だコイツら。

思わず頭を抱え、彼はそう思った。

→

↑

←

↓

☆

「（……まさか、こうなるとは思わなかつた）」

想定外の事態に痛む頭を抑え、俺は溜息を吐き出す。……何故だ

か、異様に疲れている気がする……おかしいな、こんなギャグ時空だつたかこの世界。やつぱりこの世界狂つてるよコンチクシヨウ。

そうしみじみと思いながら、俺は氣だるげな瞳を“ちよつかい”を出した二人”に……女冒険者二名に向ける。

……三つ目の質問で、何やらアピールを始めたテンションの高い女を。

「因みに処女であり、万年男性との出会いを求めてますっ！」

「ぶつちやけダンジョンに出会いを求めたのは、異性との出会いです！後悔はありませんっ！」

コンパに出る女はこんな感じなのだろうかと思いながら、再度溜息を吐く。……さつきの台詞を前世で例えるなら、「因みに童貞で、万年女性との出会いを求めてます！」「ダンジョンに美少女との出会いを求めてます！」だ。うわあ、ハツキリ言つて気持ち悪い。やつぱり色々と狂つてるね！

……あと、さつきの最後の質問はネタのつもりでやつたのであって、お前らに興味があつてそう質問した訳じやないからそういうアピールすんなよ（真顔）。あ、美少女のなら聞きたかつたけどね。ハハッ。

「胸は大きくありませんが、感度は良いです！下のアレも、一突きで絶頂する程に敏感ですよっ！」

「胸はそれなりにあつて、柔らかくて揉み心地には自信があります

！私の雌穴は一度捉えたら離さない吸い付きようですよっ！」

急にお前ら何を言つてるの（困惑）。

素で困惑した。急にセックスティルし始めてどうしたのこの人達。……まさか、求めてるの？ナニがとは言わないけど、一夜の過ちを犯したいの？その台詞からするからにもう誘つてるよね？

「何でや」「誰得だよ」と思うものの、俺は言葉を出せず眉を顰めるだけだった。……いや、と言うか流れが強過ぎて言葉を差し込めない。「お前らとエロい事なんかしたくなえよ（真顔）」と正直に言うのも俺が嫌なので、やんわりと嫌だと伝えて逃げたいのだが……駄目だコレ、視線が完全に野獣。何、野獣先輩なの？アイスティーに睡眠薬

をサーツ（迫真）と入れて昏睡レイプするの？

うん、詰まりは見る限り楽に逃げさせて貰えそうに無い（逃げ切れないとは言つていない）。出来るだけ穩便に事を片付けたいから、取り敢えずはこの勢いが収まつてから「サヨナラ！」したい。理想なのは「さようなら」「はーい！さようならー！」と言うのがベスト。多分無理。

けれど、無理だからと言つて唐突に逃げても多分「逃がすかア！」と捕えられるだろう。逃走中のハンターかつての。

それに、今も尚段々とアピールの熱が上がつて来ている。熱が入り過ぎて空回りしてるんだよなあ……ナンパされてる気分。うん、多分現状としては「俺、チンコデカインすよ……やらない？」って女がそいう男に誘われてる状況に近いと思う。そう考えると前世の女性って大変なんだね。身を以てその面倒臭さと大変さを知ったよ。

更に上がつていくアピールのボルテージに、俺は溜息を吐いて肩を落とす。溜まり始めた疲労感に一瞬瞼を閉じ、ふとこれまでに至る経緯を思い出す。……正確には、現実逃避とも言う。

未だに続く喧しいアピールの数々を聞き流しながら、最近多くなつたと感じる現実逃避にスムーズに身を任せて思考の渦へと沈む。いや、まあ軽い回想をするだけなんだがね。この人達が落ち着くまではちよつと考え方をしてよう。

ともかく、俺は思い出す。シリアスな展開になるであろうと予測していた行動の始めからの、今に至るまでの話の流れを。

俺が今こうして二人の冒険者達の元……ベルに妙な魔法を掛け、悪戯をした奴等の所へと来たのは、言つてしまえば「テメエらよくやつてくれたなアン!」と報復しに来たのである。……いや言い過ぎた、正確には「もーつ！こんな事しちゃノーなんだからネー!」と注意をする為にやつて來た。

あ、因みにコイツらの存在やちよつかいやらに気付いたのは、頼もしく最高の俺の能力のお陰です。マジで俺の能力便利過ぎイイ！コイツはグレートだぜ！愛してるー！

で。

うん、いやね？

俺としては気まぐれで能力を使つたんだよ。「ベルが少し情緒不安定になつたのは誰かの魔法だつたりー！」「なんか覗きをしてる人が居るかも？だつて俺男だしあつはつはー！」と巫山戯て異能を使用したんだ。

能力の使いによつて行使できる効果の一つ、『探知』。それを周辺に使つて、まあ調べてみたんだよ。……あー、『探知』と言つても、俺の能力は応用が利くから効果の切り替えで『千里眼』みたいにその光景を間接的に見れるんだけどね？

分かりやすく言うと、俺の『探知』は周辺の事をゲームのマップみたいにも見れるし、カメラを通した視界みたいにその景色を見れるつて事。超便利でしょ？

…………え？ 分かりにくく？ そうだなあ、じゃあもつと分かりやすく言うと……俺は温泉で隣の女風呂で誰がどの位置に居るかを把握出来るし、何ならその光景を間接的に見る事が可能……詰まりはマジエステイツクパラダイススコープが出来るんだ。……凄いだろ？ 相手にもバレずに覗きが出来るんだぜ？ いやしないけど。……しないよ？
…………しないよ？ ホントだよ？

それで、だ。

その超能力の応用の超便利な『探知』。それで周囲を探つてみると……あら、何と言う事でしょ。如何にも怪しい二人組が屋根の上から俺とベルの部屋を覗いているではありませんか。嘘だろ承太郎。冗談でサーチしたのに、実際にそんな怪しげな奴等が見つかつた事に内心凄くビビつた。「ファツ！？嘘やろ！？」と。気まぐれが呼び寄せた予想外の事実に心底驚愕した。

尚、この時はまだ近くにベルが居て、「ユキハ……ユキハ……♡」つて甘えられていた。ベッドの上で抱き締められ、俺は本当に嬉しそうに頬を緩ませながら身体を締め付けてくるベルの頭を撫でていた。

…………うん、その時に明らかに発情してた気がしたけど気にしなかつた。身体にモゾモゾと胸やら下腹部やらを擦り付けられていようが

気にしなかつた。……決してその胸の柔らかさを堪能したりその胸の中心がちょっと硬くなっていた事や、少し湿り気を帯びていた股の部分を擦り付けられてなんか「ぐちゅり」と音を立てていようが……俺は、気にしなかつた。

……気にしなかつた。決して理性の壁が崩壊しそうになつてないなかつた。

さて、話を戻そう。

それでだが、俺はその“探知”によつて見える光景の中の女……二人の会話を読唇術で読み取つた。残念ながら“探知”は音までは拾えないので。……いや、ちょっと能力の工夫をすれば聞こえるかもしれないが。

ともかく、その千里眼的な視界からの読唇術で読み取れたのは……「私の魔法は最強だろ」「ふざけんな」「何で仲が悪くならない」……と、その辺り。

……うん、いや、そのね？

お前ら何やつてんだ、と。

状況を把握して、俺は呆れて思わず溜息を吐いてしまつた。因みに俺はその辺り……その二人の存在に気付いた辺りから、ベルに「ちょっと興奮してるから、落ち着く為に外を散歩してくる」と理由を付けて抜け出して來た。本人は「……うん……僕も、落ち着かない」と……駄目だから、ね……♡と了承した。……いやあ、見る限り身体の昂りを落ち着かせる的な意味だと思つたのは気のせいだらうか……。おつと、これ以上は止めとこう。

……しかし、いやあ……コレを前世で例えると「リア充のイチャイチャに嫉妬をした非リアの童貞達が悪辣な悪戯を仕掛けて來た」つて事だからな。……うん、色々と逆転してから考えが簡単に付いた。非リアの妬みつて怖いな。けど、それらを加味してもこの世界つてやつぱり狂つてるな。

と、そんなちよつかいを出して來た女二人についてだが、俺は言うなれば“注意”をしに來ただけだ。そう、あくまで口頭による「今後はこんな事をするなよ」と言う念押し。……あくまで念押しで済んだ

のは、初犯であり最終的にハッピーエンドになつたから「まあこれで良いだろう」と考えたのだ。

……まあ、あんな精神に悪影響を与える魔法をベルに使つたのは……正直俺の異能で半殺しにしてやろうかと思つたけど……実質の被害は過大では無かつたから、説教程度に収めようと決めた。

尚、バッドエンドに向かつていた場合は迷い無く半殺しにしていた。

ヒヒ……L v. 2が何だつてんだ……ツ！俺は、俺は神から最強の異能を貰つてんだぞ！？そうそう負ける訳無いだろうがっ！（踏み台転生者のセリフ）

いやまあ、やらなければね。暴力沙汰とかあまり好まないし、面倒だし。戦闘は最低でも正当防衛に留めたい。だつて異能を使うのも疲れるし。あくまで今回は説教に留める。……襲われた場合は、対処をさせて貰うが。

……と、詰まる所は「ちよつかいを出した女冒険者達に注意をしに来ただけ」なのだ。甘いと言われるのかもしれないが、俺はそう決めた。……一步間違えたら関係は崩壊していたのかもしれないし、人によつてはガチギレしてぶん殴つたりするのだろう。

で、その後「いやwww俺はガチでキレると意識飛んでさwww氣が付いたら相手血だらけになつてんのwwwwww」とかつてイキリ始める場合も有るのだろう。イキリ転生者はウザいんで出て来ないで欲しいです（真顔）。

……ああ、イキリ転生者の話はいいんだよ。俺つてば話が脱線しそうだろ。まあこの世界に他の転生者とかは居そうだよねーと言う話も有るが、それもまあいい。放置だ。

閑話休題。

そして、長々と連ねていた思考をいい加減に解き、考え方を止める。

で、嫌々ながらも目を背けていた現実からの逃避を終了させる。

……回想にしては密度が濃い上に長く、無駄な部分も有つたが仕方無いだろう。だつて、「胸は小さいが感度はグッド」「下は……良いんで

すよ？（ナニがとは言わない）」的な台詞をズラリと並べて来るのだ。
いやあ、女が如何に男を求めているのかが分かつたよ。ヤリチンのナ
ンパかつての。

そして、俺は半分しか向けていなかつた意識を、二人の女冒険者の方に完全に向ける。同時、鮮明に聞こえて来てしまう哀れなる自己アピールの数々。

「……そう、私達は運命的な出会いだつたんですよ……！」

「スタンド使いとスタンド使いは惹かれ合うように、奇妙な運命によつて私達は出会つたんだ……ならば！ならば、この出会いを無為にしてはいけないッ！」

未だに無駄なアピールを続け、必死に興味を惹こうとしている意思は可愛らしいが……見ていて滑稽であるようにも感じる。だつて俺恋人持ちだし、ナンパとか拒否確定だし。ハツキリ言って無駄なんですよねえ…………すまない、リア充で本当にすまない……。

……で、片方の奴には「何でジョジョ知つてんだよ」と突つ込んだ方が良いのかな？何で香ばしいジョジョ立ち的なポーズ決めてるんだろう。まさかダンまち×ジョジョのクロスオーバーの世界じやあるまいし。……無いよな？

「そう、コレは運命……私と貴方は運命によつて、今此処で出会つたんです！」

「そして、その出会いは決して偶然なんかじやあないッ！出会いには、必ず何かしらの要因が有るのだからッ！」

いや、きっとギヤグ時空だからネタが溢れているのだろう……きっとギヤグ時空は何でもアリだから問題無いよね！そう考えて無理矢理に納得させる。

ほら、f a t e のカニファンだと結構何でもアリなのと同じだよ。または、日常で空からシャケが降つてきた一みたいな有り得ない事象とかさ。そう言う事だよ。

……いや、ギヤグ時空の作品の話はいいんだよ。そう言うギヤグ系は大好物だが。

それよりも、今はこの女冒険者達の話だ。

今も飽きず絶えず何かとアピールをしてきて、分かりきつた本題を切り出さない二人に俺は嫌気が差す。例えるなら、手紙で屋上に呼び出されたは良いものの目の前の人人がモジモジとしていつまでも話を切り出さない、みたいな。……アレ本当に何なんだろうな。あの後結局「な、何でもないっ」って謝られながら別れたし。用も無いのに何故呼び出すのだろうな。……つと、脱線した。

まあつまりは、さつさと言いたい事を言つて貰つてソレに応えて早く「さようなら」したいのだ。応えるとは言つても、その返事が相手に取つて色良いモノであるとは限らないがな。ふはは。

……うん、正直セツクスアピールをしてきた辺りから本題については分かり切つてるんだけど、いつまでもソレをストレートに言わないから話が進まなかつたんだよな……何が「趣味は官能小説を読む事です！」だ。ぶつ込んでくるんじやねえよ。自己紹介じやなくて要点を言えよ。

さて。

俺は一息吐き、長く続けられているこのぐだぐだとした流れに終止符を打とうと決心する。こんな展開が遅々としているようじや、ラノベだつたら酷評間違い無しだな！

そう思いながら、俺は二人の本意を引き出す一言を放つ。……最初からコレやれば良かつたじやんと思つてはいけない。何せ俺は前世はコミュ障だつたのだ。今世もその名残は残つてゐる。

前世にて半ぼつちかつコミュ障であつた俺には、人が話している時に言葉を差し込むなんて真似は出来ない。小学校の頃は人との距離の測り方がまるで出来ていなかつた為、正に黒歴史と言つても過言では無い程の酷い過去を持つ。……苦い経験が有るから、精神は成長したんだけどね……ぼつちトークはある程度話せるぞ（自嘲の笑み）。

例えば、ロクに友達が居ない奴が会話ぶつた斬ると、後で皆で「アイツ空氣読めないよねー」「ホントそれなー」「でも友達居ないし仕方無いよなー」的な陰口叩くとかな。陰口は本人の居ない所でやれよと何度思つた事か……本人が教室に居るのに気付いて、尚且つ視線をチラチラ寄越してクスクス笑いながら陰口叩くんだぜ？陰口つての

は本人が居ない所でやるから陰口と言うのであって、本人が居る所でそうやつてグチグチと悪く言うのは侮辱や侮蔑と言うのであって陰口とは近くとも遠い物であつてだな……つて、前世の小学校の頃の話はいいんだよ。もう忘れろよ俺。昔のあの佐藤君と鎌田君と藤村君と松山君達の事は忘れろよ。

ええい、話を戻せ。脱線が多い。

で、そんな風に実はぼつち経験がありコミュニケーションに自信はあまり無かつた俺だが……今世は一味違う……！いや、二味も何味も違うぞ！

俺は、転生した今、ぼつちじやないのだ！他人の会話を「あのさ……あ、悪い。そつち話していいよ」「アハハ……それで……つと、何でもない」と割り込む事も出来ない俺では無くなつたんだツ！だつて最高に可愛い幼馴染みの彼女居るし！リア充だし！転生者だし！

俺は「もういいから」と二人のアピールを強制的に止め、二人の顔を見詰める。真剣に、率直にその言葉を遠回しな言葉を放つていた女達に放つ。

その魔法の言葉を、ぶつける。

「で、本音は？」

「やらせて下さいお願ひします何でもしますから！」

「セックストレート。ビックリ。魔法の言葉を最初から使えば良かつたな。話が早く進んだしね！ポポポポーン！」

「で、本音は？」の効果は偉大。ラノベや漫画でも「別に、彼女要らねえし……」「で、本音は？」「欲しいです。……ハツ！」と言つた具合に本音を引き出す不思議な言葉だ。他には「あ、貴方なんかの……ソレなんか、全然欲しくないもん……」「ほう……で、本音は？」「……欲しい……貴方の、貴方の『ピーツ』が欲しいツ！」みたいなケースもある。それエロゲや。ラノベだけでなくエロゲでも効果を發揮するこの魔法の言葉は凄いってハツキリ分かんだね。

……それはそれとして。しかし、それに対する返答をどうするか……。その正直で真っ直ぐな、性欲と煩惱に塗れに塗れた懇願に対し

ての返答は……うん。

微かに迷つた末、俺は一つ頷いてから口を開く。

「確かに、俺は童貞でそう言つた事にも理解も興味もある……女性からのストレートな誘惑なんて、そろそろ無い——」

「……ツ！じや、じやあ！」

「——だが断る」

「なツ、そんな……ツ!?」

フハハハハハ！このユキハ・スノウリイが最も好きな事の一つは、自分の要望を通そうと希望を抱く奴に『NO』と言つてやる事だツ！

なんて内心ジヨジヨネタを披露しながら、続けてハツキリと拒絶拒否否定の言葉を吐き出す。

「残念だつたな……俺は、愛した女以外を抱く事はしないツ！」

まだ童貞だけどねーと思いながら、俺はそう叫んで二人にそう断言する。直後、崩れ落ちる非モテ女冒険者二人。「ウソダンドコドーン！」「そ、んな……ツ！」と悲痛な叫びと共に床に伏した。

……流れ的に元気に叫んじやつたけど、後になると凄い恥ずかしいなコレ……いや後悔はしてないけど。実際恋人以外とはエロい事するつもりは無いから。ホントだよ。ユキハウソツカナイ。

「うぐ……男、奇跡的な出会いをした男が……遠ざかって行く……」

「……やはり、普通の愛を育む事は不可能なのね……」

ナンパから始まる愛が普通な物か。あと出会いは奇跡的でも何でも無い。

内心そうツツコミを入れながら、俺は落ち込んだ様子の二人に視線を向ける。……取り敢えずは一件落着、だろうか。

一先ず安心して、俺は深い溜息を吐く。もしかしたら……いや、絶対に今後も有るのであろう……男に飢えた女達の対応と言うクソ面倒な事が起ころ未来を考え、俺はゲンナリとした。今回はまだ被害が少なかつたから良いが、次はどんな面倒事が起きるのか……。

そんな懸念をしながら、俺は悲しみに暮れていている今回の飢えた女達をジツと見詰め……と、其処で俺はふと気付く。

何故、俺はこの女達に注意を向けるような目を向けている？

考えてみて、俺は思考しながら視線の先を詳細に把握する。……見る限りは、悲しみに覆われているよう……いや待て。違う。違うぞ。

視線を辿り、何故無意識に女達に目を向けていたのか……ソレを次の瞬間に悟り、俺はフツと苦笑いをした。脳裏に電流の如く走り抜けたその考えが、俺がこの世界に順応した事を雄弁に知らせた。

……何だか、この後ヤケになつて行動を起こしそうな様子だなあ。それを事前に察知したのか、俺の身体……恐らくはこの世界の男としての本能がソレを察知したのだろう。この後、企みが失敗した飢えている女達が、男が目の前に居る状況で何をするのかを。

……感情的に暴れ、目の前の男にナニをしようとするのか……ソレをきつと、俺は無意識に察して視線を向けていたのだろう。

「……あー……」

苦笑いと共に、「こりやダメだわ」と呻きを漏らす。何だかんだでこの世界に慣れ始めたらしい事を嬉しく思いながらも、段々と染まつてしまつている事に悲しみも感じる。

未来予知の如く、危機感知が進化したのかは分からないが恐ろしくリアルに想像出来た今後の展開を予想し……乾いた笑いを上げる事が出来ない。

別に危機感知能力が無くとも、状況に存在する要素を掛け合わせて、それらを加味して展開を予想すれば今後の展開を探偵の如く察する事も出来るだろう。危機を思わせる要素は、考えてみれば充分にこの場に溢れていた。

例えば、この二人は前世で言うと童貞を捨てたいナンパ野郎であつたりとか。例えば、冒険者と言う野蛮な職に就く荒くれ者であるなら短絡的であるのは普通であるだろうとか。……其れ等を総合して考えれば、先ずは行動を起こす可能性のある「見境の無い考え方無しの短絡的な人物二名」が登場する。いや、冒険者の中には例外も有るだろうが……テンプレに則ると大体そうだろう。

更に探偵の如く考えてみると、此処でこの世界の狂つた点……男が異様に珍しいと言う要素が危機を想わせる。……そう、俺を相手側の

立場で例えるなら……「絶食後に目の前に出された美味そうな餌である」、と言う事。

これらを考えると、あら不思議。自然と「あつ（察し）」と今後の展開は予測出来る。

短絡的……男に飢えた女……処女を捨てたいが為の暴走……あつ（察し）。

と、そんな感じで探偵になり切つて今後の展開を予測した。おふざけだつたが、鮮明にこの後の展開が分かつたので良しとしよう。

最初は本能で、次は理屈で。

目の前の蹲つている女達が起こすであろう行動に備え、若干引き攣つた苦笑いを浮かべながら俺は身構える。「わー嫌だなー」と咳きながら。

軽く右手を開き、足は肩幅程に開く。身体の準備を終えたら、次は対抗出来るであろう技の準備……神様特典、異能を発動出来るように待ち構える。事実、トリガーやは思念のみだ。即座に発動は可能……さあいつでも来やがれ！

先程まで蹲つて、感情的に「うわああああ!!」「男性が、其処に居るのに……ツ!!」等と、何やら叫んだり咳いたりしている二人の女の拳動を見逃さないように視線を真剣に向ける。男の存在に対する欲、そして自身の欲を口から吐き出している二人の女……否、獣達は。

不意に、ピクリと身体を硬直させる。まるで何かに気付いたかのように。

相手に拒否をされても、自身の欲を発散させられる事が可能な事に気付いたかのように。
直後。

「うるせえやらせろ！」

「覚悟！貴方が父親になるんですよ！」
「来ると思ったー！」

やつぱり来やがつたよコンチクシヨオオオ？

流石は貞操観念逆転世界……予想を裏切らないぜ！クソ、転生するならせめてもつと平和的な逆転世界が良かつた！

チイツと舌打ちをしながら、俺は思考を切り替えて無理矢理やる気を入れる。普段無駄な思考を混ぜて内面で巫山戯ていた部分を、全て切り捨てる。

「(……どうせなら、ふざけていたいんだが……)」

……無駄なお巫山戯を止め、全神経に意識を巡らせて全身を総動員させる。

一息吐き、直後に思考をこれまで以上にグルグルと回す。思考速度を上げ、襲い掛かってくる相手の行動やその後の行動等の事に意識を回す。回して回す。

目を見開き、飛び掛つて来る一人の女を鮮明に捉える。表情を消し、ただ相手を無力化させる事だけを考える。

相手を、無力化させろ。



戦闘を終えてからツンデレ狼系美女（T.S）と出会つたよと言ふお話。

「―――。」

瞬間、俺は己のみに宿してゐる異能の一つを発動させる。代償は要らず、その効果は指定するだけで能力が力を示す。

ただ、『属性』を指定して『効果』をその場に起こすだけ。余りにも幅広く、応用性が高過ぎる異能を発動させる。

その異能の能力は、『属性操る能力』。俺が神様特典として望んだ、三つの内の一つ目の異能。

「（『木属性』）

脳裏で使用する『属性』を指定し、その属性に属す効果を空想して発現させるだけ。今回使うのは『木属性』、その『属性』から具体的な効果をイメージして……創造。

考えたのは、木刀。木属性＝木＝木刀、と言う安易な連想からその『木属性』の『効果』を呼び出した。

何せこの能力は、『属性操る』モノだ。属性であれば何であろうと操り、例え『無属性』と言う曖昧かつ非具体的なモノも支配出来る。『無属性』と言うモノからイメージ出来る、『探知』や『消滅』と言つた効果を呼び出し扱う事も可能だ。

「―――ツ」

軽く開いていた右手に、木刀を創り出す。そして出現と同時に握り、鋭い吐息と共にブンと振る。軽い牽制程度にはなるだろう。

真っ直ぐと跳んで来た二人の女冒険者の軌道を読み、その直線的な動きに合わせて振るつた……のだが。やはりは冒険者と言うべきか、神の恩恵からなる身体能力は空中でもその力を發揮した。

「なん……ツ!?」

「ウツソだろお前!？」

驚きの声を上げ、二人は身を捻つて軌道を無理矢理変更して攻撃を回避した。雑な動きだが、回避には成功した。……変態の癖に、妙に

良い動きをしやがる。

俺の両横を過ぎて行く二人の動きを横目に、俺は前方に飛び出して跳んで行く二人から距離を置く。俺からして後方に跳んで行く二人は、その跳躍から荒くも着地を決めて此方に視線を向ける。

……仕切り直し、か？いや、またあのよう飛び掛るとは限らないが。

「……ねえ、木刀なんて持つてた？」

「いや、持つてなかつた筈……だけど、いつの間に……？」

「……何の手品かしらね」

怪訝に思う女冒険者達の呟きを耳にしながら、俺は深く息を吸う。右手の木刀に左手を添え、両手で確りと握る。膝を軽く曲げ、何時でも動けるように姿勢を取る。

同時、脳裏で『属性操る能力』を発動。指定するのは『雷属性』……そして使用する効果は、『麻痺』。

木刀にその『麻痺』の効果を付与し、即席のスタンガンモドキを作する。一瞬木刀にバチリと紫電が走り、刀身の部分にぽうつと僅かな光が灯る。……帶電、と言うには些か物騒だが。

だが、効果は絶大だ。この木刀に掠りでもすれば暫くは動けない。……尚、実体験である為に威力は保証する。

「まあ、細けえ事あいいんだよ」

「そうね……そんな手品なんかより」

「セツクスの方が大事だツツ！」

——最低だコイツら。

やる気スイッチを入れている俺の思考にそんな無駄な感想を抱かせる程に、この変態の女達は欲に塗っていた。どうせなら死ねばいいのに。

そう思つた直後、今度は突進して来る女冒険者達。無手な所を見ると、俺の身体を高い身体能力で取り押さえてそのまま行為に及ぶ腹積もりなのだろう。……一般人は余裕で拘束が可能な程のステイタス、と言う事を言外に告げている。成程、やはり変態でも冒険者な事には変わりないか。

観察しながら、俺は目を細めて二人の動きを見切る。……やはり素早いが、技術は甘いように見える。相手が一般人であり、尚且つ男である事が重なつて油断しているのだろう。フェイントも入れず、直線的なゴリ押しで襲い掛かって来ている。

まあ、確かに普通の男にならばそれは通用するのだろう。

「（だが）」

俺は其処で全身に再び異能を発動し、望んだ効果を巡らせる。今度は『無属性』を指定し、数多くの実験の上で身に付いた『強化』の効果を自身に付与する。

普段の特別な力の無い一般人の身体から、強化された力強い強靭な身体へと変化する。

まるで神の恩恵を受けた冒険者のような力を得て、俺は麻痺木刀を踏み込みと共に振るう。

「（――其処が命取り）」

油断大敵。一般人と侮つたお前達の負けだ。

普段の何倍にも強化された俺の身体能力は、先程の牽制攻撃よりも何段階も鋭い攻撃となつた。速度も威力も高められたその一撃に、女冒険者達は大きく目を見開かせた。

初撃の一刀に比べ、次撃の刀が余りにも違つていたからだろう。愕は表情だけでなく、突進していた身体も硬直させた。

其処を突き、俺は難無く麻痺木刀を一人目の女冒険者に当てる事が出来た。バシリと音が鳴り、その身体に木刀が直撃し。

バリバリバリイツ!!

紫電が飛び散り、その雷撃……正確には麻痺である効果が絶大な影響を女冒険者の身に及ぼす。

電流が全身に走り、ビクビクッと身を震わせた後に女冒険者は力無く倒れる。身体中に強力な電撃が走り、電流をマトモに喰らつた相手は暫くの間、ピクピクと身を跳ねさせる事しか出来ない。最小で数秒、最大で数分。耐性が無い場合は、一分以上は身動き出来ないだろう。

「あ……が……ッ……？」

当の本人は何をされたか理解出来ないようだ。……まあ、そうそう理解出来る筈は無いのだが。何せ、全身に氣絶寸前の電流を流す事なんて有る筈が無い。ただ電気が目の前に見えた、ぐらいにしか感じないだろう。

俺は木刀を降ろし、その光景を見て動きを止めたもう一人の女冒険者に視線を向ける。

……状況を把握して、既に距離を取っている。俺の持つ木刀が普通では無いと気付いて、様子見の為に距離を置いたのだろう。

先の一人と比べネタ発言の多い巫山戯た奴だったが、眞面目になるとそれなりにマトモな判断が出来る冒険者なのだろう。正体不明の攻撃に対して、恥を忍ばず逃げを選択する事が出来るのは良い判断だ。

……しかしまあ、残念ながら。

俺はその『麻痺』の攻撃が、木刀を介してでしか出来ないと言う道理は無いのだが。

「おま……ッ、何を――」

二度目の『雷属性』の指定、そして『麻痺』の効果を呼び出す。今度の『麻痺』の雷撃は付与では無く、魔法のような光線だ。

木刀を向け、照準を合わせて発射。思念によつてその雷撃を木刀から放ち、直線上に飛行させる。

バチバチと音を放ちながら、闇夜を裂いて雷光が走る。

「それの正体は、雷かッ！」

その雷撃が飛んで来るのを見て、その女冒険者は相棒の被害から正体を言い当てた。それだけでなく、直線上に飛翔した雷光を身を逸らして回避した。

……成程、それなりに優秀な冒険者なのか。相手の能力の正体を推測し、次発の攻撃は見切つたように回避したのは評価に値する。

しかし、まあ。
内心俺は、謝罪する。すまない、俺の異能が優秀過ぎてすまない、と。

言つてしまふと、その程度で俺の能力を攻略は出来な

い。俺と同等の異能を持つて出直して來い。

「があツツ……！」

次の瞬間には、避けた筈の雷撃を喰らつて麻痺している女冒險者の姿。力の抜けた身体を、理解出来ないと言つた驚愕の表情でドサリと落下させる彼女の姿が落下する。

…………すまないが、放つた『雷』の操作が出来ないとは言つていない。確かに先程、女冒險者は雷撃を回避した。身を逸らして、その雷撃は彼女の背後へと走つた。…………しかし、その後に雷撃は旋回して背中から攻撃を直撃させた。詰まりはホーミングしたのだ。

これについては、そもそもその雷撃の元が『属性操る能力』によって創られたモノなのだから、放出して飛ばしたモノであろうと俺が創つた『属性』なのだから操作出来るのは当然だ。…………こうして自在に操作出来る辺りも、やはりチートだと思う要因だ。

それと、効果を『麻痺』にしているから相手は回避出来たのかもしれないが……本来の『雷属性』の攻撃はもつと速い。殺傷の可能性があるからこの程度の威力に抑えているだけで、無力化用の『麻痺』でなければ身体を焼き焦がす程の雷撃は容易く放てる。何なら回避出来ない程の速度と物量で放ち続け、身体が真っ黒に丸焦げにならせる事も可能だ。

…………やはりチートだな、俺の異能は。思わず苦笑いが浮かんでしまう。

…………まあ、何はどうもあれ。

「無力化、終了」

「……ふう……」

一息吐き、極度の集中を解く。思考速度を緩やかに落とし、削いでいた普段の思考を取り戻して行く。

フザケの無かつた無駄にクールな思考から、何時もお巫山戯たつぶりのおちやらけた思考へと。



「あー……凄い疲れた」

酷使した頭が痛み始めるのを感じながら、そう呟く。……マジで疲れた。と言うかやる気スイッチ入った俺つてば無駄にクール過ぎない？普段との落差が凄すぎるんじやが。もしかして別人格なのかなと疑うレベル。

やつぱり何時もの自分が落ち着くネ！俺はこんなおちやらけた巫山戯てる自分の思考が大好きだぜ！

それに、あの異能は最強だけど、全部の操作を担うのもクソ疲れるから嫌なんすよねえ……。いや、まあ『属性操る能力』だから仕方ないけどさ？無駄なお巫山戯を削いで、操作に集中して思考を回さないといけないからなあ……。

思いながら、瞼を閉じて気休めの休息を取る。『属性』を全て操つていた自分の頭を労り、俺は深呼吸を繰り返して披露した身体を回復させる。既に能力は全て解除し、『強化』も『麻痺』の付与も止めている。……うん、ずっと『属性』の維持も辛いからね。主に思考的な意味で。俺の一つ目の異能、『属性操る能力』は確かにチートだ。必要な代償は無く、魔力消費も存在しないエコで便利な最強の能力だ。

しかし、その代わりに能力の使用には『思考』を必要とする。発動には『属性』と『効果』の指定が必要で、その後は自分の頭で好きなように操れる。……そう、自分で操るのだ。

例えば『火属性』。ソレで手元に火を創り出したとしても、『思考』を続けないと直ぐに消える。更にはその後の使用も『思考』によつて操作するのだから、本当に頭を使うクソ疲れる異能なのだ。

一つの例として、『火属性』を指定してから相手に炎を飛ばすまでを仮定しよう。

その場合、先ずは指定してから炎を創り出してからその存在を意識して維持し続ける。此處で意識が途切れれば炎は消える。

続いて相手に炎を飛ばすまでだが、その途中でも『思考』は続ける。空中をどのように飛ぶのか、相手に真っ直ぐ飛ぶのか曲がりながら飛ぶのか等も意識して操作する。此處で操作を怠ると爆発してその場で爆散したり、暴走して何処かに飛んで行ってしまう。

で、着弾してからも『思考』は続く。炎なら、炎 자체が消えてしまふまで……水等で消されない限り……維持をする。炎の勢いが弱まり、消えてしまふまで維持の『思考』も必要だ。着弾したと同時に『思考』を途切れさせると、ただ目の前でフツと消えると言う結果になる。盛大な猫騙しなだけなのだ。

……詰まりは、ずっと『思考』を続ける。ね？ クソ頭使うでしょ？ 憂い疲れるんすよコレ。

更にはそれの『思考』を続けながら、身体の操作もしなきやいけない。『属性』の操作だけに意識を集中させていると、相手が物理攻撃して来た時に相手の攻撃を躱せなくなつたり、何かの行動に対しての対応が致命的に遅れてしまうのだ。

だから、俺は戦闘時に異能を使用する場合は、常に並列思考だ。近接戦闘の思考と、異能操作の思考。其れ等を、戦闘中は途切れさせること無く常に回しているのだ。そりやあ疲れる。

ダンまちの並列詠唱と同じ位の難易度だろうか……それだつたら、ダンまちの原作五巻のリューさんのゴライアス戦つて凄かつたんだね。俺には真似出来ねえよ……。いや、魔法がどんな仕組みかは分からぬけどさ。

「しつかし……ヤバイ、 憂い疲れたぞコレ」

恐らくは初の対人戦であつたからだろうか、想定以上の頭の酷使の具合に苦笑いしてしまう。並列思考の疲労が過去最高だぞ、クソッタレ……と言うか忘れてたけど此処屋根の上じゃねえか。気抜いて膝抜かしたら転がり落ちて大変な事になるじやんか……。

やれやれとこめかみを探んで、俺は深呼吸を続ける。……うん、やつぱり思つた以上に疲れるなコレ。口クに思考纏まらねえよ。

こんな屋根の上じや、倒れる事も気安く出来なん？

「…………ちょっと待て」

ふと気付き、冷や汗が流れる。閉じていた瞼を開き、震え始めた視界の中を探る。……アレ、コレ……かなり不味くない？

確かに、今の俺が居る場所は屋根の上だ。所々平面が有るが、大体は斜めに坂になつていて……倒れたら転がつて落ちて行きそうな場

所だ。身体が動かせるなら問題無いが……動かせない人なら、そのまま落下するだろう……。

……例えるなら、身体が痺れて動けない人だとか。

「……不味い……ツ!?

つい先程俺が無力化した『麻痺』で身体を痺れさせた女冒険者達が倒れたのは屋根の上だ。それも、坂になつている場所で麻痺させたのだから……詰まりは、屋根から転げ落ちた!?

チツ、考えが足りなかつた! もつと場所考えろよ俺! お馬鹿さん!
本当にお馬鹿さん!

「クソ……ツ」

舌打ちをしながら、未だに痛む頭を再度使つて思考を回す。正面の視界の中には既に女冒険者の姿は無い。と言う事は、既に二人共屋根から落下していると言う事だ。クソ、冒険者でも高所からの落下はキツイだろ……!

……多分もう落ちているだろうから、落下中の奴等を助けると言う選択肢は消えた。今から行つて出来る事は、『回復属性』で治癒をする事……! よーし! 癒してやるぞこの女郎! 全快させて古傷ごと回復させてやんよ!

考え、俺は身体を再起させる。頭は未だにズキズキと痛むが、また能力を使うしか無い……ツ! 仕方無い!

俺は即座に救助に向かう為、再びクソ疲れる能力を使う。取り敢えずは、『無属性』の『強化』を――!
と、その時。

「何を焦つてやがる」

後方から、そんな女の声が聞こえた。

「……え?」

異能の発動を中断させ、俺は声が聞こえた方向へそのまま振り返る。クールでありながらも綺麗な美声……さてはこの声の主は、美女だな!? 俺には分かるぞ!

そうして振り返ると、俺より上方の屋根に立つて居る女の姿……夜だからかハツキリとは見えないが、シルエットから獣耳的なサムシン

グか見える。後は長身でスリムで有る事ぐらいだろうか。……獣耳！ケモミミ美女ですつてよプロデューサー！尻尾がゆらゆらとしますよプロデューサーツ！

「つたく……探してんのはコイツらか？」

「……！」

屋根の頂点に立つてゐる謎の美女が荒々しく言いながら顎を差し向けたのは、彼女の傍らの足元。其処には……雑に積まれた二人の女冒險者達の姿。既に屋根から落ちていたと思っていた、一人だ。

彼女からの問い合わせに對して、俺はコクコクと頷く。……もしかして、この人があの二人を助けてくれたのか？

思いながら、俺は闇に紛れて姿の見えない謎の美女に視線を向ける。

「……こんな男も居るのか」

「え？」

「……何でも無エ」

何かを呟いたようだが、此処からだとよく聞こえない。……いや、身体を酷使し過ぎたからか？『強化』はやり過ぎると身体を壊すからな。聴覚も鈍くなってるんだろう。

……つて、別にそんな事はどうでもいいんだよ。取り敢えず……と言ふかほぼそうだろうが、この人があの二人を助けたのか訊かないと。

「あの。……貴女が、二人を助けたんですか？」

「……まあな。目の前で人が死なれたら目覚めが悪いしな」

俺の問いにぶつきらぼうに肯定する謎の美女は、フンも鼻を鳴らして空に視線を投げた。……尻尾のシエルエットが揺れているのだが、コレつて照れているのだろうか。自分が他人に助けた事を知られるのが恥ずかしい、とか？

もしやツンデレ要員か……！良い事をしたのにそれを知られたくないとか、なんか可愛らしい人だな！初対面なのに俺に對して好感触だよ謎の美女さん！

……しかし、ケモミミでツンデレか……ソレ何処のベートさんだよ

?あ、因みに原作のベートさんは俺結構好きだよ。ツンデレとかあまり好きじゃないけど、あのツンデレは良いツンデレ。暴力を無意味に振るわないし、何だかんだ優しいし。

多分ベートさんだったら、目の前で人が屋根から落ちてたらブツクサ言いながら助けるんだろうなあ。だつて実は優しいし。死んだ人の墓には本人の好きな花の束を供えるしね。まあその後実は生きていたつて分かつて凄い憤つてたけど。ソード・オラトリアのあの話は大好き。

「……ありがとうございます。その、一人を助けてくれて」

「……気にすんな。礼を言われる程の事をした訳じやねえ」「貴女がそうだとしても、俺からすれば助かつたんです。……本当に、ありがとうございます」

「つ……、……そ、うか」

お礼は大事。ちゃんとお礼を言える人は相手に好感触らしいしね。ソースはインターネット。本当にそうかは知らない。

いやあ、でも本当に拾つてくれて助かつたよ……また異能を使うのも疲れるし、身体を動かすのも怠いし。手間が省けて良かつたよ。死んでた場合もあるし、この人には感謝の念しか無いよ。

少し照れた様子の謎の美女は、コホンと咳払いをした後に俺に視線を向けた。……相変わらず姿は見えない。アレか、今夜は月光が雲に隠れてるからか?チツ、なんで月隠れてるんだよ!雲晴れろよ!

「……ところで、テメエは何処のファミリアのヤツだ?途中から戦闘を見てたが、お前みたいな男は見た事無エ」

「あー……」

アンタ見てたのかよ。偶然落ちて来る所を拾つた訳じやなくて、途中から見てて落ちたのを拾つたんですね。……やっぱり良い人じやないか。

少し驚くが、直ぐに落ち着く。……うーん、詰まりは俺が二人を無力化したのを見られたのか……『感知』を切つてたからこの人の事に気付かなかつた。異能を使う所を見られるのはあまり宜しくないんだが……えー?この人覗き魔?

……いや、違うか。この人は一部始終を見てたから直ぐに助けに入れたのか。何だよ覗き魔かと思つたけどただの良い人じやねえか（手の平返し）。

覗いてたけど良い事したし覗き魔じやないね。うん、そうしよう。「……えっと、まだファミリアには入つてません。今日オラリオに来たばかりで」

「……はアツ!?」

投げられた問いに答えると、彼女は驚愕した反応を見せた。

……あ、そつか。俺がファミリアに入つてないって事は、神の恩恵を受けてない一般人が冒険者を無力化したつて事になるのか。……ヤバイ、しくじつた!?俺正直過ぎイ！色々とマズイですよ！

先ずファミリアに未加入の男つて事で一つ、次に恩恵無して冒険者を無傷で倒した事で二つ、他にも色々と不味い。

その力は何かと訊かれたら答えようが無いし、ファミリアも無理矢理望まない所に入れられたくは無い。けれど、自惚れる訳では無いが、素で冒険者を圧倒出来る人材である俺を目の前にして、そういう見逃す人が居る筈が無い。あと俺男だし。男だし。

……やだ、俺つてば割と危機？

突然現れた危機に冷や汗を流していると、驚いた様子だった謎の美女は少ししてはあと深く息を吐いた。そして、その後の発言が何かと俺は身構え……。

「……まあ、いい。詮索はしないで置く」

「……えつ？」

しかし、予想に反して相手は深く訊かなかつた。……えつ!?何もないの!?ウツソだろお前!?

目を見開いて彼女を見つめると、その謎の美女はファンと鼻を鳴らしてぶつきらぼうに言つた。

「訊かれたく無工事は誰にだつて有るだろ。そんな事を訊く程、オレは腐つてない。それにテメエも男だ、此処に来たつて事は訊アリだろ」

「……。」

「野蛮な奴等が無茶苦茶居るこの都市に、旅行で来る馬鹿な男は居ねエ。大体は事情が有つて冒險者になるんだろうし、そんなお前に嫌な事を無理に訊く事はしねエよ」

「…………。」

「確かにその『力』に興味は有るが……無理矢理訊く事はしない。恩恵無しでも強いからって、無理矢理ファミリアに入れるなんて真似もしねエよ」

「…………。」

「だから……何て言うか、だな。……安心しろ。テメエに変な事はしねエよ」

ちよつと待つて。この人良い人過ぎて泣きそう。

何だよこの人、凄い良い人だよ……惚れそう。ヤダ素敵！謎の美女さん抱いて！そう口走りそうになる程に感動してる。

だつてファミリアに誘う事もせず、俺の意思を尊重してくれんだけよ？男だからって興奮した様子も無いし、寧ろ紳士的……いや、淑女的な対応をしてくれてるし。ベルが居なかつたら惚れてるよつ！

俺は胸をキュンキュンさせながら、この最高に淑女的な謎の美女に熱い視線を送る。……謎の美女さん……ツ、貴女つて人は……ツ！

もうさ、性別が入れ替わつてたら完全に乙女ゲーだよねコレ。性別反転したら、紳士的な獣人と訳アリな少女……完全に恋が始まる一步手前じやないですかヤダー！

「……優しいんですね」

漏れ出るように、俺は微笑みながらそう言つた。いやだつて、思わず言つてしまふだろコレは。感動が溢れちゃつた。

すると、その言葉に驚いたように耳のシルエットが跳ねた。そして、「ば……ツ、馬鹿じやねえのか！」と恥ずかしさを隠すように謎の美女さんは叫ぶ。

「オレなんか優しくねエ!? コイツらを拾つたのも気まぐれで、テメエの事を深く訊かねえのも気まぐれだ！勘違いすんじゃねエ！」

ツンデレキター！ツンデレキタ——（。▽。）——!!

この「勘違いしないでよねつ！」ベクトルが、この人のツンデレが、

メツチャヤ胸にクルぞ……ツ！ 良い事をしたのにそれを認めようとして、「勘違いするな」とツンツンしているこの感じ……ツ！ イイ！

ヤバイ、ツンデレにハマりそうだコレ……！

……ふう。オッケイ、落ち着いた。

「……分かりましたよ、勘違いしないです」

「……ならイイんだよ」

勘違いしないで優しいと思つてるんで大丈夫ですよね？（ニツコ

リ）

と、続けて言おうと思つたが止めて置く。多分延々と会話が続いて、最終的に肉体言語で教えられる事になりそうだ。暴力は勘弁。……しかし、何時になつたら姿を見れるんだ。円盤になると謎の白い光が取れるの？ それ何処のラツキースケベアニメ。トラブルっちゃうの？

まあ、姿を見れないのは残念だが……最悪でも名前は聞けないだろうか。ほら、何時までも謎の美女つて呼ぶのもアレだし。何ならお名前はお伺いしたいじゃないですか。

と言う事で、俺は彼女の名前を訊く事にした。

「俺は、ユキハ・スノウリイって言います。……貴女の名前は？」名前を聞くなら先ずは自分が名乗らんかイツ！ と言われる前に、自己紹介してから名前を訊く。よく居るよね、自分の名前を言わないで相手の名前を訊く人。

で、後は謎の美女さんの名前が明かされるのを待つだけだが……果たして。

「テメエに言う名前なんて無い」とか「名乗る程の者じやねエ」とか言われるのだろうか。出来れば普通に自己紹介して欲しいのだが。

……と、俺がそう思うと。

「……べート」

「……はい？」

少し、耳がおかしくなったのだろうか。

俺は首を傾げて、「わんもあぶりーず？」と内心動搖して聞き返す。いや、俺が疲労で耳が可笑しくなっているのかもしれないが……も

し、正常であつたのなら。

……今、ベートって言つたか？

「ベートだ。ロキ・ファミリア所属、ベート・ローガ」

そうしてフルネームと所属のファミリアが明かされると同時に、偶然なのが雲が晴れる。

空から月の光が差し、辺りが微妙に照らされ……今まで見えなかつた彼女の姿が晒される。

雑に一つに結ばれた銀の髪に、鋭さと荒々しさを見せる琥珀色の瞳。

左頬には稻妻模様の刺青が刻まれている。しかしその痛々しい刺青に反して顔立ちは整つており、美貌からはクールな印象を与える。頭部からは銀狼の獸耳、尻からは同色のフサフサとした狼の尻尾。一目で見える武装は金属の靴と籠手だろうか。

「……えつ」

声を漏らし、驚愕した。

……「ベート・ローガ」と言う名前には、心当たりが有る。と言うか、このダンまちの世界に存在するキャラクターなのだだから知つていいのは当然だ。

ロキ・ファミリア所属、ウエアウルフ獸人のLV.5の第一級冒險者。二つ名は【凶狼】ヴァナルガンド。

そして……原作では、男であつた筈の存在だ。

しかし、知識の中の彼と同名の彼女、ベート・ローガは……今日の前に居る。容姿の特徴はそのままに、美男子から美女へと変化しているベート・ローガが。ツンデレで、実は優しいベート・ローガが。ふむ、それが、女に……。

……成る程、察した。

「……ベートさんとお呼びしても？」

「……構わねえが」

「はい。……では、これから偶にでも仲良くして下さいね、ベートさん」

「……、……ああ」

つまりベート・ローガは、この世界でTSしたのだ。ベル・クラネルと同じように。

……ふむ、成る程……。

コレを考えたのが神だと言うのなら……俺は声高らかに叫ぼう。今この胸の内を占める感情を、想いを……力強く、叫ぼうじゃないか。時々殺意しか感じない神様だが、今回に関しては全力で感謝しよう。嗚呼、神よ！その意向は最善であり最高であつたぞ！

サンキュー・カツミ。ありがとうッ！！



間話・そうして彼と彼女のラブシーンが差し込まれて
読者は砂糖を吐くであらうの巻。

……昔から、僕には幼馴染みが居た。

幼い頃から……それこそ、物心付く前から共に育ち過ぎて來た、
僕の大切で最愛の存在。昔から想いを抱え恋慕して來た、愛しくて格
好良い幼馴染み。

名前は、ユキハ・スノウリイ。

白髪青眼で、クールで恐ろしく整った綺麗な容姿を持つ、この世界
では限りなく希少である男の子だ。性格は優しく温厚、相手が誰であ
ろうと目を合わせて会話をすると言う其処ら辺の女だつたら直ぐに
勘違いするような振る舞いをする天然の美少年だ。……無意識と言
うか、無自覚な部分が目立ち過ぎるけど。

現在、仲の良い幼馴染みと言う関係……あ、いや、違つた……今は、
その、恋人だつた。えつと、その、恋人の関係となつているユキハと
の出会いは、言つてしまふとコレと言つて特筆する程では無かつた。
物語のように、運命的な出会いな訳でも無かつたんだ。

ただ、気が付けば傍に居たのが彼だつた。物心が付き、近くを見れ
ばユキハが居た。幼い子供にしては、少し異彩を放つていた男の子
……ユキハとの、幼馴染みから恋人に至るまでの出会いの始まりだつ
た。

……とは言うものの、そんな始まりからその後に特筆すべき出来事
が無いのかと言われば、そうじやない。始まりこそ特異性の無いモ
ノだつたけれど、その後の僕とユキハとの日常はとても彩りを持つた
モノだつた。……いや、正確には僕のだろうか。

ユキハがそう思つていたかどうかは分からなければ、少なくとも僕
はとても世界が美しく見える程に、ユキハと共に居た時間は凄く充実
していた。それこそ、世界を愛せると想える程に。

そんな世界を愛せる程にユキハと共に居た時間は楽しかった、と言
うのは……まあぶつちやけると、恋をしていたからだ。昔から共に居

た、優しい幼馴染に惚れていたからだ。好きな相手と共に長く楽しく居れるのだから、世界が輝かしく見えるのも当たり前だろう。恋をすると世界は輝くだなんて言うけど、それは僕にとつて正にその通りだと感じる言葉だ。

その、僕がユキハに惚れたきっかけとしては、一つは自然と好きになつたと言うのがある。

……女を嫌っている場合が多い男性の筈なのに、彼は特異と言える程に優しくしてくれた男の子なのだ。遊んでくれて、話してくれて、触ってくれて、笑ってくれる。そんなユキハに、彼の優しさに僕は自然と惹かれた。

次に、助けて貰つてから好意の度合いが更には増加した。チヨロいと言われるかもしれないけど、ユキハに助けられる度により好きになつて行くんだ。……今では、もう何度も助けて貰つて好意は計り知れない程に多いだけれど。

これに関しては、僕が何かと大変な時にユキハが助けてくれたからだ。掛けられた優しさ、と言うべきだろうか。

例えば、森の中で迷子になつた時に見つけてくれたり。ゴブリンに襲われた時に真っ先に庇つて助けてくれたり。……お爺ちゃんが死んでしまつた時に、優しく抱き締めて慰めてくれたり。他にも色々と有るけど、大きいと思えるのはこの三つだろうか。

一番最初に経験した困つた時である、迷子になつた状況からの最初の助け。命の危機から救つてくれた、もしかしたら死んでいたかもしない状況からの助け。お爺ちゃんの死にショックを受け、もしかしたら立ち直れなかつたかもしない状況から慰め立ち直らしてくれたと言う助け。

始まりの助け、生命の助け、精神の助け……その三つが無ければ、きっと今の僕は居ないだろう。恐らくは、今とはかなり違つた形の現在があるのだろう。もしかしたら死んでしまつてゐるのかもしれないし、今もまだ村に閉じ込もつてゐるのかもしれない。いや、もしかしたら普通にオラリオに來ていたのかもしれない。

まあ、色んな可能性があつたんだろう。例えば僕が男だつたり、ユ

キハが居ない世界があるのかもしない。……想像出来ないけど。
けれど、それらはあくまでもしかしたらの話。

今の僕が生きているのは、それらとは違つた世界だ。

ベル・クラネルと言う女が僕であり。ユキハ・スノウリイと言う格好良い男の子が居て。

二人で迷宮都市へとやつて来て、恋慕して来た幼馴染と恋仲になりました。

新しい家族……神様とも出会つて、新しく【ファミリア】を築いて。
冒険者となつて、危険だけどユキハと共に冒険をするようになつて。

そんな過程を経て、今の僕が居る。現在の世界が有る。僕の世界が在る。

……他の事など、僕は知らない。ただ、この世界でユキハと過ごしていいるのならそれでいい。

だつて、ユキハは僕の人生を彩つてくれるのだから。
何があつても助けてくれて、何があつても好いてくれて、何があつても近くに居てくれる。

僕に微笑み、僕の手を引いてくれて、僕を助けてくれて、僕を愛してくれて、僕を抱き締めてくれて、僕を受け入れてくれて、僕と共に居てくれる。

そんな、愛しい愛しい恋人が居る。僕が僕として在る限り、その最愛のユキハが居るなら僕と言う存在は定義されるだろう。

だつて、ユキハが居るから僕は今も、この綺麗に彩られた素晴らしい世界で生きているのだから。

♀ ^ ○ /

某日、ヘスティア・ファミリアのホームにて。
廃れた教会の地下に存在する小さい住処、神ヘスティアを中心として設立した団員数二名のファミリアの棲家。現在主神と構成員の合

計三名で住み着いている其処、その中のソファアーチで一人の少女が首を捻つて唸っていた。

その唸つている少女……その正体は【ヘスティア・ファミリア】の団長を務める存在、白髪赤目の人偶を連想させる容姿を持つ美少女、ベル・クラネルである。

「…………？」

今度は腕を組み、「おかしいなあ……？」と首を深く傾げながら唸る。その様子は見ているには大変可愛らしく、眉根を寄せて悩むようしている姿は一目見れば心に癒しを齎すだろう。

……現に、此処に一人その姿にほっこりしている者が居た。内心「可愛いなあ」とニッコリしながら、ベッドの上で横になっている少年が。

「…………どうかしたのか、ベル？」

この世界に置いて希少である男性、更には絶滅危惧種に認定される程の美貌を持つた白髪蒼目的美少年……【ヘスティア・ファミリア】副団長、ユキハ・スノウリイである。尚、表向きには内密にしているが団長のベルとは恋仲である。（ただし周囲には恋仲であろうと確信されている）

その超絶美少年であるユキハが、読んでいた本から目を離して首を捻つて頭を悩ませているベルへと問い合わせを投げると、傾けていた頭を戻してベルは口を開く。

「…………うーん、それがね？ ユキハ」

「ああ」

『たまには自分の事も見直してみたらどうだ？』なんて言われたから、回想をしてみただけど……』

「…………それで？」

「…………何と言うか、ユキハの事しか思い浮かばなかつたんだ」

「…………えつ」

ベルの言葉に、ユキハは虚を突かれたように声を漏らす。普段はクールな表情（中身は騒がしいが）をしている彼にしては珍しい間抜けた表情に、ベル自身も僅かに驚く。

ベルの知るユキハは、普段の平静時は冷たげな無表情ではあるが、会話をすると優しく微笑んだり穏やかな顔をする事を知っている。しかし、こうして素で驚いたようなキヨトンとしたような顔をするのは珍しいからだ。

しかし少しそればその表情は切り替わり、ニヤリとした意地悪な笑みへ変化した。

「……ほう？ つまりベルは、自分の事を思い返した筈なのに、俺の事しか浮かばない程に俺が好きなのか？」

「ふえつ!?」

その言葉に、ベルはボンツと頭から蒸気を発するのかと思われる程に顔を赤く染める。可愛らしく驚いた声を上げ、耳まで顔を赤くしたその姿は何とも可愛らしい。

その癒しや萌えを齎す姿に、正面から直視したユキハは内心浄化されかけた。「ああ、ゝ心がぴょんぴょんするじやあ、ゝ」とほんわかな気持ちになりながらも、ユキハはニヤニヤと笑みを浮かべながら口撃を続ける。

「……成る程、ベルは俺の事で頭が一杯になる位に大好きなのか」「そつ……それは、その！昔から僕と一緒に居たのはユキハだし、一番

僕の記憶に残っている事なんてユキハと一緒に居る事だし、恋い焦がれてきた幼馴染との日常が今までずっと続いて来たんだしさ!? そりやあ、僕の中がユキハで染められるのも仕方無いんじゃないかな

!?

「……つまり俺が大好きって事だな。はつはつはー、俺もベルの事で頭が一杯で大好きだぞー」

「そんな茶化すように言わないで欲しいなつ!? 何だか恥ずかしくなつて來たよ!？」

ニヤニヤと茶化してくるユキハの口撃に耐え切れなくなつたのか、ベルは「もう止めて!」と Pruitt とそっぽを向いた。
「もう、ユキハの馬鹿つ」

その可愛らしい言葉と共に、そうして顔を背けたベルの横顔……その髪の合間から覗く耳が赤く染まっているのがユキハからは見えた。

耳まで真っ赤になつてゐる事から、本当に恥ずかしいと言うベルの心情が分かり……色々と相乗効果が重なつて何か凄くなり、結果として。

ユキハは絶大なダメージを受けた。こうかはばつぐんだ！

「ゴフッ……!?（あつ、大変だ口から愛が）」

普段からクールな姿を保つてゐる（内心は恐ろしく喧しい）ユキハだが、今回ばかりは流石に威力が強かつたようだ。何時もは「（ヤバイよおおおおおッ!? ベルちゃん可愛い過ぎイ！ 愛が、愛が溢れるうううッ!）」と言つたように巫山戯でクソ五月蠅いユキハだが、普段はソレを表に出さずに過ごしてゐる。だが、この可愛らしさにはその思念が漏れてしまふ程の萌えが詰まつていたようだ。

別人格レベルで内と外が異なるユキハが、其れ等の差異を無くして吐血……もとい、口から愛を噴き出した。内側のギヤグ思考が外側の身体にも影響し、当然のように愛が溢れたようである。

「……ふう（……迂闊だつた。いつもは並列思考的なアレで外側に内側のギヤグ面が出なかつたのに、何時ものクールフェイスに似合わない事をしてしまつたぜ……もう☆俺つたら愛に正直なんだから☆）」

表は涼し気な表情をしているが、裏は相も変わらず騒がしく喧しいモノとなつてゐる。どうしてこうも内と外で異なつてゐるのか些か疑問である。まるで別の人格や思考が各々存在しているかのようである。

現在、クールな顔で口から溢れた血を拭つてゐる光景は、その内面を知つてゐる者ならばギヤグ的なシーンにしか見えないだろう。と言ふか溢れ出した愛が原因で吐血したのだから完全にギヤグである。「……ユキハ？ ねえ、今何か変な音が……」

「どうかしたか？」

そんなギヤグキャラ丸出しなユキハだつたが、立ち直りは早かつた。まるで「恐ろしく早い切り替えだ、俺じやなきや見逃しちゃうねえ……」と言われそうな程の高速な立ち直りであつた。

ベルが^{吐血音}変な音に反応して背けていた顔を戻すと同時、ユキハは普段のクールな姿に戻した。噴き出した血は全て拭い、涼し気な何時もの

クールフェイスとなつていた。

「さつき、妙な音が聞こえたような」

「気のせいだ」

「いや、でも何か飛び散るような音が聞こえた気が」「気のせいだ。……ところで、こっちを向いてもいいのか?」

「え?……あつ」

自然に話を逸らすユキハの話術(笑)によつて、ベルは先程の謎の音から意識が逸らされた。先程は羞恥によつて顔を背けたが、先程の音への疑問によつて羞恥が薄まつて顔を戻したのだろう。……天然と言ふか、なんと言ふか。

ユキハが視界に入った事により、ベルの頭の中で先程の会話が蘇り顔が再び赤くなり顔を背けそうになる……が、今度は何故か顔を背けなかつた。顔は赤いが。

数度頭を振り……恥ずかしそうにはしているものの……その後、ベルはむーっと不満そうにユキハを見つめた。やっぱりその様もとても可愛らしい。

「……何だ?」

「……さつき、僕を弄つたから少し不満なの。この意地悪」

どうやら、ユキハがベルを茶化して弄つた事が気に触つたようだ。頬を膨らませて不満気に視線を向けるベルの姿は、やっぱり可愛らしく……ユキハはまたもダメージを受けた。

今度は血は吐かなかつたが、思わず少し視線を逸らした。直視し続けると、撫で撫でをして思う存分愛でたくなるから……と言う気持ちがユキハから湧いているのは、やはりベルの魅力にやられてしまつているからだろうか。既にメロメロ状態のようだ。

「……とは言われてもな。事実と本音を言つただけなんだが」

「それならニヤケ面は要らなかつたと思うんだけど」

ユキハが言い訳をするように眉を下げて言うと、ベルはむすつとして反論する。

頬を膨らませてこちらに不満気な視線を向ける彼女に、ユキハは「うーん」と頭をガシガシ搔きながら言い訳がましく尚も続ける。

「……いや、だつてベルが可愛い反応をしてくれると」

「要らなかつたよね？」

「……あー、その」

「ね？」

「正直すまなかつた」

しかし直ぐに謝罪した。恋人のにつこりとした笑顔には勝てなかつたようである。

実際、軽い気持ちで可愛いベル見たさに弄つた事に、少なからず罪の意識は有つたので躊躇無く頭を下げた。その様子にベルはうんうんと頷いて口を開く。

「分かればいいんだよ。……けど、そんなユキハの態度に僕はちょっと不満を感じてるよ」

「えつ」

「不満だよ」

「……えつ」

その口から放たれた言葉に、ユキハは思考を停止する。

……直後にユキハの思考は活動を開始したもの、唐突なショックに結局その思考は口クに纏まらない。チートでイケメンな転生者の彼でも、恋人の「不満」には勝てないようである。

自分の態度がベルに不満を抱かせてしまつていた事実に、「なん……だと……ツ?!」と愕然として硬直する。結局思考を停止させてしまつたユキハである。

「その、可愛いとか、愛してるとか言つてくれるのは、その、うん……本当に嬉しいけど、ね？」

しかし直ぐにユキハは我を取り戻した。目の前の恥ずかしながらも嬉しそうに微笑むベルの姿に、「わー、天使だー」と無意識に硬直していた身体や意識が解ける。

その笑顔のみで相手を回復させると、やはり恐ろしく治癒師地味た性質を持つ少女である。ユキハは「ベル……恐ろしい子」と内心驚きながらもその笑顔に心をほんわかとさせる。

しかし、続くベルの言葉にユキハは大きく心を乱された。

「でも、茶化すように言うのはちよつと嫌だな……だつて、そう言うのはちゃんと感情を込めて言うものでしょ？」

そしてベルは少し顔を俯かせ、えへへと笑いながら言つた。

「…………これからは、そう言うのは感情を込めて言つて欲しい……な」

その瞬間、その場に天使が現れた。

そのベルの願いの言葉は、正面からユキハにぶつけられた。そう、ベルちゃん好き好き大好きラバーなユキハに、だ。

ユキハは一瞬、悟りを開いたかのような賢者に至つたかのような表情をしてから、にこりと優しく微笑んだ。

「…………。ああ、了解しちゃフウツ!!」

そして血を放出した。

ビチヤアツと言う音と共に口や鼻から大量の血液を吐き出した。何処の病弱スキル持ちの幕末剣士（英靈）でも此処まで強烈な吐血はしないだろう。

咄嗟に口元を両手で抑えた為にベルの方へと血は行かなかつたが、その抑えた手からはピタピタと真っ赤な血が垂れている。イケメンが口や鼻から多くの血を垂らしている姿は、なんとも不思議かつ奇妙な光景だつた。見る者が見れば「ギャグじやねえか！」と突つ込むだろう。

「ふあつ!? ユキハつ!」

対するベルは、突然目の前の人気が大量の血を放出した事に驚愕した。まあ、普段冷静かつ穏やかで優しい彼が急に血を吐いたりしたのだから、驚くのも無理も無い。吐血だけでなく鼻血も噴き出しているのだから、余計に驚きを感じただろう。

狼狽えてあたふたとするベルはユキハの傍へ駆け寄り、動搖したまま心配そうに背を摩る。

「えつ!? その、ユキハ!? 大丈夫!? 急に血を吐いちゃつて……!?」

「……『ホ、ツ……』ああ、すまない。持病が出たようだ」

咳き込みながら口元を拭い、そう偽りの理由を告げながら「大丈夫だ」と微笑む。あながち病と言う部分なのは間違つていない。

……まあ、本当の理由が「ベルの可愛さに愛が溢れた」なんて言えないだろう。と言うか死んでも言えない。主に羞恥などの問題で。

それに、そんな事を言えば両方共にどうなるのか分からぬユキハは、本当の理由を隠す。隠さなければいけない（使命感）。

「持病!? え、それって結構大変な奴なんじやあ……」

「持病とは言つても命には関わらない。だから問題無い」

「いや、でもさユキハ」

「問題無い」

「えつと、そうは言つても」

「問題無い」

持病について聞こうとするベルに対し、強引過ぎる返答のユキハ。有無を言わせぬその態度にベルは「むう……」と少し唸つた後、諦めたように溜息を吐く。

そして、優しく理解のある彼女は微笑んで訊くのを止めた。

「……分かった。知られたくないなら無理には訊かない」

「……助かる」

そんなベルの優しさに正直胸を痛ませながら、しかし感謝をしながらユキハは安堵した。「俺の持病かい? ハハッ! それは恋の病さ! ベルに心から溺れてしまう恐ろしくも愛おしい病さ!」と馬鹿正直に答える事も、色々と理由があつて出来ないユキハは彼女の優しさに心底感謝する。

「……弄つてしまつて悪かつたな。あと、愛が血となつて溢れちゃう病持病の事も、すまないな」

「いいよ、そんなに謝らなくて」

謝罪をすれば、やはり優しいベルははにかんで許してくれる。謝れば直ぐに許してくれるこの包容力は正に天使の如く、何時しか【聖光天使】チヨウゼツテンシ・ベルチヤンなんて二つ名が付きそうである。そんな事をユキハはほんわかと思つた。

しかし、ユキハも不用意に弄つてしまつた事に罪悪感は有るので、「いや……」と頭を振つてベルに真つ直ぐと視線を向けて言つた。

「お詫びに、何でも言う事を聞こう」

「ん? 今何でもつて言つたよね?」

瞬間に超反応をするベルちゃん。本人は無意識なのだろうが、それの元ネタである恐ろしく汚つたない同性愛のビデオを知るユキハからすると「(ファツ!?)」と驚いてしまう。純愛なのにホモとかもう訳わかんねえな。

お詫びにと進言したユキハの言葉に模範的回答をしたベルは少なからず野獣的な目付きをし、今にもセクシーでエロチックなシーンへと向かいそうな雰囲気を漂わせる。それに対してもユキハは「(マズイですよ!)」と少したじろぐ。

「……可能な限りで、だぞ? あとエロいのは駄目だ」

「えつ、えつち!? そんなのお願いしないよ!……そりやあ、まあ、興味はあるけど……」

「……すまん、後半の方が聞き取れなかつたんだが……」

「ん!? ううん!? 何でもないよ!? それより、お願ひする事だね……うん、折角だから何かお願ひしようかな」

そしてベルは、「何でも言う事を聞く」と言つたユキハに対してお願ひする内容を考え始める。顎に手をやり、「うーん」と悩むように思案する。

ユキハはどんなお願ひが来るか内心ドキドキハラハラしながら、「(……エロ方面は無しでお願ひします)」と祈りながらその口が開かれるのを待つ。

「……うん、決まつたよ」

それから少し経ち、ベルは一つ頷いてから顔を上げる。顔を赤く染め、はにかみながら願い事が決定した事を伝えて来るベルに、「(……どんな事を願うんだ……?)」と若干不安に思いながらその内容を聞く。

「……それで、なんてお願ひするんだ?」

「あー……うん、そうだね。その、自分で言うのもアレなんだけど

そして、顔を赤くしたベルが言う願い事の内容とは――。

「……今度は、感情を込めて……愛してるので、言つて欲しい……な」

真剣な愛の言葉、だつた。

「…………。」

途端にユキハの中に、「可愛過ぎか」「やべえよ……やべえよ……ツ！」「らめえ……愛が溢れちゃうう……」等と思考が乱立する。視覚と聴覚にダイレクトに刺激を直撃させたベルのそのお願いは、ユキハにまたもダイレクトアタックを喰らわせた。

初心なのか、愛の言葉を要求するだけで耳まで顔を赤くする彼女の乙女的な姿、そして羞恥を伴つた願いの言葉……其れ等を目と耳にし、ユキハは数瞬息を呑み、「ふう」と息を吐く。どうやら、今度は愛^血を放出せずに済んだようである。

「……分かった、じゃあ言うぞ」

そうして。

ユキハは予めそういう宣言し、穏やかに微笑みながらベルの願いに応える。

望まれたのは、愛の言葉……「愛してる」の五文字。それを、ユキハは感情を込めて口にする。

「……ベル、愛してる」

「つ…………も、もう一回……」

「……愛してる」

「もつ、もつと……！」

「大好きだ、本当に愛している」

「くくく！」

そうして愛の言葉を囁かれたベルは……くらり、と。

ゆっくりとソファーに倒れ、「ふにやあ……」と可愛らしい声を呻かせる。慌ててユキハは駆け寄り、「大丈夫かつ」と具合を確かめる。見る限りはいつも通り照れた時に顔を赤くする時と様子は変わらない

が、今回は更に真っ赤になつて蒸氣が出る程に熱くなつてゐる……頭が茹だつてゐるのでは無いかと言う程に、思わず心配する程に顔を赤く染めている。

「おい、どうしたベル？」

「ゆ、ゆきはあ……っ」

「ベル？ なあ、急に倒れてどうし——

と、心配気に顔を覗かせたユキハに。

ベルは惚けたような、酒に酔つたような、ぼんやりとした甘い声でユキハの名を呼んだかと思うと、ぎゅつ、と。

ソファーに倒れ込んだベルが身体を起こし、突然ユキハの身体に抱き着く。胴に腕を巻き付け、顔を胸元に擦り付けるように密着させる。

「……ベル？」

急に抱き着いて来たベルに困惑しながら、ユキハは彼女の名を呼ぶ。この時、外面には出していないものの「（ぬああああつ！）ベルがつ、ベルが抱き着いて来たああああつ！やつたー！？」と内面が騒がしく喜んでいるのは言うまでもない。

ベルは依然として胴体を抱き締めたままで、「ふわあ……」と惚けるような声を漏らしている。愛の言葉を吐いたら突然こうなつたのだから、抱き着かれたユキハは困惑する他無い。「（と言うか擦り付けられてる頭が恐ろしく熱いんじゃが、これって大丈夫……？ なんかもうオーバーヒートつて言葉が似合うような状態なんじゃが……じゃが？）」と一縷の不安を抱き、ユキハが首を傾げると。

それから直ぐにベルは腕をパツと離して顔を上げる。ユキハと顔を突き合わせるようにして、真正面から未だに赤く染まつた顔を晒しながら興奮した様子で名を呼ぶ。

「ゆきはつ！」

呂律が回らないのか、少しだぞだぞしい口調で名を呼んだ後……今度は首元に抱き着くベル。またもユキハの内面が騒がしくなつたのは以下略。

耳元に唇を寄せ、荒く呼吸を繰り返しながら強くユキハを抱き締める。首元には腕が回され、胸元には今度は柔らかい双丘……齢十四の乙女にしては発育が宜しい胸が押し付けられる。またの名を、おつぱいである。やはり此処でもユキハが以下略。

「ベル？ いきなり——」

「ゆきはあつ！」

ベルはユキハの呼び掛けを遮り、えへへと言う上機嫌のような興奮したような、ハイテンションな勢いのまま名を呼び……直後。
ちゅつ、と頬に口付けをした。

「——」

瞬間にユキハは声も無く硬直する。その突然の行為に、さしもの超絶チートで最強無敵のユキハさんも石化せざるを得なかつた。

驚愕したのか、それとも頬のキスの行為へ対する感情が内から暴れるのを必死で抑えているのか……それは定かでは無いが、ともかく思考が止まつたユキハに対してのベルの行動はまだ終わつていなかつた。

頬への口付けから更に続き、ユキハの耳元に寄せられた唇からは優しげ甘い声が放たれたのだ。そう、お返しとばかりにたつぷりと感情が込められた……愛の言葉を。

「ゆきはつ！ ぼくも、あいしてるつ！」

その瞬間、その場に大天使が舞い降りた（デジヤヴ）。

……さて、此處で問題である。

ベルの事を心底愛しているユキハが、頬チューからのたどたどしくもたつぷりと甘く優しい感情が込められた「あいしてるつ！」を耳元で囁かれたら、どうなるのか？

そう、「ユキハの馬鹿つ」と「……これからは、そう言うのは、感情を込めて言つて欲しい……な」の二つのそのベルの姿と言葉で血（愛）を放出した彼が、この恐ろしく威力の高い萌えと癒しと可愛さ、正義（？）や天使性（？）を伴つた言葉に耐えられる筈が無い。そう、受け

止め切れる筈が無かつた。

「（　　）嗚呼、天使は此処に居たんだ」

寧ろ女神と言つていいまであると。

そう、心の中で言い残して　　。

「

氣絶した。

それはもう、菩薩様とか賢者とかに例えられるような物凄く穏やかな表情で……まるで悟りを開いたかのような、もしくは世界の真理に気付いてしまったかのような顔をして。言葉も無く、撃沈したのだ。

「……？ ゆきはー？」

「

「ねー、ゆきはつたらー」

「

「ちよつとー、ゆきはー？」

音も無く倒れたユキハに、頭に熱が上り切つてしまつているベルはふんわりと肩を揺する。氣絶している事に気付いていないのか、気付いていて起こそうとしているのか。

……まあ、彼の「愛してる」に完全に喜び興奮して熱を発する程頭に血を上らせた彼女の行動は、まるで酒に酔つたかのような様子であるので何をしているのかの正解は分からぬのだが。

ともかく、彼女はにこにこと微笑んだまま動かなくなつた彼の肩を揺すり、甘く蕩けた声で名を呼び続ける。……そんな彼女の頭から血が下がり、興奮状態から治るのも後少し。普段は恥ずかしがり屋で、口付けをされると氣絶してしまう程の初心の持ち主である彼女が自分のやらかした事を冷静になつて振り返つた時、どうなつてしまうのか……はてさて。察する事は容易だろう。

……しかしまあ。

「ゆきはー」

今はまだ、愛しい彼の「愛してる」と言う言葉に狂喜し正氣で無くなつてゐる状態である。彼女は未だににこにこと微笑みながらユキ

ハの肩を揺する。しかし飽きたのか、今度は横に倒れてしまつていて
彼の身体に上から抱き着く。

ベルと言う初心で乙女で天使な少女が、恋人であるユキハに覆い被
さり、「えへへー」と頬を緩ませ……頭から血が下がり平常時に戻るま
で、後数秒。

「ゆきはつ、ゆきはーつ」

……さて。

そして数秒が経ち、彼女がいつもの状態となつた時。頭を撫でられ
れば頬を緩ませ、口付けをされれば顔を真っ赤にして氣絶してしま
うような彼女が正氣を取り戻した時。

「ふにゃあああああつつ!!」

と言う何とも可愛らしい叫び声が、この日オラリオの其処ら中に響
いた。

尚、この【ヘスティア・ファミリア】のホームに帰つて来た主神で
ある彼女が帰宅した時、其処には二人仲良く氣絶している眷属達の姿
を発見したと言う。

それから目が覚めてから、暫くの間二人の関係がぎくしゃくとした
物になつたのは……また、別のお話。

――――――

これからも、ずっと一緒に居て欲しいな。そう願うの
は、強欲な事じゃないよね。

―――――― 愛してゐるつて言つてくれた君なら、きっと死ぬまで僕と
共に居てくれるよね。だって、愛するつて言う事はそう言う事なんだ
から。

ううん。違う。死んでも、魂だけになつても、僕達は一

緒に居ようね。例え何に生まれ変わつても、例え何もかも忘れてしまつても。

絶対に、僕から離れたら嫌だよ？絶対、僕の世界から消えないで欲しいな。

僕は、そう願うよ。

ユキハ。

原作開始のシーンと言う題名ではあるけれど実質改変されすぎて滅茶苦茶であるお話。

全速力で走る。

『ヴヴオオオオオオオオツ!!』

「いやああああああツ!?」

「うおおおおおおツ!」

背後から迫り来る破碎音と咆吼に身を震わせながら、一生懸命に走る。隣で並走する彼女と悲鳴を腹の中から捻り上げながら、万が一にも転んでしまつたら死んでしまうような状況に心臓を（恐怖的な意味で）バクバクと高鳴らせながら必死に走る。

……うーん、胸を高鳴らせるのはラブコメの時だけで良いよ……。と、割と絶体絶命的なシーンに對面している俺は内面で首を傾げて苦笑いする。身体は思いつ切り絶叫して逃走しているが、脳裏は冷静なのか普段通り巫山戯ている。

……あっれれー？おつかしいぞー？思つてたよりもコレ危ないなあ……？流石L V. 2のモンスターって事かな？ H A H A H A !!

笑えねえよ馬鹿野郎。

内心愚痴りながら、存分に巫山戯た思考を垂れ流しながら走る。息は荒く繰り返され、汗は今もダラダラと垂れ、足は今にも縛れそうだ。身体が休みを求めて悲鳴を上げ、今すぐ足を止めて休んでしまいたい気持ちになる。

きっと、我が主神である紐神様の恩恵を受けていなかつたら今頃俺は踏み潰されてミンチになつているか、神様特典を全力全開で駆使して真つ白な灰になる事だろう。結局負けるのかよ。

「ベルツ！絶対に転んだりするなよツ！」

「分かつてるツ！けどツ、辛い……ツ！」

……だが、走らなければいけないのだ。何故なら、足を止めれば死がやつて来るのだから。足を止めれば即ミンチになつてあの世行きだろう。使命感とか義務とかそんなモンじゃねえ、コレは命の危機が

ドタドタと足音盛大に立てながら傍に近寄つてゐるから走らなきやいけないんだ……！

そう、詰まりは俺達は全力でミノタウロスから逃げる事を……強いられているんだ!!（集中線）

あ、状況的な意味でね！

脳内では巫山戯た思考を山程連ねながら、不意にチラリと背後へ視線を向ける。其処には馬面人体の化け物の姿……筋骨隆々とした巨大な肉体が目立つ、ミノタウロスが俺達を追つて來ている。

うーん、この筋肉^{マッスル}……ゴリゴリマツチヨマンの変態かな？もしくは圧政者絶対許さない叛逆者？どつちにしろムキムキの化物が迫つて來るのは生理的に受け付けないです。美少女になつて出直して来い。擬人化は好物だからね、抱き着いてきたら抱き締め返してやるよ。……あ、冗談です。

さて。

現在俺達が居るのは、ダンジョン五階層……まだ低級の冒險者が彷徨くような場所である。上級冒險者やらが潜る深い階層に比べれば全然楽チンな難易度と危険度で、中層とか行つたらスペランカーの如く死ぬであろう底辺冒險者が通う階層である。

で、そんなクソザコナメクジな我々初心者冒險者共なんだが……不運に絡め取られでもしたのか、何故か中級冒險者が相手するような格上のモンスター、中層に住まう怪物ミノタウロスが目の前に現れていた。そう、口クに格上の存在と鬪えない雑魚冒險者の前に、である。

』（思考停止）

』（顔面蒼白）

その凄ぶる弱い俺達、【ヘステイア・ファミリア】のベル・クラネルとユキハ・スノウリイは当の化物と相対して各々の反応を示した。俺は「あつ……（察し）」とこの後の展開を察して目を死なせ、ベルは硬直してから涙目になつて絶叫した。直後、ミノタウロスの咆哮が響くと共に逃走劇が開始された。

上層に中層のモンスターが現れると言う異常事態^{イレギュラー}に、真っ先に戦闘

を選ばず逃走を選択したのは良い判断だつただろう。確かに強大な敵に向かうのは勇気を持った行動は必要だが、それが誤った選択であれば蛮勇なのだ。詰まり悪手、ミステイク、バッドエンド。ほら、逃げるは恥だが役に立つて言うだろ？まあ恥なんてとうの昔に犬に食わせたけどね。アツハツハ！

……それでまあ、うん。その時に最善の選択したとしても……実際逃げ切れるとは言つていないんだけどね。現実は非情である。ゲーム風に言うなら、しかし回り込まれてしまつた！つて奴。わー悲しいー！

ずっと付いてくるとか何なの？ストーカーなの？某ホラゲの森に居るクソデカ白顔の人？それとも某料理アニメの相手の料理をコピーする人なの？もしくは某スマホゲームの安珍絶対焼き殺すウーマンなの？

……例えが多過ぎね？どんだけストーカーに溢れてるんだよ（マジレス）。

『ヴヴオオオオオオオオオオオオオツッ!!』

「ひつ……!?」

「怯むな！直ぐに追い付かれるぞ！」

背後から着実に迫り来る恐怖に、同じファミリアに属している俺のパートナー……ベルは涙を滲ませて小さく悲鳴を漏らす。直ぐ様に足を止めさせないように叱咤するが……見て明らかに分かつてしまふ程、現在彼女は恐怖心を抱いてしまつている。恐らく、直後に止むを得なく戦闘になつたら萎縮してマトモに動けないだろう。……ふうむ、SAN値が足りてないのかな？＼(・ω・)／ SAN値！＼(・ω・)／ピンチ！

……まあ、それも仕方ない事だけどね。ベルは原作主人公(TS)だが、まだ十四歳の少女なのだ。このような恐ろしい化物に追い回されて、マトモに動ける筈が無い。逃げる事が出来てゐる事すら凄いだろう。並の冒険者なら腰を抜かして失禁してそのまま殺されてしまうだろう。

つまりベルちゃんは凄い。後でたっぷり褒めてあげるよ！だから

転んだりとかしないでね！

と、俺がそう心の中でお願いした瞬間。

「…………あつ」

ベルはコケた。それも見事にズルリと脚を縛れさせ、体勢を大きく崩して。成程！フラグと言う奴だね！分かるとも！

……巫山戯やがってえ!?やつぱり俺を転生させた神様がこうした運命にしたんだな!? そうかそうか！つまり君はそういう奴なんだな!? ファック！

舌打ちと共に、脚を縛れさせて地に転がりそうになるベルの身体を抱き上げる。そのまま横抱きにし、逃走を継続する。やつたねベルちゃん！お姫様抱っこだよ！役得ウ！でも命の危機じやない状況でしたかつたな！

チラリとベルの顔を見れば、羞恥ではなく恐怖に感情が塗り潰されている。普段ならば「お、お姫様抱っこ……つ!」と可愛らしく顔を真っ赤にして悶えてくれるのだが、どうにもそれ所では無いらしい。……うーん、やっぱりトラウマモノなのだろうか。恐らくより新鮮で深い命の危機に晒されて、心に恐怖が刻み込まれたんだろうけど……まあ無理も無いよな。だつてムキムキのミノタウロスが叫びながら追つてくるんだもん。下手すりや失禁モノだ。俺もチビつちやうかもしれないしね。今はチビつてないけど！ヤハハ！

『ヴヴオオオオオオオオツッ!!』

「あ…………う…………つ…………!?’

再度咆吼が響く。

臓腑まで響くその低く恐ろしい叫びは、中級冒険者であれど耐性の無い者は直ぐに意思を折られ硬直してしまうだろう。特に実力を伴わない初心者の冒険者なんて、戦う事も逃げる事も放棄して思考停止して呆然としてしまうだろう。

それぐらいの威圧を伴う咆哮に、胸の中のベルは身を震わせる。小さい悲鳴と共に、ガタガタと恐怖に身体をビクビクと震わせる。こう、ホラー映画の恐怖シーンで震える女の子を更に酷くしたみたいに。何それ可哀想。

……んー、コレは重症だな。心に深いトラウマが出来ちゃつてる。きつと頭で逃げなきやと思つても、心は完全に屈してんんだろうね。格上の敵わない化物の理不尽な姿に、もう勝てないと思い込んでやつてるんだろうなあ……。まあ、原作ベル君もミノタウロスにはトラウマが出来たし、心の強度としては同等なのかな? TSしても強さとかはそんな変わらないっぽいし。ソースはベートさん。あの人TSしてもツンデレ属性は依然として存在するからね。サンキューカツミ。『ヴヴオオオオツ! ヴヴオオオオオオツ!!』

うるせえっての。ギヤーギヤー喧しいな、発情期ですかこのヤロー?

思ひながら、俺はベルを抱えながら全力で走る。既に息も絶え絶え、だが荒い呼吸で酸素を必死に取り入れてとにかく俺は走る。二四時間マラソンよりも辛く走つて行く。やだ、俺つてば今なら足の速さでギネス狙える程に速いかも! この世界にギネスとか無いけど!

現状がもしラノベとかのシーンとして視聴者が見ているのなら、きっと誰もが「異能使えよ」とマジレスするのだろう。「さつさと倒せよ」「何ドラマ作つてるんですかねえ……」「ベルちゃん可愛すぎワロタ」とかつてコメントが流れ、きっと作者の心に大きなダメージを与えるのだろう。

止めてあげて! 作者のライフはもうゼロよ! ガラスマンタルなのにダイレクトアタックするのは止めてあげて!

『ヴヴ……ツ! ヴヴオオオオオツ!』

「ツ、はあ……ツ! はあ……ツ!」

うーん、まあ確かに異能を使えと言う言葉は正論だ。何せ神様から貰つたチート、こう言う理不尽なシーンを開いてチーレム展開に持つて行く為のように存在するオリ主のご都合主義能力なのだから、このミノタウロスには頑張れば対抗出来る。

そう、確かに俺は異能を使えば正直勝てます(オリ主特有のウザ台詞)。

うん、調子乗つてると取られるかもしねないけど事実なんだ。慢心王の如く傲つてはいけないけど、事実として頑張れば勝てるんだよね。

俺の三つの異能……いや、戦闘向きとして使えるのは二つか。その二つをフルで使えば、格上の相手だろうと実は対等に戦える。事実として、この場は頑張れば何とか乗り切れるのだ。

けど。

「……ツ……！」

『ヴヴオオオオオオオツ！』

だけど俺は、こんな命の危機に晒されても見たいんだ。身勝手で横暴な望みかもしれないけど、突然降つて湧いたこの機会を逃したくはない。俺がその展開を直ぐに潰してしまいたくは無い。

俺も予期していなかつた現在のこの展開……もしかしたらと期待してしまう展開、俺がかつて小説とアニメでしか見ていなかつた展開を。

——原作開始の瞬間、このダンまちの世界が始まる時。
そう。今俺が現在進行形で体験しているこの状況、コレは『ダンまち』の原作が開始されるシーンなのだ。

原作では、ベル・クラネルは調子に乗つて五階層に進んだ結果、ミノタウロスと遭遇エングントしてしまう。必死にミノタウロスから逃げたものの、逃げた先は行き止まり。そうして絶体絶命の瞬間にロキ・ファミリア所属の金髪美少女、アイズ・ヴァレンシュタインに出会い。

そして、ベル・クラネルはその少女に一目惚れして――。

と言う展開なんだ。うん、ラノベの原作通りならね？

ダンジョン五階層への進出、ミノタウロスとの遭遇、それから命からがらの逃走……此処まではまだ原作通りだ。……そう、此処までは。

今更ながらに思つたのが、もしかしたらこれから運命が変化する可能性があるなあ、と言う事。……その原因として、俺と言う転生者や転生させた神様の悪戯改変が存在するからなのだ。現に主人公が性転換しちゃつてるし、原作通りにならない可能性があると思い至つたのだ。因みに逃走中に気付いた。

で。

多分だが、原作開始のパターンがある程度変わること可能性が有るだろ

うと言う事。普通に原作通りに進んでアイズたんが助けに来るかも
しれないけど……その場合、ベルとアイズとの絡みがどうなるのかが
予想出来ない時点で原作が改変されてる。

何故かと言うと、原作ではその時にベル君はアイズに惚れるが、こ
の世界でのベルは女だ。詰まりは、アイズがT Sでもしていない限り
は……と言う本当に予想不可能な事態。どうなるんだろうなホント。

……もしかしたら、百合？ レズ？ 同性愛？ ……キマシタワーが立つ
ちやうのかな？（目逸らし）

いやーん、そんなゆるゆりで桜がトリックしちゃうようなレズレズ
しい展開は嫌よー……と言うかベルちゃんは俺の嫁ですのでそんな
寝盗られみたいのは本当に嫌だよー……割と本当に（レイプ目）。
寝取りするのは何処かの円卓の騎士の一人だけでいいよ。俺には
寝取られて興奮する嗜好は無いなら本当に止めて欲しいな……N T
Rとか俺一番嫌い。アレは滅するべきじゃないかな。

あー、まあ。

詰まりは、そう言つた改変されるかもしれないだろうけど、俺が愛
した作品の原作開始の瞬間を俺は見たいんだ。ともかく原作開始の
瞬間を見たい。物凄く見たい。

まあ、コイツとパーティー組んでるから原作開始は一緒に居れば否
が応でもやつてくるんだけど……と言うか現に突然来たんだけどね。
転生前はダンまちの時系列は把握出来てなかつたんだよねえ……
ファミリア入つてから結構直ぐだつたのね、原作開始つて。ミノタウ
ロスに会つた瞬間、驚き過ぎて一瞬思考停止しちゃつたよ。
……さて、長い長い閑話休題。

「……ハア、ツ……ハアッ……！」

巫山戯た思考とは別に身体は真剣に動作をこなし、今では目の前の
壁に止まり息荒く呼吸を繰り返すのみとなつていて。ふむ、俺の頭が
巫山戯ている間にどうやら原作開始の場所に来たようだ。原作にて、
ベル君が絶望し壁に背を向けた場所……詰まり、絶体絶命の場所。下
手すれば死んでしまう場面に。

行き止まりとなつた目前の道、それを認知した直後に俺は振り返つ

て追跡者の姿を捉える。後方に居た化物は、今は正面の目前に。

……正真正銘の絶体絶命。追い詰められ、今や逃走の選択肢は消えた。

『ヴヴオオオオオオオツ!!』

咆哮。

「漸く追い詰めたぞ」と言う叫びながら、コイツは息荒く呼吸を繰り返しながらギラギラとした目付きで俺達の事を見詰める。……いや、睨むと言つた方が正しいか。ふええ、そんなに鋭い目で睨まれると怖いよう……。

既に退路は絶たれた現状、俺は一息吐いてベルに声を掛ける。今も尚、俺の胸の中で震え嗚咽を漏らす彼女に、恐怖で身を震わせるベルの頭をポンと置きながら。

「……ベル。すまんが行き止まりだ。俺が囮になるからお前は逃げる

ろ」

「……え？」

まあ仕方無いよね！と思いつながら、俺はベルを強引に下ろして立たせる。少し足元がふらついているが、まあ逃げられるだろう。兎は逃げ足は早いって言うし、逃走コマンドぐらいなら平気だよな？

俺は溜息を吐きながら、腰元に携えていた我が武器を手に取る。……初心者冒険者の為にあまり強勒でも強力でも無いが、一応は凶器である刃物を。格上の相手、ミノタウロスと対峙するにはあまりにも頼りない武器を。

鞘に収まっていた安物の刀を抜き、俺は正中に構える。いやあ、正直コイツに当てたら一発で折れるけどその時はその時だよね！刀は切り裂く物だけど限度はあるもん！と言うかこんな武器で戦えとか無理ゲーだよねー！

「そ、れって……僕が、ユキハを見捨てろって事？」

「いや、違う。あくまで俺は時間稼ぎをして、その間にお前が他の冒険者を呼んで欲しいんだ」

ハツハツハ。そういや、原作開始のパターンが異なる場合があるつて事は、そもそもこの場所に助けが来ないパターンも有るんだよね。

今更にそれが思い至り、内心焦りながら俺は行動を起こしている。

うん、アイズ・ヴァレンシュタイン 助けが来ない＝ミノタウロスが倒せないって事だもんね。この世界も恐らくは並行世界の一つ、つまりはややこしい程に連なり重なるＩＦの世界の内の一つで事だもんな。わー、アイズさん来ないと辛いっすわー。お願ひだからそのパターンじやなくて普通に助けに来るパターンであつて欲しいなー！だから直ぐ来て！

お願ひ！

「で、でも……！それだと、ユキハが……っ！」

「大丈夫だ、問題無い。俺は死なないさ、絶対にな」

「……ユキハ……ツ」

はい、自分でもアレだけど死亡フラグ入りましたー。何言つてんの俺。

内心苦笑いしながら、俺は段々と思考を早くして行く。そう、戦闘シーンになると凄くなると言うアレだな。自分でも驚く程に真面目な思考になる例のアレ。さつきまでは原作開始のシーンになるまで我慢してたけど、流石に死んでしまうので封印を解きます。卍解ツ（嘘）！

……まあ、俺としては正直あまりしたくないのだが、戦闘時はやはり巫山戯た思考を削いで真面目な思考にしなければならない。……全く、面倒な事だ。自分ながらに面倒だ。

原作開始でアイズが助けに来ないのはダンまちじゃないだろうに。何故まだ来ないんだ。労せずにこの場を切り抜けるならその方が良いと言うのに。……全く。

「行け、ベル」

「ツ……！分かつた……ツ！」

そして、一息。

「ふう

」

『ヴヴオオオオオオオオオオオツ！』

ベルが駆け出すと同時にミノタウロスが吼える。俺に向かつてドスドスと踏み込んで来て、地鳴らしと共に距離を詰めて来る。ベルと話している間に攻めて来なかつたのは空氣を読んだからだろうか。

……それは無いか。何を未だに巫山戯た思考を残らせているんだ俺は。

再度息を吐き、完全に無駄に思考を無くす。

「…………ツ」

さて、それでは戦闘開始だ。

俺は目を見開いて、神様特典である例の力……『属性操る能力』の用意をし、属性の指定・発動へと思考を回した所で。

ドンツ、と。

まるで地を踏み砕き飛び出すような、音が鳴った。それはミノタウロスの後方から聞こえ、それに続いて風切り音のような物も聞こえる。

……いや、それだけじゃない。声も聞こえる。
「はああああ…………ツ！」

「オラアアアアツ！」

直後、二人分の叫びと何かを貫くドシャリと言う音が響く。片や聞き覚えの有る女性の声、もう片方は聞き慣れない女性の声……？
その声の正体は直ぐには分からなかつたが、生々しい音については視界に入つたその光景によつて正体が分かつた。

目の前で対峙していたミノタウロスの身体から、二人の美女が突き抜けて來たのだ。

片方は飛び蹴りの体勢で、もう片方は剣で突進して來た体勢で。両方共に勢い良くその筋骨隆々とした身体を突き抜け、俺の目の前に着地した。

……ん？

「…………ん？」

真面目な思考が止まり、俺は咳きを漏らす。……えつ、あの、アレ？ミノタウロスさん大丈夫？いや大丈夫じやないよなコレ明らかに。と言うか魔石貫かれたと言うか何と言うかあの攻撃つてば恐ろし過ぎないか？

身体をエグく貫かれ、ミノタウロスは「ヴォツ！」と驚愕の表情を浮かべながら灰と化した。心做しか「ええ……（困惑）」と理解出来な

いような困惑の表情だつた氣がするが、そのままサラサラと身体が崩れて行き、その場から怪物の姿が消え失せる。……うーん、急展開に俺つてば理解が追い付かなあい。

俺も散つてしまつたミノタウロスと同様に「ええ……（困惑）」と首を傾げると、目の前に着地した二人が「ふう」と同時に息を吐いた。そのミノタウロスが消え去つた場所に佇むのは、二人の美しい女性の姿。剣に付いた血を振り払う金髪美少女と、金属靴の調子を確かめるようにコツコツと地に爪先を突く銀髪美女。

「……つたく、嗅ぎ覚えの有る匂いだと思つたらやつぱりテメエか」その片割れ、頬に稻妻の刺青が走つている銀狼が溜息混じりにそう呟く。俺に視線を寄越し、「大丈夫か」と声を掛けて来る。

その声とその姿、何より素つ気ない体を装いながらも心配気に視線を寄越すツンデレ具合……それに俺は「何だと……つ!?」と目を見開く。

俺は、この人を知つてゐるツ！暫く前に会つて、それからちよくちよく世間話をする仲であるこの人の事を知つてゐるツ！（ジョジョ並感）

「ベートさん!?」

そう、ツンデレ獣耳美女のベート・ローガさんだ！ヤツター！ツンデレベートサンヤツター！

と、ぶつちぎり俺の好感度が高いベートさんの登場に内心狂喜乱舞しながら、ふと思う。……と言うかミノタウロスの身体を飛び蹴りで貫いて来たけどアンタどんだけ強いんだよ。体術スキルでも有るんですかね？流石L·V·5、【凶狼】ヴァナルガンドの名は伊達じやあねえ……。

俺は驚きの声を上げながら、慌ててベートさんの元へ駆け寄る。「どうして此処に？」と尋ねながら近付いて行くと、ベートさんは「フン」と鼻を鳴らしながら答えた。

「オレが此処に居るのは、前に言つたロキ・ファミリアの遠征の帰りだからだ。その途中、面倒な事にミノタウロスの群れに遭遇して戦闘になつたんだよ」

「……成る程。つまりソイツらが逃げて來た結果、此処までは来

たつて事ですね？」

「ああ、そう言う事だ」

丁寧にも状況を説明してくれるベートさん。うん、端的な説明のお陰もあるけど原作知識があるからスマーズに理解出来る。わあー、転生者ってこう言う所が楽だよね。

……ところで、やつぱりこの人は良いツンデレやね（唐突）。素つ気無い態度しながらも、気遣う雰囲気を醸し出すこの人は絶対良い人。結婚して。

説明してくれたベートさんに礼を言いながら、俺はチラリと視線をもう一人のミノタウロスを貫いた人へ向ける。……相手は知らないだろうが、俺は一方的に知っている。金髪金目の無表情、天然で女神にも匹敵する美貌を持つ美少女へと、視線を向ける。

「…………。」

知識の中にある彼女の名前は、アイズ・ヴァレンシュタイン。L v. 5の、【剣姫】の二つ名を持つ原作ヒロイン。原作主人公ベル・クラネルがこの原作開始のシーンで惚れ、スキルを発現させる程に想いを抱く相手。……であるのは、知っている。ついでにステイタスについても多少は知っている。

……ふむ。感想としては超絶美少女……ううむ、コレはベル君が一眼惚れるのも分かるなあ……。

一つ頷き、俺はその美貌に感嘆の息を漏らす。端正に整った、完璧も言つて差支えの無い美麗な容姿。顔立ちだけでなく、体付きも非常に魅力的で……つと、イカシイイカシ。何でエロい目つきしてるんだ俺は。

俺にはベルと言う恋人が居るだろに……何を目移りしているんだ。確かにこの世界は一夫多妻が認められているが、流石にこのような浮気的な思考と視線は宜しくないだろう。煩惱退散、悪霊退散……！

頭を振つて思考を一度整理し、俺は改めて命の危機を救つてくれた事に感謝を気持ちを示す。頭を下げ、感謝の言葉を言つて礼をする。「ともかく、ありがとうございます。ベートさん」

「……気にすんな。元はと言えば、こつちの不手際だ」

「その、そちらの方も……ありがとうございます」

「……いい。寧ろ、迷惑を掛けてごめんね」

おお、此処で「じゃあ、たっぷり報酬を支払って貰おうか……！」とかって言わない辺りこの二人は凄い良い人だな。この世界の常識になると、荒くれ者が多いこの世界だと「男の礼＝欲望の具現」とかつて考える人がクソ多いからな……いや、割とマジで。何言つてんのつて思うかもしねいけど、この世界だとそう言う阿呆な奴等が満ち溢れてるんだよねえ……。

こんな風に良い人基準が前世と比べて狂つて来てる辺り、俺はこの世界に毒されると言うか慣れて来たんだろうなあ……ううん複雑。前世観点で今の状況を例えると、「助けた美少女がお礼を言つてきた」と言う状況であり、お馬鹿で考え足らずで短絡的な思考をする冒険者（女）は「お礼なら何を言つてもいいよなア！ほら、脱げよあくしろよ！」みたいな結論に至るのだ。これだから下賤な冒険者風情は

……（潔癖女騎士風）。

ほら、こう、よくラノベとかであるじゃない

『お礼に何かさせて下さい！』（美少女）

『お？ そうだな……なら、その身体でお礼して貰おうか！』（冒険者A）

『オツスお願ひしまーす』（冒険者B）

『そ、そんな……それ以外で、どうか身体以外のお礼を……！』（美少女）

『やかましい！つべこべ言わずその股開きやがれ！』（冒険者A）

『そうだよ（便乗）』（冒険者B）

『そうだよ（大便乗）』（冒険者C）

—— みたいなイザコザ。因みにその後人公に助けられてテンプレ展開になるまでがワンパターン。

現在の状況を前世的に例えるとそうなるのだが、そんな野蛮で欲望に忠実な冒険者では無いこの人達は良い人だなあと言うお話。流石、原作重要キャラ……こんな狂つた世界でも良い人であるとか最高かよ。ダンジョン探索初日に絡んで来た冒険者達とは格が違うね！す

「……ごーい！ベートさんとアイズさんすごーい！あつはつはー！」

と、巫山戯た思考に一段落付け……一息吐く。

……それで、あの、ところで、あの。

さつきから気付いてはいたが、無視していた事に意識を向ける。考
えたくないけど、流石に気になつてきただので向き合う事にした。正
直、何か嫌な予感がするから向き合いたくないのだけど……。

「……ええつと、そちらの方とは初対面……ですよね」

「……そう。初めまして」

「……初めまして。俺は、ユキハ・スノウリイと申します」

「……アイズ・ヴァレンシュタイン。宜しく」

「……ヴァレンシュタインさん、ですね。その、宜しくお願ひし
ます」

「……えーっと、あのさ……？」

そして、俺はその人と対面した時から抱いていた事と向き合う。理
由は不明だが、異様に気になるその彼女の行動に。

ずっと俺へと向けられている、その視線の事について。

……何で、アイズさんは俺の事をそんなにガン見してるの？

「アイズ」

「……はい？」

「……アイズって、呼んで？」

「えつ」

「呼んで？」

「あつ、はい、その、アイズさん」

「……それで良い」

更には初対面の相手に名前呼びを強請る。ええ、苗字呼びは不
服ですか……？いや、別に良いんですけどね……？と言うか美少女の
名前をそのまま呼べるのは嬉しいから良いんですけどね？

依然として無表情のまま、俺から視線を一瞬たりとも外さない金髪
剣士の様子に俺は困惑する。何のさ、もしかして男が珍しいの……？
見慣れてないとか、初めて見たとかそんなんじやないよな。貴女の
ファミリアに男が居なくて物珍しいって訳じや無いんだろうし

…………え？まさか皆TSしてんの？冗談だろ？嘘でしょ？まさか？

一瞬脳裏を過ぎるクレイジー案件に関して白目を剥きかけるが、まあ流石に無いだろうと気を持ち直す。……流石に、あの酒飲みドワーフや小人族^{バルフ}の団長や超絶平凡的ヒューマンとかが、TSとか……無い、よな？……無い……よな……？

……これに関しては、まあ、後で考へる事にしよう。と言うか考へても何も変わらないから、考えなくていいよな。そうだよな、俺。今後のTS案件の事を杞憂しても意味は無いもんな。

……そうだよ、そうだよな……。

だつて（転生者だし）どうせ関わる事になるんだろうし、（ベルと一緒に緒だから絶対会うだろうし）その時に色々と考えれば良いもんね。取り敢えず美少女と出会える事を期待しておこう。うん。……うん（白目）。

「……ねえ」

「……何ですか？アイズさん」

「ユキハつて、恋人は居る？」

「えつ」

ちょっと待つて。お願いちよつと待つて。

戸惑い、困惑。クールフェイスに似合わぬ腑抜けた声を漏らすと同時に、俺は思わず助けを求めるようにベートさんに視線を向ける。駄目だ、もう俺はこの人の対応をしつかり出来る気がしねえ……！原作と違い過ぎるこの人の話の振り方に俺は追い付けねえ……！

しかし、当の頼りになる狼人^{ウエアブルフ}さんも目を丸くしていた。と言うか首を傾げて固まっていた。……えつ。

……えつ？助け舟も駄目とかコレどうなつてるのん……神は死んだ。おう、じーざす。おーまいごつと。

「どうなの？」

「…………まあ、居ない…………ですね」

「…………へえ」

「…………。」

「……貞操は？」

「……純潔、ですね」

「……ふうん」

「……。」

待つて。本当に待つて。

あれ、アイズさんつてこんなキヤラだつた？あと距離をジリジリ詰めてくるのは何で？ちよつ、近い近い。

……さて、一度落ち着こう。ビーケール。ステイクール。

助け舟が現れない事を察して、俺はアイズさんの質問に對して一応答える事にした。会話はキヤツチボールだからね、投げられたら投げ返さないとね。うんうん。

……先程の恋人の有無の質問に關しては、まあ、珍しい男への質問の興味つて事で理解出来る。俺も相手が美少女だつたら、「彼氏居る？」とか「LINEやつてる？」とかって聞きに行くからな。理解出来る。

因みに、ベルが恋人であるのに何故答えが「居ない」となつているかと言うと、この荒くれ者獨身に満ち溢れるオラリオで、そもそも男が極端に少ない世界なのに恋人（異性）が居ると言う嫉妬モノの案件を口外すると面倒事しかやつて来ないので、こう言つた質問に對しては「いやあ、恋人居ないんですね（苦笑）」と返している。

非リア関連の面倒事なんて嫌なので、予めこう言つた問題には対策しているのだ！知つているのは、せいぜいウチの主神である紐神様ぐらいだろう！我がファミリアの誰かがフラフラ言い触らしたりしなければ、俺とベルか恋人関係であるとは誰にも気付かれまい！フハハハハ！

……まあ、それはさて置き……だ。

何で貞操に關して質問する必要があるんですかね？アンタ原作に比べてキャラ崩壊しすぎてない？

「因みに私も純潔」

「……は、はあ」

「上方も、下方も未体験」

「……俺も、ですね」

「……なんだ」

「……そうなんです」

何で貞操に関して会話をしてるんだ俺達は……（困惑）。

おかしいな、アイズさんってこんなキヤラだったつけ……原作だと
そう言う方面には疎くなかった？いや、前世のラノベの事だから正直
よく覚えてないけどさ。

この世界だから少しおかしいの？TSしてないけど変態度は増し
たの？貞操観念とかおかしくなったから？いやいや、けどこの人つて
そう言うモノとは関わりが無いような気が……。

……そして、俺の脳内では延々とアイズさんの奇行と言うか、発
言に関しての事について思考が回りに回り。

「……好きなタイプは？」

「……優しい人、ですかね。例えるなら天使とか精霊みたいな」

「……へえ」

……いつしか。

繰り返される変態的な振られた話題の会話の中で思考の動きが止
まり、「もうこれ訳わからんねえな」と理解を諦め対話に徹する俺が居
た。

「……好きな胸のサイズは？」

「……相手が好きな人であれば、大きくても小さくても良いですね。

強いて言うなら内面が良ければ

「……ふうん」

若干目が死んでいた俺と、初対面にしては仲良さげかつ目をキラリ
とさせていたアイズさんとの会話は、硬直していたベートさんが
「……はつ？いや、オイ、なあ……アイズ！」と復帰するまで続いた

回想とか諸々交えて結局面白味無いんじやないかつてお話。

少女は走る。

「ツ……！ ハアツ、ハアツ……ハアツ……ツ！」

必死の形相で素早く迷宮内を駆け抜け、彼女は息を荒げて涙を滲ませながら命懸けで探し続ける。白髪赤目の少女は、きっと今もまだあの怪物と戦っているであろう恋人ユキハを思い、誰かに助けを求めて……あの怪物を倒しうる存在を求めて。

疾走する。

右手には既に刃がボロボロになつたナイフ、身体には傷だらけの戦闘装束バトルクロス。それは彼女が幾度も戦闘を経た事を事実として現していいて、そんな何時倒れても可笑しくない程の満身創痍となつた状態であろうとも、彼女を何かが突き動かしている様は必死の二文字に尽きる。

「ユキ、ハ……ツ！」

少女は走る。愛しき存在の名を叫び、愛しき存在の為に走り、愛しき存在の為に戦い抜く。

既に使い物にもならないナイフを何度も振るう。それが通用しなければ拳を。駄目ならば脚を。それも効かなければ全力での自身の身体による猛攻を。

「ユキハツ……ユキハア……ツ……！」

己の無力さを呪いながら、自分には不可能であつた存在を打ち倒し、助けてくれる存在を求めて。己の命を賭して、戦いを勝ち抜く。

彼の名を失いたくない想いと共に叫びながら、恋人が自身を逃がしてくれた事実が不意に脳裏を過ぎり唇を噛む。力強く噛んだ唇からはジワリと血が流れ、彼女の口の中に吐き気のする血の味が広がる。だが、それを気にする暇は彼女に無い。味覚如きに気を配つている様では、彼を救えない。そんな事に意識を向けている様ならば、僅かも疾走が加速出来る様に集中しろ。

そうして彼女は魂を尽かせるかと思う勢いで、迷宮内を走り抜け
る。

「ユキハ……ツツ!!」

その名を口にする度、彼女はまた自分の弱さに苛立ちを覚えて疾走の速度を更に速める。

汗は絶えず、涙も尽きず、足も止まらず、想いは溢れる。もしかしたらもう、彼は死んでいるのかもしれない……そんな思いが、何時倒れても仕方ない程に満身創痍の彼女を、未だに全力の状態で突き動かしていた。そんな「もしも」の考えが捨て切れない彼女は、恐怖と後悔と憤怒に心を彩られながら走る。

そして。

「——お願いです……！助けてツ、助けて下さいツ！」

「分かつた、助けよう」

漸く彼女は、希望を見つけた。

♀ ↓ ♀ ⇒ ♀

——視界の中のモンスターが、片つ端から粉碎されていく。

『グギャツ!!』

『——!?

比喩抜きで、とある投擲物によつてその身を碎け散らせる迷宮の魔物。その身を文字通り爆ぜさせる直前には、ヒュンツと言う風切り音とドゴオツ！ズドオン！と言う着弾音が鳴り響いているのが俺の耳にはよく届いた。痛いくらいに。と言うか真横から放たれてる。

目の前の魔物は現れた瞬間に文字通り爆散して死んでいく。道行く先から「いつけなーい☆冒険者だ♪抹殺抹殺♪」とやつてくるモンスター達がすぐさま瞬殺される光景は、「おつかしいなこの世界つて無双要素こんなにあつたつけ」と疑つてしまふ。おつかしいなあ。もつと熱い戦いとかに満ち溢れてた筈だよね、この世界つて。

しかし俺の目に映るのは見るも無惨で無慈悲な無双シーン。どこぞのなろう系主人公の如く石を投げて瞬殺している事が相まって、やはり俺TUREEE！的な意識が強くなつてしまふ。いや、投げてる

のは原作キヤラの美女・美少女二人組なんだけども。スマホ太郎やデスマ次郎と言つた主人公とは似もしない方々なんだけれどね？

……ところで全然関係無いけど、なろう系主人公（アニメ）がこんな感じに呼び名が付けられるなら、「孫三郎（賢者の孫）」「奈落四郎（ありふれた職業で世界最強）」「盾五郎（盾の勇者）」とかつてなるのかな。『ギギイ……^{殺つ}ゲ、ギャ……グギヤギヤ？（まず此処さあ……敵、居るんだけど……焼いてかない？）』

『グウ～～ギヤツギヤ～～（あ～～いいつすね～～）』

「えい」ズドオン！

「オラ」ドゴオン！

『ギヤツ？（ファツ!？）』

『グギュ!?……ウウ……（ヌツ!？……ウーン）』

現在はダンジョン内であり尚且つモンスターが襲撃していると言うのに、チラリと下らない事を考える余裕が有るのは隣でビュンビュンと石を拾つては投げている二人のお陰である。

敵が現れる度にスロー＆デストロイを繰り返しているのは、ロキ・ファミリア所属の第一級冒険者、金髪美少女アイズ・ヴァレンシュタインさんと銀髪美女ベート・ローガさんである。

一頻りモンスターの出現^{ポップ}が収まつたのか、二人は一息吐いてから俺へと視線を向けた。俺は石のみで魔物の群れを瞬殺し終えた二人に、「お疲れ様です」と礼を言う。一人は俺の言葉に手をヒラリと振り返しながら、微妙に笑みを浮かべる。若干ドヤ顔成分の入つた笑みである。まるで褒めてと言わんばかりの笑み、可愛いです。良い、笑顔です。

……俺の笑顔が若干引き攣つていないといいんだけど。投石による虐殺劇を見せられたからちょっと苦笑いになつてるかもしだ。いやまあきっと大丈夫、いつもの笑みだよね。多分、きっと、メイビー。

「流石LV. 5、やりますね」

「まあ、こんくらい朝飯前だよな。なあアイズ」

「朝ご飯は食べたけど……うん。朝飯前」

「はは、心強いです」

「やりますねえ！」と称賛の言葉を送ると、やはり可愛らしいドヤ顔交じりの笑みで応えてくれる。ベートさんは「当然です」みたいな態度を取つてはいるが、少し耳と尻尾を跳ねさせている。如何に常識人と言えど、この世界の女である以上は男に褒められると嬉しいのか。

……むむむ。これ「やつたねベートちゃん！経験値が増えるよ！」って頭撫でたらどうなんだろうね。それ以降「やつたのですー！」「ジ主人ー、褒めてー」と懐くのだろうか……つてそれダンまちのベートさんちやう。デスマのポチ＆タマや。

なんて一瞬下らない事を考えながら、俺は脳裏に本日何度目か忘れた『属性操る能力』を発動させる。「無属性・探知」つと。……んんん、しつかしステイタスには【属性支配^{アブソリュート・ルール}】なんて厨二的なスキル名になつてたが、あんまり慣れねえなあ……発動法が変わつてなかつたから良いものの。どこぞの紅魔族が聞いたら興奮しそうなスキル名になりやがつたと何度も思つた事か。

ちゃんと脳内でも【属性支配^{アブソリュート・ルール}】つて呼ぶようになつたと……癖で『属性操る能力』つて呼称しちゃうんだよなあ。変わつたからには、そつちの方で呼んでやらんとな。もし擬人化したら「間違えないでください。つーん」つて怒られちやうかもしれないし（変態脳）。

ともかく、まずはベルが何処に居るかを探さねば……。

「にしても、無駄に多くなかつたか？」

「……多分、ミノタウルスが此処まで來たから。弱いモンスターが逃げて來たんだと思う」

「ああ。……そりやあ少ねエよな」

「その分、逃げて來た集団と遭遇する可能性が——」

と、二人がモンスターの数について話し始めたのを見て、俺はバレないようになつて溜息を吐く。

その軽い吐息には今日起きた出来事からの疲労によるものも含まれていたが、他にも身体的な理由では無く精神的な理由も含まれていた。そう、精神的な理由……「どうしてこうなつたんだつけ」と言う現在の状況に対する感情や思考が溜息を吐き出させたのだ。……い

や、本当に……どうしてこうなった？

つい数分前に起きた出来事……『悲惨！ミノタウロス惨殺事件！』から今も、俺の仮の護衛と言う形で行動を共にしているロキ・ファミリア二人に視線を向け、再度溜息が漏れ出そうになるがそれを抑える。いや、まあ美女・美少女と一緒に行動できるのはありがたいよ？うん、ありがたいけどさあ？

某笑顔大好き低音不審者的プロデューサーさんみたく、首元に手を遣る。

「ところでユキハ。男性のみに生えていると言うモノについて聞きたい事が」

「待ちやがれアイズウ！これ以上コイツに迷惑を掛けさせんじゃねエゾ！」

「……止めないでベートさん」

「いや止める！テメエが憲兵に爆発四散されるような案件は、出来る限り止めるつてフインの奴と決めてるからなア！」

「……くっ。この場に居ないのに邪魔をするなんて……」

現実逃避。

「……」

脳内で現実逃避気味に「おーねがいー♪シーンデレラーラ♪」とアイマスセラピーをしてしまう程に、未だ数分前の場所から全く動けていない事に困った困ったと頭を悩ませる。何で行動開始してから数分経つてるので、未だに行動開始した場所が見えてるんですかね……。

俺の相棒を探しに行くのを護衛するどころか、その行動を遮つている正直少し迷惑な方にチラリと視線を向け……今度は耐え切れず、クソデカい溜息を吐いてしまう。L.V. 5の二人は護衛役を買って出てから既に何度も繰り返した口論と肉体言語のやり取りを交し合つていて、今は俺から意識が外れているようだつた。溜息が聞かれなくて良かつたと思うべきか、くんずほぐれつしてないで図書館に行こうよ！と思うべきか……。

……はあ。護衛が行進を遮るとか何んですかね……と、何だか久しぶりに感じる逆転世界在住の女性によるストレスで目を腐らせる。

千葉とマツ缶と天使（妹と男の娘）が大好きなどあるぼつちまでとは行かないながら、俺は不意にこうなるに至る以前の過程はなんだつかと思考を巡らせる。

まるでやれやれ系主人公のようだ、ウツソーもしかして俺閉鎖空間に囚われちゃうのー？なんてふざけた思考を交え、俺はほんの数分前……ミノタウロスが貫かれた直後から現在の状況に至るまでの経緯を、俺は非日常に巻き込まれるに至る過程を回想するやれやれ系主人公の如く、思い返す。

「ベートさん、退いて」

「退かねエ」

「……ベートさんは、男の人のアレが実際はどんな形なのか……気になりますか？」

「…………そうやつてオレに語り掛けようとしても無駄だぞ

アイズウ！」

「結構揺れてるじやないですか」

……現実逃避氣味に、俺は回想を始めた。

* * *

では回想を始めよう！

現在、ダンジョン五階層。

異常事態

イレギュラー

により上層域にも関わらずミノタウロスと遭遇した初級

冒險者の二人組……超絶最萌天使ベルとテンプレクソ転生者である

俺は、そのミノタウロスのせいで現在別れてしまったのだ。ミノタウロス許すまじイ。

その分断してしまった理由、と言うのは『ベルは川へ洗濯に、ユキハは山へ芝刈りに……』と言つたほのぼのとした理由からではない。……いやまあ、そんなほのぼのとした村での生活をベルと過ごすとなつたら毎日が極楽最高超天国だろうと思つた事はあるが、その妄想が現在の状況に繋がる理由では無い。あくまでそんな日常でもあつたら素晴らしいだろうなと言うだけで……ウオッホン。早速話が逸れてしまった。

俺達へステイア・ファミリアの二人がミノタウロスと遭遇した後に生き残ろうとライフカードを選択をした結果、『ヒーロインは助けを求める全力疾走を、主人公は助けが来るまで全力戦闘を……』と言つた展開になつた。すつごいテンプレ的理由！うん！桃太郎も顔を顰める流れだね！（ほのぼのじゃない事や王道過ぎる展開に對して）。

いやまあ、戦闘開始直前の最初は眞面目なシーンが始まりそうになつたんだよ？その雰囲気に「お？シリアルス？」「全力戦闘来ちやう？」とシリアルス先輩が顔を出した程だし。……でもすぐさま「アイアムツ、シリアルスブレイカーツ！」「圧倒的にギャグが足りないぜエ！」とばかりにギャグの神様が舞い降りたんだよねえ。シリアルス先輩は死んだのだ。南無。

で。そのシリアルス先輩が死に、ギャグ神様が誕生した時と言うのは、俺が「さあ、お前の罪を数えろ……！」と某二人で一人の仮面ライダーばかりに格好良く対峙した瞬間。「最初からクライマックスだぜエ！」「行くぜ行くぜ行くぜエエエエツ！」とばかりに全力戦闘が開始されようとした時に――。

――その馬面人体の中層域モンスターは、銀髪美女・金髪美少女に身体を貫かれると言う展開に陥つたのだ。

「何それ？」「あほくさ」「ギャグかな？」と誰もがきつとマジレスするよねコレ。女の子が化け物貫いて登場つて何だよ……（困惑）。

一応は敵であるモンスターであれど、唐突なるミノタウロスの死とその惨状は相対していた俺すら「嫌な、事件だつたね……」と思つてしまふ程に悲しいものだつた。かなしいなあ……敵にすら哀れまれるミノタウロスは今頃、きっと天国で「止めてくれよ……（号泣）」とばかりに届かぬ言葉を悲しみと共に吐き出しているだろう。哀れなり迷宮の怪物、可哀そうに。

――……さて、そんな哀れな迷宮の化け物の事は放つて置き。

それからは、二人に今後の行動をどうするのかと聞かれた。ナンパかな？と冗談交じりの思考をしてしまつたのはこの世界に染まつた証拠だろう。悲しい。

俺が「仲間と合流したい」と答えると、アイズさんがマトモその理由を挙げてから「護衛は如何かな？（要約）」と提案してきた。「ミノタウロスがまだ居るかもしれないし危ないさね！」「露払いにも役立ちますよ！」「変な事？しないよー何言つてるんですかヤダーあつはつは」と言つた少しの本音が透ける諸々のアピール……当然それにベートさんが噛みつかない筈が無く、否定的なコメントをアイズさんに送つた。「下心丸出しだろうが」と。

まあ普通に受け入れてお願いしたんですけどね！

いや、実際この二人が護衛についてくれるのは（尚この二人と言うのはアイズさんが護衛にベートさんも許可無しにつかせようとしていた為）、とてもありがたいだろうと俺は考えた（あと結局常識人が問題児を一人で放つて置く筈が無いだろうと言う考え方）。

未だにミノタウロスが残っていたとして、それの対処はレベル5の二人に任せた方が手っ取り早いし楽だ。もしミノタウロスがとつくり殲滅されていても、他の雑魚の対処に俺が一人でやる時よりも時間は掛からない。ベルと早めに合流しておきたいと言う気持ちが、多重の思考の末にその選択をさせた。

Q・E・D・証明終了！（それっぽい事を理由づけているだけ）

しかし此処で、俺はこの時の選択がバツドテイクだった事を後に知る。回想だから「あつちやー！俺やつてんなあつちやあー！」とデコにペシンと手の平を叩き付ける程に、後悔している。やつぱりソロプレイこそが至高だったのか……『青春とは悪であり、嘘である』なんてばつち大先輩の作文の一説が脳裏に過ぎてしまうよ。

とは言え。

まあその後悔とやらは事実軽いものではあつたのだ。その後悔の原因はこの世界の問題児、アイズさんからのコミュニケーションと言う名のセクシャル・ハラスメント……それが俺達の更新を著しく停止させ、「クエスト：ベルと合流しよう」と言う俺の目的を阻害させやがつたのだ。

そう、始まりは「では護衛、お願ひしますね！」「ああ」「うん」とクエストスタートした瞬間だつた。アイズさんが護衛中の時間を退

屈にさせない為か会話の種を蒔いたのが始まりだ。……「男の人のアレってどんな形なの？」だなんて変態的な質問だつたがなア！

そこで。

それからは、「Q・どんな形?」「A・……キノコ的なサムシング?」や「Q・固くなるつて本当?」「A・あー……はい」とか「Q・見せてくれる?」「A・不味いですよ!」なんて問答を繰り返した後に手を握られてしまつた辺りに、「答えなくていいんだよテメエは!?」「アイズも止めやがれ!」「こんの……ツ!変態が!」……と。会話の種どころか口論の火種を撒き散らしたアイズさんと、それを止め抑え鎮めるベートさんとの、会話が始まつた。

……うん。質問の辺りからの状況を詳しく説明しよう。ちよつと俺も自分で何言つてるか訳分かなくなつてきた。

えーっと、会話が始まつたばかりの状況を説明すれば、「美少女にあんな事やこんな事を訊かれているシチュエーション」と言うものだつた。ふむ、転生する前の世界であれば、美しい少女に性癖や嗜好を根掘り葉掘りと聞かれると言う状況は「マジかよ最高だな」「もつと訊いてツ!何でも答えちやう!」「やりますねえ!」と男共が歓喜するシチュエーションだろう。俺も行動出来ない事に目を瞑れば「おほ、」とはなる。そう、行動不可状態に目を瞑れば。

うん。確かに世界線の異なる野郎共にとつては羨ましい状況となつていたのだけど……ベルと合流したいと考えている俺からすると、バインド状態なのは少々アレだ。例え金髪美少女に手を握られてほんの少しどキリとしていたとしても……身動きを取れなくさせ、こちらの意思を無視する程に暴走しているとなると思う所が出て来てしまう。少しどキドキしてるけど。役得とか思つてるけども。まあ多少はね？

護衛を申し出てから直ぐにアイズさんが質問を始め、その騒動だけで行動出来ないままラーメン出来るんじやないかなと思うほどに時間は経過してしまつたと思う。いやそんなに行かなかつたかも？……どつちにしろ、あの時は常識人ベートさんがアイズの口を閉じさせようと行動しなければもつと酷い事になつていたかもしれない。

うん、常識人からすると色々と白目を剥きそうになる胃痛案件だものね（憲兵サン的な意味で）。お疲れ様ベートさん！そしてありがとう！

まあそれでもアイズさんの舌は止まつてないんだけどね！いつもの口数少ない少女（原作参照）とは思えない程に回りまくつてるよね！別の世界線のアイズ・ヴァレンシュタインとは別人過ぎて、最早そつくりさんなだけかと疑うレベルだよ！

で、そんな別人過ぎるアイズさんは、最初は変態的質問だけだつた。が……少しして、遂には「ところで手は握つてもいいのかな」「男性の手は触れた事が無い」「いいよね。答えは聞いてない」とキャラ崩壊しまくりな感じに身体的接触まで始めた。好奇心の赴くままにし過ぎだろアイズさん！どんだけ異性に興味ありまくりなんだよオ！キャラ崩壊し過ぎイ！

しかし。憲兵出動案件を巻き起こすアイズさんを止めようと、逆にマトモになつたベートさんは咄嗟に彼女を羽交い絞めにした。「恐ろしく速い羽交い絞めだ……俺でなきやあ見逃しちゃうねえ」とばかりに残像が見えるか見えないかのレベルで、「それはもつと駄目だ!?」とマトモな精神を持つベートさんはアイズさんの身体を拘束した！

……が、駄目……っ！一歩遅かつた……っ！

羽交い絞めされる前に唯一触つた……と言うよりかはガツチリ掴んでいる手は全然離れなかつたのだ。ベートさんは今にも抱擁まで突き進んでいつてしまいそうな気がする様子のアイズさんを羽交い絞めして止めるのに必死で、その繫がれている手を放そうとする行動は取れない。俺が言葉でも身体でもその手を解くように訴えて、心身共に受け入れてくれたかった。アンタは本当にアイズさんなんか……（キャラ崩壊が激し過ぎるゆえの疑惑）。

……因みに余談だが、女性が男性に接触した時点で同意の上で無いのなら憲兵＝サンは正義執行する（らしい）。俺が訴えれば、明日のオラリオ新聞には「口キ・ファミリア『剣姫』強制猥褻!?」「団長語る、『いつかやると思つてました』」「ベート・ローガ 止め切れなかつた自分への後悔を吐き出す！」等と紙面を飾るだろう。いややらないけど

も。

そんなマスメディア騒動が起きる事は理解しているだろうに、やはり女は女なのか。男を前に本能と興味と好奇心は抑え切れなかつたようである。…………あれ、今の発言自然なようですんごい不自然な気が。やつぱりこの世界に汚染されてない？（適応とも言う）

常識人（ベートさん）はせめてとばかりに説得をしてはいるが、
アイズさん変態は聞く耳を持たない。ベートさんが漏らす「クソオ！何で止まらねエ!? フインの奴が居ないからか！」「せめてリヴエリアの奴でも——いや、あのババアは男の前だと役に立たねえな」などと言う言葉から察するに、いつものストッパーが居ない事が勢いを加速させてい るらしい。主に団長がストッパーとなつて いるらしいが、今は居ないからか止まる事無くアイズは進み続けて いる。恐らく何処かの鉄華団の団長もその止まらなさつぶりに「何やつてんだミカア！（違う）」と盛大に狼狽える程であろう。

変な方向に道が続いてんじやねえか！何やつてんだよ団長オ！
で。

そんな風に女二人男一人がもみくちゃしていると、ダンジョンの中でワイワイ騒いでいる俺達の元へと当然モンスター達は寄つて来る。そりやあ「私は……君に興味がある」「変態的な興味を抱かれても困るだけだうなア！ソイツの手を放せアイズウ！」「嫌です」だなんて喧しく話し合つていたら寄つて来るだろう。

……いや、もしかしたらそれが要因では無く、ミノタウロスがこの五階層に駆け上つてきた事が関係していたのかもしれないが。妙に魔物が……それも無駄に多く固まつた連中が「逃げるんだよオオオオオオ!!」「もう駄目だア……おしまいだア……逃げるんだア……！」とばかりに全力疾走してきていた気がする。成程、そりやあ束になつて逃げるわな。こつちはクソ迷惑だけど。

まあそんな感じに。

モンスターは道行く先に居る俺達に「其処を退けエエエイ！」「邪魔をするなら容赦せぬわア！」「人じやねエか殺さなきや！」とばかりに叫びながら段々と迫ってきたので、二人は流石に相手をしなければな

らないと察して意識を俺からモンスターの大群へと向けた。

そして、其処から始まつたのは……回想前にあつた例の蹂躪劇。投石による集団抹殺である。

俺の手を名残惜しそうに、いや本当に渋々と嫌々離したアイズさんから始まつたソレは、「これは……詰みです……!」「マジ無理ゲー」「死ぬしかないじやない！」と無念な悲鳴をモンスター達から逆らせ……少しして、その大群は全滅していた。その全てが足元に落ちていた石だつたり、わざわざ壁を蹴り碎いてから手に入れた石によつて即殺されてしまった。……なんで武器を使つて殺さなかつたんですかね？

さてさて。

そうして魔物の大群を一掃した後の場面が、回想に入る前の所……即ち「どうしてこうなつた」とよくあるモノローグに入り始めた所である。回想は要点を纏めて言うと、『護衛をなのに全然進めないまま何だかんだ時間掛かり過ぎて、今も結局動けてないんだよ!』と言う事。恐らくアイズさんが大体の問題の元凶である。

これにて回想で語れる部分は全て終わり。「閉廷！もう君達帰つていいよ！」となる訳であるが……ふむ。回想だけどこれで締めるのは何だがつまらない。自分の思考だが、そうだな……最後に一言言つて面白く回想を終わらせよう。

…………ちくわ大明じ——

……

と、^{ユキハ}彼が回想を終わらせる時を近しくして。

「ンー……ねえ、キミつてLV.1つて言つてたよね？」

「……そう、です……けど……つ？」

「……それにしては随分と速いような……愛の力が能力を高めていたり……つて、そんな冗談を言つている場合じやなかつたね」

「はい……出来れば、もつと速く……ツ！」

「あはは、なんだか更に加速したねえ不思議だなあ」

助けを求めるに超速疾走したベル・クラネルは、その脅威ミソタウロスを退ける事が可能な存在を引き連れて再び限界を超えて走つていた。

ベルは息も絶え絶えにしながら、必死の形相で先程来た道を引き返してユキハの元へ駆け抜ける。先程から一度も休む事無く、脚がいつ纏れて転んでしまっても仕方ない程に彼女は疲労していると言うのに、彼女は止まる事無く走り続けている。それも、限界を塗り替えて加速を重ねている状態で、だ。

そんな白髪赤目の少女の走る姿に、助けに応えた人物……槍を携え並走をする小柄な女性は、思わず苦笑いをしてしまう。

「ユキ、ハ……ッ!!

「…………（失礼だけど、しかしこれは、面白いな）

既に数え切れない程にひたすらその助けたい人の名を呼んでいる、彼女の意志。それを助けを求められた時から目の当たりにしたその槍使いは、折れず挫けず諦めず、ただ助けたいと言う一つの意思を以てここまで必死になれる彼女の事を、「面白い」と感じていた。

話を端的に聞いた中でも、彼女が助けたい人間^{ヒューマン}と言うのは同じく L.V. 1だと言う。その初級冒険者がミノタウロスと遭遇し、尚且つ助けを求めるに彼女自身が走つてから既に分単位で時間が経過してしまっている。そう、格上の怪物と対峙して既に数分と言う時間が経つてしまつてゐるのだ。

中層域生息モンスターと L.V. の少^そ年^ね冒険者^スが仮に逃げに徹したとしても、すぐさま瞬殺されるのが当然の結末だろう。秒殺、瞬殺されるのが当たり前だと言うのに……彼女は。

少^{ベル・クラネル}女は、この数分と経つた現在（いま）でも「まだ生きている」「だから助ける」「絶対に諦めない」と絶望せずに、足を止めなかつた。

「あと、どれくらいだい？」

「次の道を行つてから、後は真っ直ぐ……！」

「なら、此処からは僕^{ボク}が担いでいった方が速いね」

「え……わつ？」

「道が解ればあとは進むだけだからね。行こうか、後の足は任せてく

れ

「……！お願い、します！」

「はは、心得た」

故に、面白い。

走る最中、彼女はずつと加速していた。それは能力の限界ギリギリを出し切っていた……と言う意味では無く。その限界を超えて、更に敏捷を上げてずつと疾走していたのだ。

「助けたい」と言う彼女の想いが、意思が、心が。本気で、全力で、純粹であるから……こうして走っている最中、彼女はずつと加速して助けたい存在の元へ、走っていたのだろう。

……やはり、面白い。槍使い、第一級冒険者である彼女は滅多に見ない純粹な英雄の卵とも言える少女を見て、静かに微笑んだ。

「あの、そう言えば……」

「何だい？」

「名前、聞いてなかつたなつて……今更ですけど」

「……ああ、そう言えば自己紹介はしてなかつたね。ごめんごめん、忘れてたよ」

少女を抱えて走る中、息が整い必死だつた表情が幾分和らいだ様子で、彼女が言ったその言葉に思わず笑ってしまう。そう言えば、確かに自己紹介はしていなかつたと槍使いは初步的な事の忘却に頬を綻ばせる。普段は自己紹介なんて事はしなくとも、相手が既知である事が大半であるから自己紹介を忘れていてしまつた……と内心でも苦笑いを重ねる。

胸元の少女、意図せずお姫様抱つこをしてしまつている兎を思わせる彼女は、疲労が滲んではいるものの可愛らしい笑顔で、自己紹介をした。

「僕、ベル・クラネルって言います。ヘスティア・ファミリア所属です。

……貴女は？」

「……そうだね、僕は——」

僅かに迷う素振りをし。槍使いは胸元の少女から視線を外して、前方を見据えて「まだ僕も有名に成り切れていなかつたかな?」と内心肩を竦めて口を開く。

その女性は、背中に槍を背負い、小人族故の小柄な身体の金髪の女性である。見た目は幼げな少女だが、実際は更に歳を重ねているL

v. 6の第一級冒險者。迷宮都市に居る者、いや都市外に住む者ですらも知つてゐる有名な存在。

【勇者】^{ブレイバ}の二つ名を持つ、圧倒的強者。

「——ロキ・ファミリア団長、フイン・ディムナ」

「…………え」

槍使い……もとい、フイン・ディムナは、彼女の息を呑んで驚愕する様子に笑みを零しながら。

「まあ、【勇者】だなんて呼ばれてる、小人族さ」

前方に確認出来た少女の助けたいだろうと思われる白髪の少年と。

「え、あ、貴女が……ッ！」

何やらその少年に迷惑を掛けているつぽいウチのファミリアの問題児と、それを止めようと頑張っている常識人を見つけ。

「……！ フイン！ やつと来たか！」

「えつ（嘘。何でフインが此処に？）」

「えつ（ファツ!? いや、アレエ!? なんか口りつぽい人がベル抱えながら走つてるんだけどあれフイン団長なのオ!? またTSかア!?）」

取り敢えず。

「——お説教だよアイズウ！」

「あつごめんなさいたたたたたた」

少女を少年の元へ丁寧に置いてから、思いつ切りヘッドロックをかました。

オリ主が居ない時のシーンは何故かシリアルス成分マシマシになるのは何でかなつてお話。

少女、ベル・クラネルが助けようとしていた恋人のユキハと合流し、助けを求められたフイン・デイムナがその彼に迷惑を掛けっていたアイズ・ヴァレンシュタインにお仕置きを繰り出す、少し前。

助けを求めて全力疾走するベルが「ミノタウロスを倒せる強者」を見つけたのは、丁度その怪物(ミノタウロス)が貫かれた光景を目にしたからだ。

「誰か、ユキハを助けられる人を、あの化け物を倒せる存在を」。それを求め、視線を目まぐるしく回しながら風よりも早く走るベル。そのベルの視線が止まつたのは、漸く見つけた人……それも集団で行動するパーティーと思われる彼女達だった。

「ようやく見つけた」。そう思いながら、その集団に近づこうと走る方向を定めると同時に、ベルは彼女達が何かと相対しているのに気付いた。

「――ミノ、タウロス」

思わず、脚が止まつてしまつた。

思い出される恐怖が、足を止めてしまつた事により胸の内から蘇る。必死に「ユキハを助ける」と言う想い、「早く強者を探す」と言う焦燥感によつて塗り潰されていた恐怖が、ミノタウロスに与えられ刻み込まれた恐怖が蘇つた。

舌の根が渴き、呼吸が落ち着かなくなり、身体の芯が冷える。「助けなければ」「求めなければ」「走らなければ」、そう考えても、まるで金縛りのように身体が動かなくなつた。

彼女の心には、命の危機による恐怖(トラウマ)が刻み込まれていた。ユキハが居て、抱えてくれたからこそ命があるが、きっと彼が居なければ今頃身体はある蹄に踏み潰され壊されている。

咆哮が脳裏に蘇る。あの身体が竦み、硬直し、崩れそうになつた叫びを。……最初は逃げられた。けれど脚は縛れ、ユキハに抱えられた。そして追い付かれた。

そして、ユキハはあの恐怖(ミノタウロス)に立ち向かつた。僕は逃げた。

今頃、彼は僕が助けを呼んでくる時間を稼ぐ為に戦っている。今頃、彼はもしかしたら善戦しているのかもしれない。今頃、彼は苦戦しているのかもしれない。

——今頃、彼は死んでいるのかもしれない。

今、彼はどうなっているのか。それを考え、違う恐怖が生まれた。刻み込まれたモノではなく、自分の心から生まれた恐れ。

彼が死んでしまうかもしれない。

死んでいるかもしれない。

消えるかもしれない。

居なくなってしまうかもしれない。目の前から。僕の前から。世界から。僕の世界から。僕から。ずっと。これから。永遠に会えない。逢えなくなる話せなくなる笑えなくなる触れられなくなる愛せなくなる愛されなくなるずっとずっと消える消える死ぬ死ぬ死ぬ死んでしまうユキハが目の前から消える嫌だ怖いそんのは嫌だ寂しい悲しい苦しい嫌だ嫌だ嫌だ——嫌だ。身体が、震えた。

彼が消えてしまう。それを考えただけで、悲しさで、寂しさで、苦しさで、恐怖で。自分が震えるのを、ベルは感じた。

そしてそれを考えて、思つた。確かに、怪物（ミノタウロス）は怖い。足が竦み、心が挫け、涙が零れそうになる。

……だが。

……だがしかし。

ユキハを失つてしまふ事の方が、もつと怖い。
拳を握る。息を整える。膝を曲げる。前を向く。

そうだ、確かに僕はミノタウロスが怖い。けれどそれより、ユキハが居なくなってしまう事の方がもつと怖い。

今ここで、ミノタウロスに怯えていたらユキハは助けられない。腕を振るわなければ道は開けない、脚を動かさなければ前へは進めない、心が挫けていたら何も出来ない。今、この恐怖(ミノタウロス)に勝たなければ——更に深い、恐怖(ユキハの死)が待つていてる。

そんなんのは認められない。

今僕は、何をしている？……ただミノタウロスを見ただけだろう、相対しただけだろう。

今僕は、何故止まっている？……ただミノタウロスを見ただけだろう、戦つてすらいない。

今僕は、何故走らない？……ただミノタウロスを見ただけだろ、吠えられもしていない。

今僕は、何故動かない？——ただ、ミノタウロスを見ただけだろ！まだ、何もしていない！何も出来ちやいない！

息を吸い込み、グツと、心の恐怖を殺す。

「何をしてるんだ、僕は。まだ、走つただけじゃないか」

目の前に光は、助けられる者は居るだろ。直ぐ近くに化け物が居るからって、脚を止めていい理由にはならない。

目の前に可能性は、助けてくれる強者が居るかもしれないだろ。怖いからって、立ち止まつていい訳が無い。

目の前には、求めていたものが在るだろ！いつまでも止まつて居んじゃない、さっさと走り出せ！

「走れ……走れ、ベル・クラネルッ！」

奮い、走る。止まつていても、何もなる訳が無い。じやあ走るしかない。いつまでも、止まるな。走れ。

恐怖を殺し、彼女……ベル・クラネル恐怖は走つた。目的はただ一つ、助けたい人を助ける為に。目の前の、希望に向かつて。

……走つたその時、確かに彼女は見た。希望ミノタウロスが恐怖を貫き、確かに求めたモノが居る事を。

♀↑?↑♀

『ヴ、ヴォ——』

ミノタウロスが、灰になる。

それを見届け、自身の獲物である《フォルティア・スピア》に付着した血を振り払い……彼女は一息吐き、背負う。

どうにか間に合つたかな、と思いながらその小人族（パルウム）の

女性……槍使いは自身が守った初級冒険者の面々へ視線を向ける。自身がギリギリでやつてきて、その上彼女等にとつて歯が立たない存在を倒したのを見て……とても安堵したような笑みを浮かべ、安心し過ぎたのかその場にペタリと座り込んでしまった。

「あ、ありがとうございました……！」

「し、死ぬかと思つたあ……っ！」

「本当にありがとうございました！もう、なんていえбаいいか……」

ワンパーティー、恐らくは同じファミリアのメンバーだろうか。L v・2にも満たないであろう初級冒険者達が安堵の笑顔と共に礼を言つてくるのに対し、「いや、気にしなくていいよ」と槍使いは返した。「元はと言えば、此方が原因」……と喉まで出掛けた後、しかし不要な言葉だろうと飲み込む。代わりに、「無事そうで良かつたよ」と労いの言葉を送る。フツと笑みもついでに向ければ、その初級冒険者達は「はい！」と元気に返事をした後、再度礼の言葉を言つてきた。

そうして何度も礼を口にし、是非何かお礼を……と食い気味に言ってくる彼女達に「いや、言葉だけで十分さ」と返しながら、槍使い……ロキ・ファミリア所属、団長のフイン・デイムナは心の中で溜息を吐いた。

五階層でミノタウロスが現れると言う異常事態……その原因であるロキ・ファミリアの団長は、ギルドへの報告や他の面子が妙な事をしてないか等と懸念事項が多い事に胃が痛むのを感じる。イレギュラー

ロキ・ファミリアが遠征から地上へと戻る際、途中で遭遇したミノタウロスの群れが何故か逃走し上の階層に上る、と言う謎の行動を起こした。その行動に対し、他の冒険者への影響を考えフイン等の足の速いメンバーがその逃走したミノタウロスを追い掛け、拳句には五階層にまでやつて来てしまった現状に「何なんだこれは」とフインは内心で呟く。

五十一階層で遭遇した謎の芋虫型モンスターと言い、今日は厄日かな？と苦笑いしながら、初級冒険者達の礼を適当に聞き流す。会話の裏では、これからどうするかを思考する。

「しかも、ロキ・ファミリアの【勇者】……フインさんに助けて貰え

ブレイバー

るなんて……！」

「もう、感激です！お礼を……！」

「お茶でも、どうでしようか!?」

「……お礼もお茶も、遠慮しておこうかな」

メンバーは各々ミノタウロスを殲滅しているだろうし、後は狩り漏らしが無いかが不安だな……それとアイズ。やつぱりアイズ。……他のファミリアの男に迷惑掛けてないかな……いや、そもそも珍しいからそんな事態はまず無い、と信じたいなあ……。

ロキ・ファミリア筆頭の苦労人、フインはロキ・ファミリア筆頭の問題児であるアイズに「次はどんなお仕置きがいいかな」と既に罰の内容を考えていた。何をするか、と思考から仕置きの内容の思考へとなってしまっている辺り、アイズの問題児具合がよく分かる。

因みに毎度するお仕置きの幕開けの一発は、ヘッドロックである。巷ではしそつちゅうアイズにヘッドロックをするのを見る人々により、それに関する非公式の二つ名がオラリオに出回っている。例として、【剣姫殺し】や【絞落小人】などである。

「（……つて、違う。取り敢えずアイズの事はいいんだ）」

考え事をする際、真っ先に問題児の事について思考してしまった癖が付いた胃痛持ち。一先ず問題児についての思考は止め、まだミノタウロスが居る可能性を脳裏に閃かせる。そう、確かに今はミノタウロスの殲滅中。であれば、此処にいつまでも留まっている訳にはいかないだろう。

会話しながら、それでいて恐ろしい思考速度で考え事を終了させたフイン。まずるべき事は、「他の場所にミノタウロスが居ないか探し、見つけ次第処理する事」であると再認識した彼女は、この初級冒険者達の誘い文句を断ちこの場を離れよう、とその思考通りに行動に移す。

ニコリ、とフインは改めて微笑みを顔に張り付ける。

「すまない。他の場所にミノタウロスがまだ残っているかもしねないんだ、先を急がせて貰うよ」

「えつ、そんな」

「まだお礼をつ

「待つて下さいよつ」

冒険者達が言つてしまふフインに慌てて口を開く中、フインは既に彼女達から背を向けていた。「要件は伝え、更には火急の用でもあるこれを担つている自分を強くは引き留められないだろう」と、昔から色々と誘い文句を受けて来た経験豊富な四十代小人族はそう考えながら、走る準備をする。

さて、では行こうかな……と、脚に力を込めた瞬間。

「——待つて下さい！」

背後から、強く呼び止められた。それを無視して飛び出そうか、と考えたがその声音は先程の集団の誰のものでも無い事に気付いた。つまりは、助けた初級冒険者達とは違う誰かが自分を呼び止めた事になる。

であれば、違う誰かが自分に用があるのか。ならばその声に応える必要がある。脚に込めていた力を抜き、クルリと身体を反転させてそちらを向き……フインは、少しばかり驚いた。

確かに、先程の集団の人間とは違う人だつた。だが、フインが驚いたのはその様子……ボロボロな戦闘衣バトルクロスを纏っている事と、今にも泣きそうな表情をして面食らつてしまつた。

「お願ひです……！助けてツ、助けて下さいツ！」

切実な願いをフインに吐き出したその少女は、本来はとても可愛らしい女の子なのだろうとフインは感じた。

その白髪はふわりと揺れ、くりくりとした瞳は赤い。顔立ちも整つていて、総評するなら兎のような可愛らしい女の子だ。きっと笑えば愛嬌があり、癒しを齎す善い少女なのだろう。フインは、その様子を除いた彼女をまず認識した。

しかし、と。「これは酷い」とフインは眉根を寄せた。

泣いている。その表情は可愛らしい笑顔では無く、必死に助けを求める悲壮な表所に彩られていた。

纏う戦闘衣バトルクロスは、恐ろしくボロボロだ。傍から見て苛烈な戦闘を潜り抜けて来たのが容易に分かる。その手に持つナイフもそうだ。ボロ

ボロで、既に刃物として扱えない程に脆く崩れかけている。

その身に少くない傷を受け、自身とモンスターの血に塗れ、見る限り身体的にも精神的にも少くないダメージを受けている。それでも、挫けず此処に来た少女。

……たつた、一目見ただけ。

しかしフインは、その少女を一目見ただけで「勇気ある者」として評価し、認識した。

「何があつたんだい」

フインは笑みをかき消し、問いかながらポーションを少女に振り掛けた。少くない傷を受けていたそれを取り敢えず治し、その赤い瞳を見つめながら問い合わせをする答えを待つ。

少女、白髪赤目の彼女はポーションを突然掛けられた事に一瞬驚きながら、その瞳に逸る気持ちを隠し切れないまま質問に答える。荒い息を正す事も無く、汗を拭う事も無く、勢いのままに。

「ユキハが……ッ、仲間が今、ミノタウロスと戦ってるんです！僕は助けを呼べって言われて、それで—————ッ」

答えは直ぐに返つて来た。

涙を潤ませ、胸の内の感情そのままの勢いで。汗を垂らし、逸る気持ちの状態そのままの勢いで。息を荒げ、自身の望むものを伝えようと直後に。

その答え、彼女の望む者を理解した【勇者】^{ブレイバー}は、迷い無く応えた。

「——分かつた。助けよう」

理解、決断、即答。説明途中の彼女の言葉を遮り、フインは彼女の肩に手を置き言つた。

【勇者】だからこそ解る。

一目見て理解出来る程のその早く助けたいと言う想い。自身の無力さを嘆く瞳。諦めず助けをこうして見つけ出した勇気が。——

——求められたのならば、それらに応えるのが僕だ。

【勇者】ならば、この目の前の強い意志に応えなければならぬ。その向かはれ請われ求められ願われた、勇気ある人に。フイン自身、瞳に光を灯らせる。

ロキ・ファミリア団長【勇者】^{ブレイバ}の名を冠する小人族（パルウム）、フイン・デイムナは助けると決めた。言葉はそれ以上要らず、ただ、後は導くのを望む。

そうすれば、僕^{ボク}が助ける。

「案内は頼むよ」

「…………！　はい！　こつちです！」

その言葉を交わすと同時に、二人は駆け出した。フインは少女の後を追い、その前を行く少女は助けを引き連れユキハの元へ疾走する。早く、早く、疾く。

初級冒険者達を背に、少女がやつてきた方向へと真っ直ぐに。彼女の道案内の元、助けを求める存在の元へ走る。気持ちに呼応してか、更に加速して行く少女。その光景に瞠目しつづけ、不意に笑ってしまう。

「（此処まで必死になつて走れる相手なんて、もしかして恋人か何かかな？）

無粋な詮索かな、と内心微笑む。まあこんな男性の数が少ない世界で、恋人って言つたら大抵女性だから……この子は同性愛者なのかな。

…………同性愛者なのか。

それはまあ、純朴そうで純粹そうで無邪氣そうな見た目なのに……だつたら余計に異性とのアレコレに憧れるんじや……ああ、その相手に誑かされたのか。なんだかチヨロそうだし、納得だ。きっと酒を飲まされて、そのまま襲われちゃつたんだろう。

それにしては、随分と好かれているけど。……いや、もしかしてこの子が相手にアタックした可能性も……？

…………最近の子はすごいなあ。

——LV. 6、フイン・デイムナ。四十代、なんだか婚期が気になつて来たお年頃。どうやら目の前の少女の色恋沙汰にも興味津々のようである。

そんな無粋な思考をしていた婚期遅れ小人族^{バルウム}……もとい、フインに、前方を走る少女から「あのっ」と声が飛んで来る。一瞬思考を読

まれ叱咤が飛んで来る？と身を固めたが、違う内容の言葉が飛んできた。

「L·v. 1で、ミノタウロス相手に一分以上の戦闘は、可能ですか？」

走りながら、息を所々切らしながら飛んできた質問。それは恐らく、今助けに行つている仲間の状況なのだろう。客観的に、それをどう思うか気になつたのか……少女はフインに見解を求めた。

……数秒、フインはどう返答するべきか考え、

「……普通は、不可能。生きてはいられないだろうね」

「つ……」

素直に答えた。

事実、普通であれば不可能だ。前提として、レベルの差と言うのは明確に線引きされる実力、その格差の事だ。L·v. 1であれば、常識としてL·v. 2にカテゴライズされるミノタウロスを相手に戦闘が成り立つ筈が無い。

其処に在るのは対等な戦いでは無く、蹂躪。格上が格下を躙り殺す、あまりにも惨い戦いとは言えない酷い光景だ。

であれば。それに当て嵌まるそのL·v. 1の仲間とL·v. 2のミノタウロスが相対し、一分以上も時間が経過している現在でも生存している可能性は。

「予め言つておこう。その仲間がミノタウロスと戦闘して、今も尚生きていると言う可能性は、限りなく低い」

「……それは」

「君としては生きている事を祈りたいんだろうけど、普通であれば生きる事は出来ないね。一応、心構えはしておくといい」

「……」

フインが事実を告げると、一瞬、少女が走る速度が落ちた。

……それを尻目に、フインは続けて言葉を少女に重ねる。確かにフイン自身そのままに、仲間の事を助けてあげたいとは思つている。それは本当だ。

しかし、その状況でその仲間が生きていると言う確証が無いのもま

た事実。彼女もそれはきっと分かつていて、しかし諦めきれずその生存を願っているからこそ、その事実からは目を逸らしていたのだろう。

それが、当然だ。嫌な事からは目を背けていたいのが、人間なのだから。希望ばかり見ていると、突然それが絶望に裏返った瞬間の衝撃は恐ろしく強くなる。であるなら、辛い事だが改めて彼女には意識して貰わなければならない。

嫌な役回りだと思いながら、フインは自分から進んで口にする。死の可能性と言う、目を背けたくなる絶望を、少女に突き付ける。

「運が良ければ、誰かに助けて貰っているかも知れない。何かがあつて、まだ生きているかも知れない。でも、それは所詮希望的観測に過ぎない」

「……」

「いいかい、分かつてている事だろうけど僕（ボク）は言うよ。その仲間が死んでいる可能性は十二分にある。だから、現場に到着して其処に何かがあつても——」

「…………」

「——それは仕方が無い事だと、受け入れてくれ」

もしかしたら、言う必要は無かつたかも知れない。けれど、僕はそれを口にした。

……口にした言葉は戻つて来ない。返つて來るのは、言葉を向けた相手からの返事だけだ。こう言つた状況において、絶望的な事実を認識しようとしている人をフインは何度も見てきた。同じファミリアの人間でも、違うファミリアの人間でも、知り合いでも、赤の他人でも。何回も回数を重ねる内、こうして前置きをしていた方が一番その人の衝撃が少なかつたり、その選択の方が一番良いとフインは知つた。

そして経験から、次に返つてくるのは……感情的な言葉だろう。「うるさい」「知つてる」「黙れ」と言う荒々しい言葉が飛んできた時もあるし、「大丈夫大丈夫」「平気だよ」「生きてるに決まってる」などと言つた諦觀に満ちた言葉が返つて来た事もある。人によつて違うが、

その時には心の本音が返つてくる点は共通していた。

「（まあ、今回もそうかな。勇気ある、つてのは認めてたけど）」「

果たして返つて来たのは、諦観か、憤怒か、悲哀か、それとも——

「分かつてます！」

——と、フインの予想に反して。

「普通であれば、確かに死んでいると考へてゐるかもしれないです！」

少女の声は走りながらであつたからこそ絶え絶えで荒かつたが、穏やかだつた。

「でも！ユキハなら大丈夫ですッ！」

その声音に乗つてゐるのは、確かな信頼。

「確かにあつさり、死んでるかもしれないです！それは怖くて、泣きそ
うなくらい、嫌な事です！」

少女の胸に在る、確かな本音。

「でも、今考へて思い出したんです！ユキハは、僕が悲しむ事を絶対に
しないって！」

不安を、その仲間が確かに積み重ねて來た過去が。今の少女が向ける深い信頼で塗り潰していた。

「嫌な事なんて何一つしなくて、ちよつと怒つちやつても許してくれ
て、いけない事をしちゃつた僕から離れないでいてくれた！」

僅かに振り返り、フインに向けたその笑みは……何より、自身に満ち溢れていて。

「だから、信じてる！ユキハは死なないで、きっとまた僕の前から消え
ないでいてくれるつて！」

信頼、好意、期待、信用、愛好——その笑みに満ち溢れる希望

が、確かに存在するであろう絶望を打ち消していた。

「」

絶句、後に破顔。

フィンは今まで一度も無かつた返答に、思わず頬を吊り上げた。成程、確かに感情的な答えた。前例は無かつたが。成程、成程。

……面白い。久し振りに、腹を抱えて笑える程面白いと感じたかもしれない。

フィンは更に、笑みを深くした。既に前を向いた少女の背を見て、僅かに笑い声を零し。

「すまなかつた、全て杞憂だつたようだ。君には、そう言うのは要らなかつたようだね」

「？……そう言う、の？」

「いや、分からんならいいよ」

フィンはその後ろから、少女の隣へ並び出て並走に切り替えた。突然隣へやつて来たフィンに驚きながら、再び前を向く。その疾走は、胸の内に湧いている感情を糧にしているかのように、更に加速していく。

前を見据え、ひたすら走っている。白髪赤目の、仲間に絶大な信頼を向けている少女。勇気ある、久し振りに面白いと思えた少女。

……改コンバージョン宗、勧めようかな。

懸念事項を頭の中から放り出し、冗談交じりな思考をしながらフィンは「フツ」と笑い声を漏らした。

「いやあ、其処まで信頼される仲間も凄いけど、君も君だよねえ。何だい、恋人かい？」

「ふえっ!? えっ、いつ、あつ…………ツ、…………はいい…………」

「（かわいい）」

……そして、少し後。

少女——ベル・クラネルは助けたいと必死に走っていた相手……ユキハ・スノウリイと無事に合流する事が出来た。フィン自身は

その感動的な合流に内心ニコニコしていたのだが、当のユキハ君に迷惑を掛けたいた問題児にお仕置きするのに忙しかつたので、合流直後に「おめでとう」「良かつたね」と言葉を掛ける事が叶わなかつた。だが。

そんなヘッドロックを掛けているロキ・ファミリア団長と、ベルに猛烈に抱き締められチュツチュされているヘスティア・ファミリア副団長が言葉を交わし、苦労人同士意氣投合する未来に辿り着くのは……。

「痛い痛いフイン本当に痛いあつあつあ」

「何人様の恋人に手を出してるのかなアイズウ！」

「えつ」「えつ」

「えつ？」

「ユキハアアアアアア!! 良かつたよおおおおお!!」

「あ、ああ。すまなかつた、いや本当に……ベル、待つてくれ、力強くないか?」

「ううぐうう……つー生きてて、生きててくれてありがとおおおおおお!!」

「まあ、死なないって言つたろ？俺は約束は守る男だからな。……で、なあ、腕締まつてすつげえ痛いんだががが」

…………もうちよつと、先のお話。

♀♡♡♡♂